

仙台市文化財調査報告書第270集

仙 台 城 跡 3

—平成15年度 調査報告書—



2004年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第270集

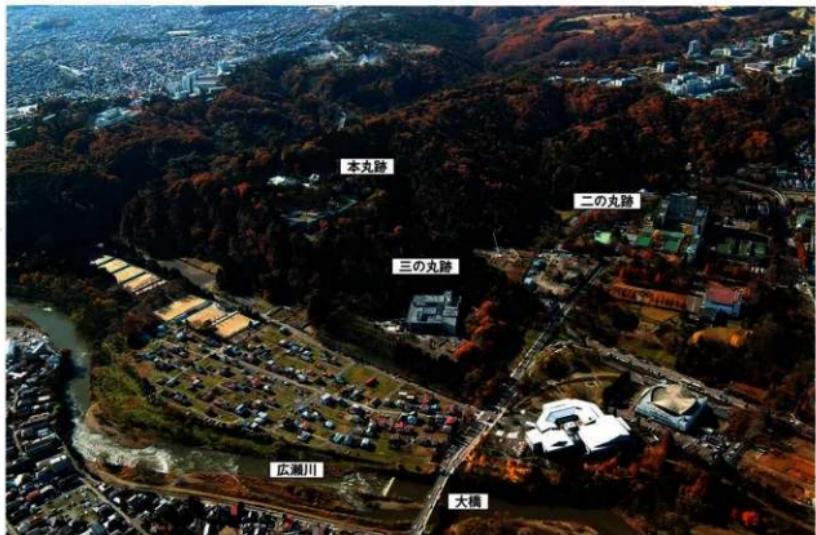
仙 台 城 跡 3

—平成15年度 調査報告書—



2004年3月

仙台市教育委員会



仙台城跡鳥瞰写真（北東より・2003年11月撮影）



仙台城跡航空写真（北が上・2002年1月撮影・赤ラインは国史跡指定範囲）



奥州仙台城絵図（南が上・仙台城部分・正保2・3年【1645・1646】）齊藤報恩会蔵



仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿绘図・(左)大広間部分 (右)御成門部分 (江戸時代) 仙台市博物館蔵



7次調査 大広間跡南辺部分（2区）遺構検出状況（北東から）



金銅金具 [No.59]



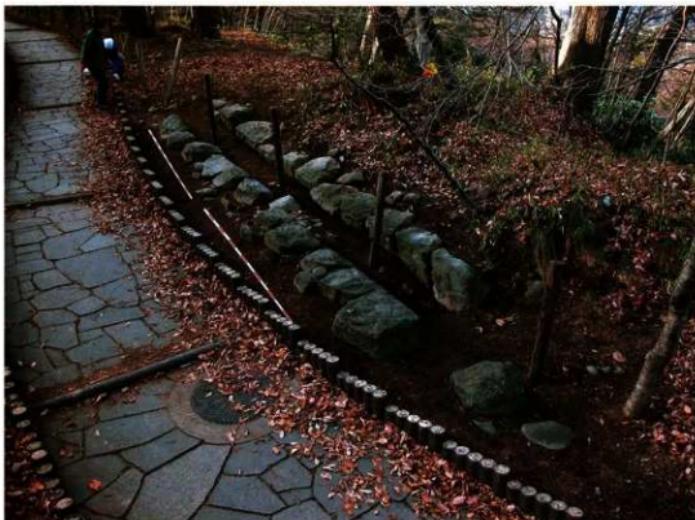
銅釘 [No.115・554・563・614]



調査区位置図 (1/10,000)



7次調査 御成門跡（1A区）礎石周辺遺構検出状況（西から）



8次調査 登城路跡（3区）石組側溝検出状況（南東から）



8次調査 登城路跡（1区）瓦出土状況（東から）



8次調査 登城路跡（6区）土壌断面精査状況（北東から）



調査区位置図（1／10,000）



9次調査 広瀬川護岸石垣（北東から）

序 文

17世紀初頭に初代仙台藩主伊達政宗が仙台城を築き、城下町・仙台を育んで以来、仙台は急速な発展を遂げ、人口100万人を超える日本有数の大都市となりました。都市化が進み、かつての城下町の町並みが失われつつある中、仙台城跡は青葉城や天守台という愛称で親しまれ、市民の歴史的シンボル、心のふるさととして生き続けてきました。

仙台城跡は、戦前から第一級の近世城郭遺跡であるとの評価を受けており、昭和20年の空襲で焼失した大手門は国宝に指定されておりました。平成9年から始まった石垣修復工事に伴う本丸跡の発掘調査や平成13年から始まった本丸大広間跡の発掘調査成果などを通して、その歴史的評価が高まり、平成15年8月27日付けの官報告示により、仙台市民の念願であった仙台城跡の国史跡指定が決定いたしました。

築城より400年余り、伊達政宗が築いた仙台城跡は、仙台市民のみならず日本国民の宝となり、未来永劫守られ、皆様に愛されていくことになりました。今回の国史跡指定に際し、ご指導ご協力いただきました文化庁をはじめとする関係諸機関の皆様、そして市民の皆様に深く御礼申し上げます。

さて、今年度は、仙台城跡全域に及ぶ遺構現況調査や大広間跡・御成門跡の発掘調査、本丸に至る登城路跡の発掘調査、広瀬川護岸石垣の測量調査などが行われました。本丸御殿の主要な建築物であった大広間跡の発掘調査は今年度で3年目を迎え、これまでの調査成果から、その規模や構造などを解明する多くの資料を得ることができました。大広間跡から出土した金銅金具からは、江戸時代初期の金工職人の優れた技術や、豪華絢爛な装飾が施された仙台城大広間の姿が想像されます。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、ご指導、ご協力を賜りました多くの方々に深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成16年3月

仙台市教育委員会
教育長 阿部芳吉

例　　言

1. 本書は、仙台城跡の平成15年度遺構確認調査の報告書である。

2. 本調査は、国庫補助事業である。

3. 本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。

本文執筆 渡部 紀 (IV・VII章)

中山 純・豊村幸宏 (VI章)

伊藤 隆 (I・II・III・V・VI章)

編集は、渡部、中山、伊藤がこれにあたった。

4. 金属製品の分析は奈良大学文学部文化財学科教授西山要一氏、土壤サンプル分析は㈱古環境研究所、金属製品の保存処理は㈱東都文化財保存研究所、石垣測量は国際航業㈱に依頼・委託した。

5. 本書中の地形図は、国土地理院発行の1:50,000『仙台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。

6. 遺構図の平面位置図は平面直角座標系Xを用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。

7. 遺構略号は、全遺構に通し番号(国庫補助調査による検出遺構番号:KS-)を付した。

8. 本報告書の土色については、『新版標準土色帳』(吉山・佐藤:1970)を使用した。

目　　次

序　　文	8. 絵図・文献資料の検討	38
例　　言	9. 柱間寸法尺度の検討	40
I はじめに	10. まとめ	42
II 仙台城跡の概要	VII 第8次調査	
III 調査計画と実績	1. 調査経過	44
IV 第6次調査	2. 発見遺構と出土遺物	44
V 第7次調査	3. まとめ	53
1. 調査経過	VIII 第9次調査	
2. 基本層序と旧地形	1. 石垣の位置	54
3. 発見遺構	2. 測量結果	54
4. 石材調査	3. まとめ	54
5. 出土遺物	VII 総括	57
6. 金属製品の分析	写真図版	59
7. 土壌分析		

I はじめに

平成15年度は、仙台城跡遺構確認調査の5ヵ年計画の3年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略・順不同)

調査主体 仙台市教育委員会(生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室)

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導、助言を受けた。

委員長 斎藤 誠雄(宮城県農業短期大学名誉教授 近世史)

副委員長 岡田 清一(東北福祉大学教授 中世史)

委員 鈴木 啓(福島県考古学会会長 考古学)

西 和夫(神奈川大学教授 建築史)

北垣聰一郎(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 石垣・城郭研究)

千田 嘉博(国立歴史民俗博物館考古研究部助教授 城郭考古学)

仙台城跡調査指導委員会開催日

第7回: 平成15年8月29日 第6次・第7次調査中間報告、現地視察

第8回: 平成15年12月3日 第7次・第8次・第9次調査中間報告、現地視察

第9回: 平成16年3月17日 第6次・第7次・第8次・第9次調査結果報告、現地視察、平成16年度調査計画

発掘調査及び遺物整理にあたり、方々から御協力をいただいた。

宮城県護国神社、青葉山公園仙台城石垣修復工事: 鹿島・横本・新星建設共同企業体

資料提供 宮城県図書館、斎藤報恩会、仙台市博物館

さらに、下記の諸機関の方々から適切な御教示・御協力をいただいた。

磯村幸男、本中 真、坂井秀弥、加藤真二、玉田芳英(文化庁文化財保護部記念物課)、

阿部博志(宮城県教育庁文化財保護課)、久保智康(京都国立博物館)、西山要一(奈良大学)、

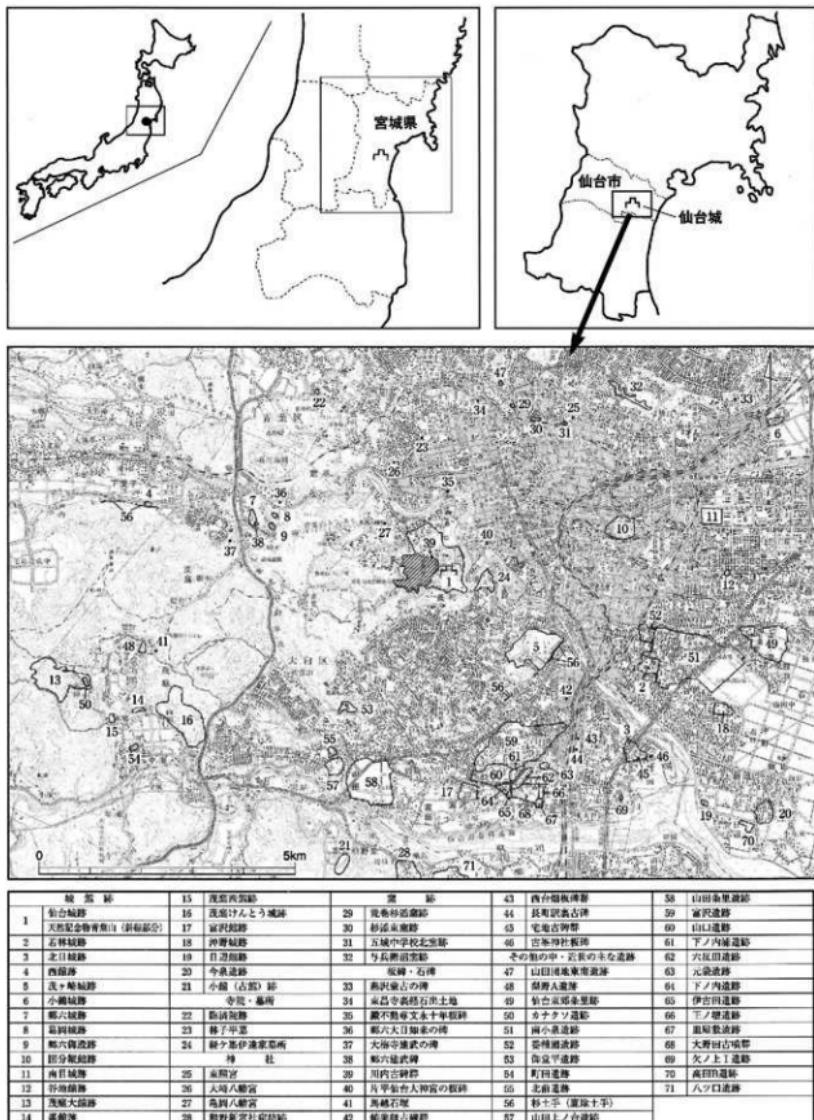
北野博司(東北芸術工科大学)、森沢 敦(東北大隈蔵文化財調査研究センター)、

東北大隈蔵文化財調査研究科附属植物園、武藤正幸(財团法人文化財建造物保存技術協会)、

前田有紀子(元椎宮二条城管理事務所)、梅村敏明(圓城寺事務所 光淨院・勸学院)、

佐藤 洋(仙台市博物館)

調査担当	文化財課	課長	青柳 良文
		主幹	田中 則和
	仙台城史跡調査室長	金森 安孝	
		主任	大村 仁
		教諭	渡部 紀
		文化財教諭	豊村 幸宏
		文化財教諭	中山 純
			伊藤 隆



第1図 仙台城跡と周辺の遺跡

II 仙台城跡の概要

1. 仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口川の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸跡は位置する。本丸跡の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は高さ約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には御裏林と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物青葉山となっている。御裏林付近からは、3条の大規模な掘切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡東側に位置する大手門跡付近には、約9mの高さを有する石垣が残り、南側には大手門脇櫓が昭和49年に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を土塁と土壘に囲まれ門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川護岸部分には260mに及ぶ石垣が残存している。

2. 仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長5年〔1600〕12月24日、城の繩張りが開始され、翌年1月から普請に着手、工事は慶長7年〔1602〕5月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸結門に至るものと、巽門・清水門・沢門を通るものがある。

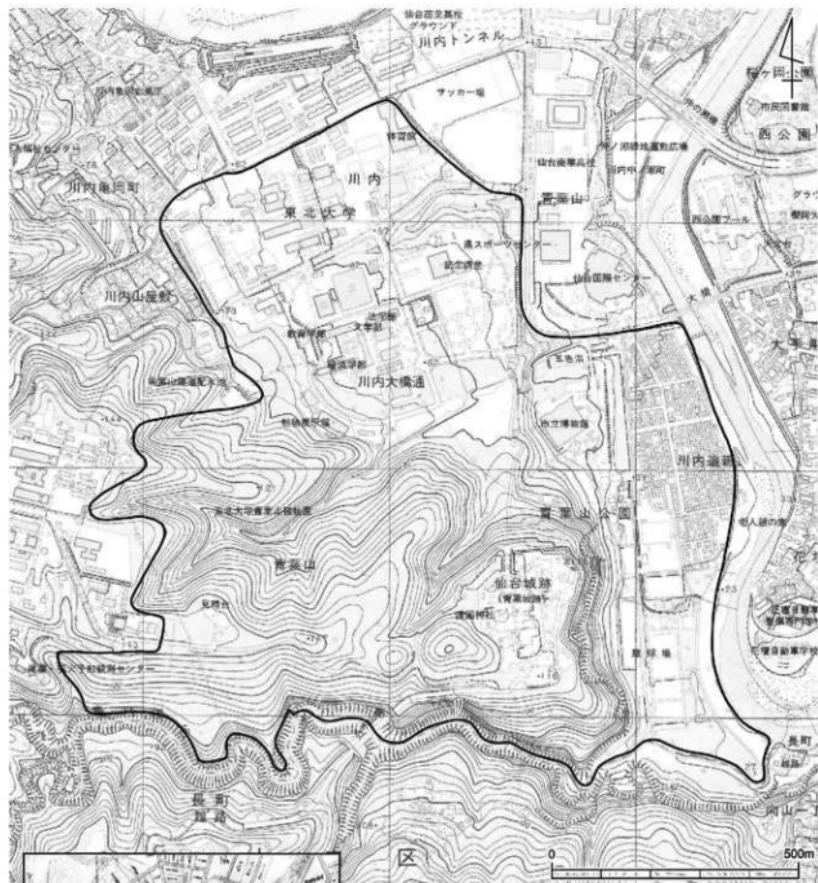
絵図や文献などによれば（註1）、本丸には結門に入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓は三重の隅櫓であったが、正保3年〔1646〕4月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註2）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年〔1882〕の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年〔1945〕

7月、太平洋戦争による米軍の空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や隨所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前に、この地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註3）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。



第2図 焼失以前の大手門と脇櫓（昭和10年頃）



第3図 仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲・1/10,000）



第4図 仙台城下絵図
(仙台城部分・寛文4年 [1664])
宮城県図書館蔵



第5図 仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣。
解体修復工事前（北西から）

3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年〔1983〕から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註4）と仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年〔1983・1984〕に実施された三の丸跡の発掘調査（註5）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第1次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成9年〔1997〕度から実施されている。（註6）この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成9年〔1997〕7月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年〔2000〕9月に石材9,106石と二期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年〔2004〕3月に工事が終了した。

石垣解体に伴う発掘調査により、現存石垣（三期石垣）背面より二期にわたる旧石垣（一期・二期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、一期から三期までの石垣の変遷や構造を確認した。石材調査では各種の刻印や朱書き、墨書きなどを多数検出し、矢穴や石材加工の変化も確認している。石垣は表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容が顕著であり、発掘調査で石垣背面の土木工事の痕跡を考古学的な手法によって層位的に精査し、盛土の重複関係や採集遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により大別している。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（一期）し、地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（二期）され、その後の地震によりこの二期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（三期）されたとして検討を重ねている。（註7）

註1 「仙台城下絵図」（寛文4年〔1664〕宮城県図書館蔵）や「貢山公造城郭本写之略図」（四代藩主綱村時代、17世紀後半（准定）宮城県図書館蔵）には、本丸御殿の建物群が描かれ、「貢山公治家記録」にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「仙台城の建築」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）「仙台城館および周辺建物復元考」（仙台市博物館「調査研究報告第6号」1986）伊東信雄「仙台城の歴史」三原良吉「仙台城年表」（仙台市教育委員会「仙台城」1967）などがある。

註2 義山公治家記録、正保3年〔1646〕4月28日條。

註3 真山公治家記録、慶長5年〔1600〕12月24日條。

註4 東北大埋蔵文化財調査会年報1-17（東北大埋蔵文化財調査センター1985～2002）

註5 発掘調査報告書「仙台城三ノ丸跡」（仙台市教育委員会1983）

註6 仙台城跡石垣修復等調査検討委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）

註7 本丸1次発掘調査成果に係る主な参考文献 金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル442号』1999）金森「仙台城本丸の発掘と出土両磁」（『貿易陶磁研究No.19』1999）金森、我妻仁「仙台城本丸跡 築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル456号』2000）我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第2号』2000）金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史第262号』2000）我妻「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と剥落（予察）」（『宮城考古学第3号』2001）金森、我妻「仙台城本丸跡三期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル474号』2001）金森、根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル484号』2002）伊藤隆「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学『石垣音譜の風景を読む』2003）



第6図 本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（I・II期）検出状況（北東から）



第7図 本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）

III 調査計画と実績

平成15年度は、仙台城跡遺構確認調査の5カ年計画の3年次である。5カ年計画では、国指定史跡となる仙台城跡の全体像を把握することを目標として、遺構の遺存状況と石垣の破損状況を確認していくことを目的とする遺構確認調査と石垣現況調査を実施している。これまで2年次にわたる調査により、本丸大広間跡や巽櫓跡、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

第1表 これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第1次	(本丸) 大広間跡 (1次)	185m ²	平成13年9月17日～12月27日
第2次	清水門跡付近石垣	210m ²	平成13年11月30日～平成14年2月13日
第3次	大番土手跡・御守殿跡・懸走跡	1,400m ²	平成14年5月20日～平成15年1月31日
第4次	(本丸) 留櫓跡	110m ²	平成14年5月20日～8月31日
第5次	(本丸) 大広間跡 (2次)	470m ²	平成14年8月5日～12月20日

今年度は、本丸跡及び本丸へ通じる登城路跡の遺構の遺存状況を確認する発掘調査と仙台城跡全域にわたる現況調査、並びに広瀬川護岸石垣の測量調査を実施した。発掘調査費については総経費2,966万円、国庫補助額1,483万円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

第2表 調査計画表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第6次	仙台城跡(全域)		平成15年4月～8月
第7次	(本丸) 大広間跡 (3次)	240m ²	平成15年8月～11月
第8次	登城路跡	270m ²	平成15年10月～12月
第9次	広瀬川護岸石垣	50m ² (立面)	平成15年12月～2月

第6次調査では、仙台城跡全域にわたる遺構現況調査を実施した。石垣や土塁、堀や平場など目視により確認できた遺構については簡易的な測量と写真撮影を行い、遺構台帳にまとめた。仙台城跡には本丸跡や二の丸跡、三の丸跡など主要な曲輪以外にも、御裏林や登城路跡などで多くの遺構が残存していることが確認され、今後の調査を進める上での基礎となる資料を得ることができた。第6次調査に関しては、第Ⅳ章の他、報告書第271集『仙台城跡4』に調査成果を掲載する。

第7次調査は、平成13年度(1次調査)・14年度(5次調査)に引き続き、仙台城本丸御殿の主要な建物である大広間跡の発掘調査を実施した。これまでの2次にわたる調査により大広間の北辺・西辺・東辺にあたる礎石や雨落ち溝跡などの遺構を発見し、大広間の北西角と北東角の正確な位置と建物の東西規模(約33.5m)を確認している。今年度の調査は、大広間の南西辺の遺構を検出し、建物の南北規模を解明することを目的とした。また、大広間西側の御成門跡推定地の調査も併せて行い、門から大広間までの動線部分についての調査も行った。調査により、大広間南西部分の礎石跡・雨落ち溝跡が明瞭に検出され、建物の南北規模が解明された。御成門跡推定地の調査では、門で使用された礎石1石が原位置で検出され、御成門の位置を推定する資料を得ることができた。また、御成門と大広間の動線部分では石造遺構や溝状遺構が検出され、御成門と大広間周辺の状況を解明する貴重な手がかりを得た。遺構確認面からは、これまでの調査と同様に金銅金具や銅釘が多数出土するとともに、御成門礎石の周辺では多くの瓦が出土した。

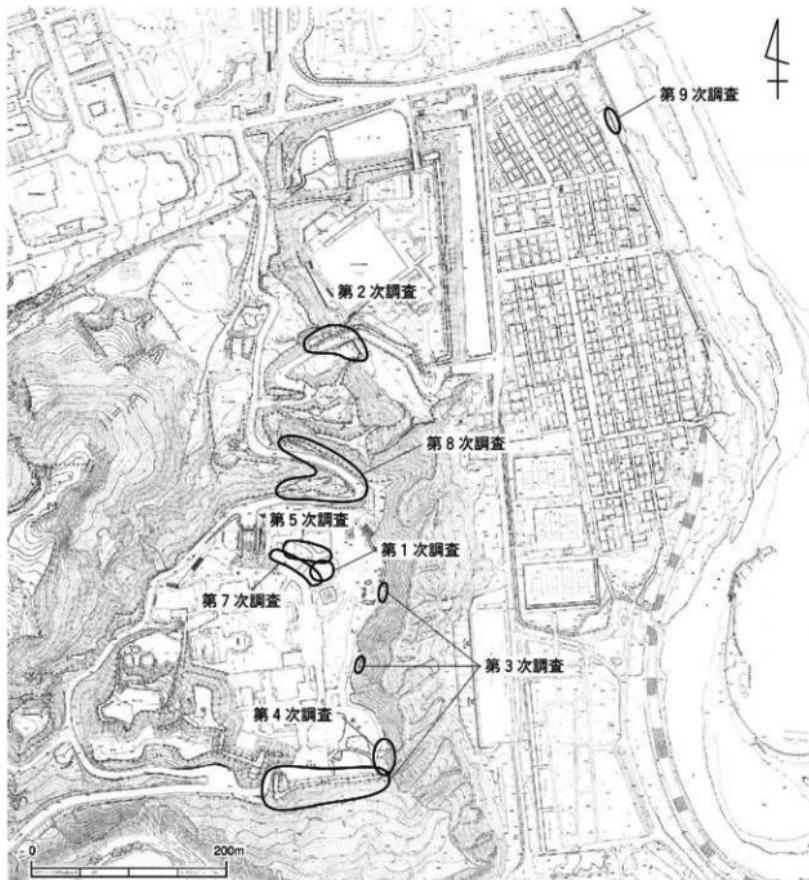
第8次調査は、本丸北壁石垣の北側、本丸に至る登城路部分の遺構確認調査を行った。石組側溝が現況で確認されていた部分や、土壘状の高まりが見られる部分などを中心に小規模なトレンチを6箇所設定し調査を行った。調査により石組側溝の延長部分を確認するとともに、土壘状の高まりも人為的なものであると確認され、堀で使用されていたと見られる瓦や中国産の磁器などが多数出土した。

第9次調査は、追廻地区の東端、広瀬川の護岸部分に築かれた石垣の測量調査を行い、石積み状況を記録した。大橋の南側では野面積みの石垣が約260mに渡り確認されており、今回の調査ではその北端部の約20mで測量調査を実施した。

第3表 調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第6次	仙台城跡（全域）	約145ha	平成15年5月7日～8月8日
第7次	(本丸) 大広間跡（3次）	258m ²	平成15年8月4日～12月25日
第8次	登城路跡	58m ²	平成15年11月12日～12月25日
第9次	広瀬川護岸石垣	50m ² （立面）	平成15年12月9日～平成16年2月5日

以上のように本年度は、仙台城跡全体での遺構現況調査、2地区における発掘による遺構確認調査、1地区における測量調査を行った。以下、調査成果を掲載する。



第8図 仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図

IV 第6次調査

1. 目的

仙台城跡を総合的に把握するために、城域全体に存在する遺構の分布状況を記録することを目的とし実施した。

2. 方法

分布調査を行い、目視により確認された遺構の規模などについて略計測を行い、写真を撮影した。その結果は遺構現況調査台帳に記載した。広域なので地区割りを行った。本丸跡を中心とした「本丸地区」、二の丸跡と勘定所、扇坂を中心とした「二の丸地区」、水堀を含む三の丸跡を中心とした「三の丸地区」、大手門と巽門から本丸への登城路を中心とした「登城路地区」、「御裏林地区」、それ以外の「その他の地区」の6地区である。

3. 実施状況

現況調査は主として平成15年〔2003〕5月7日から8月8日まで継続的に実施し、その後も断続的に現地調査を行った。草木の繁茂する季節でもあり、特に御裏林地区での調査は難航したが、ひととおりの遺構把握は行うことができた。

(1) 本丸地区

懸跡、御守殿跡推定地の石垣などの計測を行った。

(2) 二の丸地区

千貫橋跡、筋造橋跡などで切石を使用した石垣を確認した。また、大手門脇の池跡などを計測した。

(3) 三の丸地区

曲輪西縁に位置する石垣を確認し、水堀、土塁などを計測した。

(4) 登城路地区

登城路周辺に位置する石垣、平場などを計測した。

(5) 御裏林地区

西の丸跡西側の切通し西側に位置する堀切の南への延長を確認した。また、中島池跡方向にのびる尾根上で、中世にさかのほる可能性がある土塁などを確認した。また、近代に構築されたと考えられる整塁や、亜炭坑なども確認した。

(6) その他の地区

広瀬川護岸石垣の規模を計測した。また、筋造橋跡東側の沼際で石垣を新たに確認した。

4.まとめ

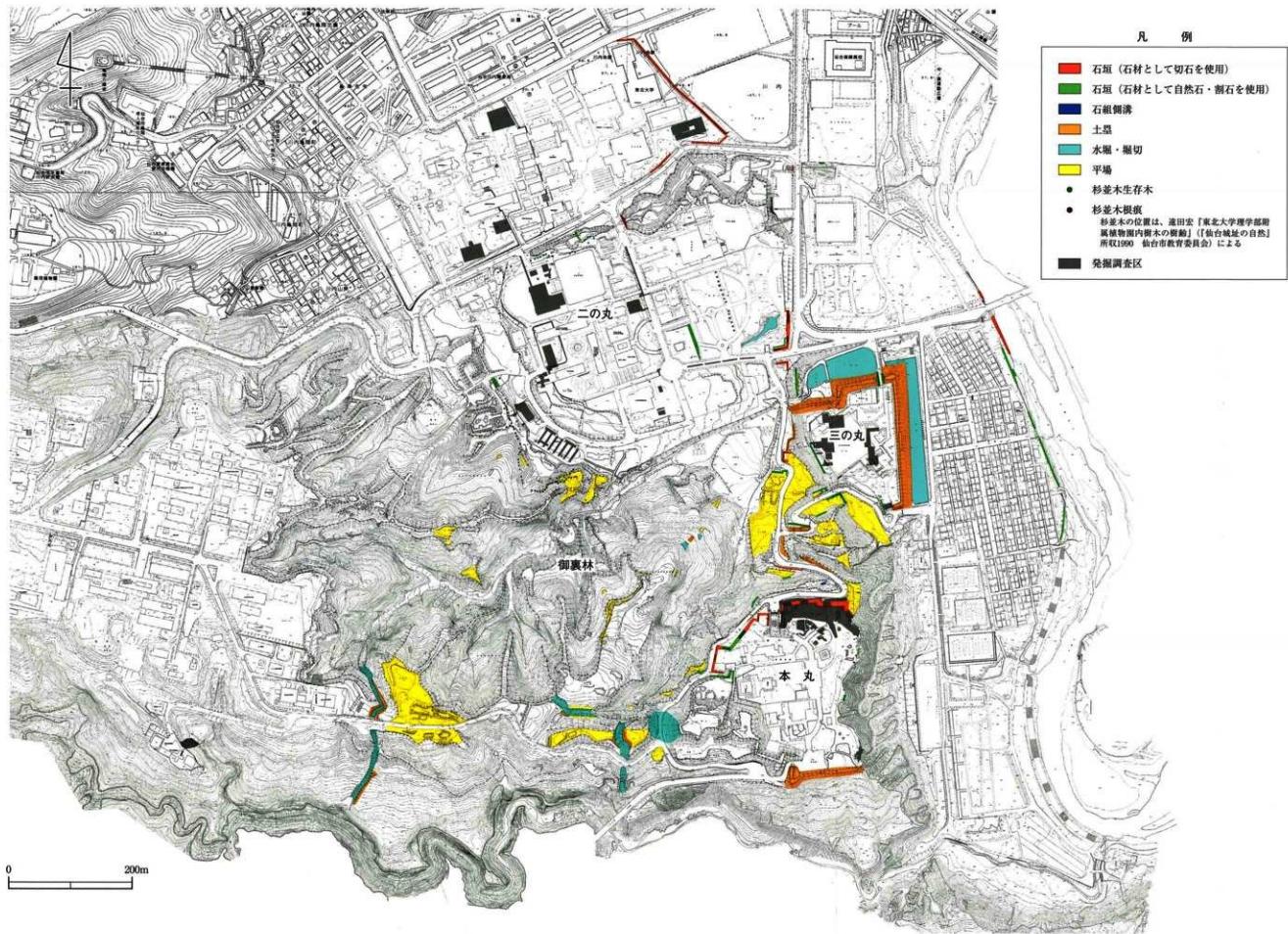
各地区において分布が確認された遺構をまとめたものが次頁の図である。分布状況のみをまとめたものであるため、個々の遺構についての検討は今後進めていきたい。なお、遺構台帳は『仙台城跡4』として報告書を刊行した。今回調査が不十分な地区もあったため、分布調査は今後とも継続して進めていく予定である。



第9図 石垣調査風景（登城路地区・中門跡）



第10図 堤切調査風景（御裏林地区）



第11図 造構全体図

V 第7次調査

1. 調査経過

第7次調査は、仙台城本丸大広間跡と御成門跡推定地付近で、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の257.7m²について、平成15年〔2003〕8月4日から同年12月25日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。大広間跡の調査は、今回の調査が第3次となる。

調査の主たる目的は、①大広間跡南辺部分の遺構を検出し、建物部の南北規模を解明すること、②第5次調査で検出した大広間跡西側遮蔽施設（掘立柱列）の規模等を確認すること、③御成門跡の遺構を確認し、門の位置と規模を解明すること、④大広間と御成門を結ぶ通路遺構を検出し、その導線を解明すること、などである。

調査の目的を達成するため、以下の3調査区を設定した。

- ・1A区（132.5m²）御成門跡推定地から大広間西辺部分

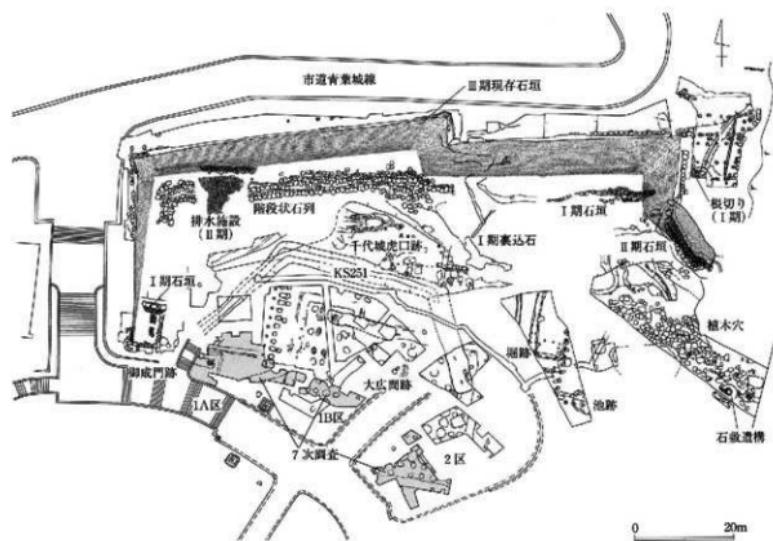
御成門礎石と大広間西辺雨落ち溝跡、大広間西側遮蔽施設の延長部、御成門から大広間への通路遺構などの検出を目的とする。

- ・1B区（36.6m²）大広間建物跡内部

東西に棟を持つ大広間の中央部に位置する東西礎石列の検出を目的とする。

- ・2区（88.6m²）大広間南辺部分

大広間南辺部分の雨落ち溝跡・礎石跡のなど遺構を検出するとともに、大広間外部の遺構検出状況を確認することを目的とする。



第12図 仙台城本丸跡北部・大広間跡調査区位置図

調査区付近の現況は草地で、周囲には松などの樹木が林立しており、1A区御成門跡推定地付近には礎石と推測される直径1mほどの石材が8点在していた。調査区を設定し、現況での写真撮影や遺物の表探などを行った後、平成15年〔2003〕8月4日から安全フェンスを設置し、8月18日から重機による表土排除を開始した。同時に1A区に点在していた石材のうち、原位置を保っていないことが確認された6石は、石材調査や測量、写真撮影を行った後、重機により調査区外に移動した。8月25日からは人力により遺構面検出作業を開始し、平面遺構精査、壁面断面精査などを繰り返しながら、明治以降の整地層であるⅡ層を除去し、江戸時代の整地層であるⅢ層上面を検出する作業を行った。調査により、1A区では御成門の礎石1石が原位置を保って確認され、その礎石の西側には礎石跡を1基確認した。また、御成門跡と大広間跡の間に位置する区域では、東西に伸びる溝状遺構や石敷遺構などを検出した。2区では大広間南辺部分の礎石跡や雨落ち溝跡などの遺構が明瞭に検出され、これまでの調査成果と併せ大広間の南北規模が解明された。

これら調査成果については平成15年〔2003〕10月16日・11月3日に仙台城跡調査指導委員の現地指導を受けた上で、11月7日に記者発表、翌8日に現地説明会（408名参加）を実施した。12月3日に第8回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果に関する中間報告を行った結果、調査成果はおおむね了承されるとともに大広間の柱間寸法（建物間尺）についても検討された。同委員会では調査区の拡張による追加調査の必要性を2箇所について指導されたことから、新たに2B区の設定と1A区の拡張を行い、遺構検出作業を行った。野外調査は12月中旬までに終了し、12月26日までに調査区の埋め戻しやフェンス等撤去が終了、調査箇所は現状に復した。平成16年〔2004〕3月17日に第9回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。



第13図 1A区調査前状況（西から）



第14図 2区調査前状況（北から）



第15図 1B区調査前状況（東から）

2. 基本層序と旧地形

大広間に関わる遺構は、江戸時代の整地土・Ⅲ層上面で検出した。Ⅲ層の上部には明治以降の整地土・Ⅱ層が厚く堆積しており、近現代の搅乱土坑が多く見られたが、大広間に関わる遺構の残存状況は良好であった。Ⅲ層の下部は地山となっており、凝灰岩質シルト層・Ⅳ層もしくは白色または褐色粘土層・V層などが確認された。

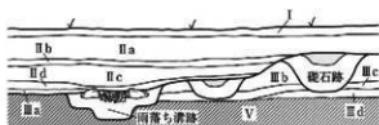
落ち葉などの堆積により形成された近現代の表土層・Ⅰ層を除去すると、白色系粘土ブロックを多く含む層・Ⅱa層が広く検出され、近代の公園造成などに関わる整地層と推測された。大広間の雨落ち溝跡部分など遺構検出レベルが低い部分を中心にⅡa層の下部にⅡb層・Ⅱc層・Ⅱd層が検出され、Ⅱ層は大きく4つに細分することができた。Ⅱb層以下は硬くしまっており、明治期以降に仙台城に本拠を置いた第二師団など軍隊による整地の可能性を推測している。Ⅱ層中からは、瓦片や陶磁器、金属製品など仙台城に関わる遺物が多く出土している。

Ⅱ層を除去すると、暗褐色シルト層を中心とするⅢa層が建物遺構の外部を中心に確認され、江戸時代の旧表土とみられる。Ⅲa層を除去すると褐色粘土を主体とするⅢb層が検出され、江戸時代の整地層と考えられる。Ⅲb層の下部にはⅢc層が検出される部分もあり、Ⅲb層やⅢc層の上面から遺構が掘り込まれている。大広間の建物内部など遺構の検出レベルが高い部分ではⅢd層も検出されており、Ⅲ層は大きく4つに細分できた。Ⅲa層やⅢb層上面からは瓦や陶磁器、金銅金具など仙台城に伴なう遺物が出土しているが、Ⅲa層上面からは近代以降の遺物も確認されている。

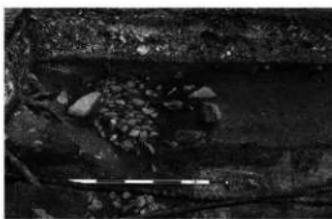
調査区内では、近現代の擾乱坑が多く確認されており、その壁面及び底面を精査することによりⅢ層以下の基本層序を確認した。地山上（IV・V層）の検出状況をみると、調査区のはば全域で確認されたことから地形の急激な落ち込みなどは確認されなかった。このことから調査区周辺の旧地形は、尾根が位置する部分であり、ところにより切土などをして平坦な地形を形成した可能性がある。

I 层	(表土)	黒褐色～暗褐色シルト層
II a層	(整地層)	黄褐色・にぶい黄褐色シルト層（2区） 灰白色粘土層（1区）
II b層	(整地層)	褪灰色シルト層（2区） にぶい黄褐色・赤褐色シルト層（1区）
II c層	(整地層)	褐色・灰黃褐色シルト層（2区） 赤褐色シルト層（1区）
II d層	(整地層)	褐色・褐灰色シルト層（2区） にぶい黄褐色（1区）
III a層	(旧表土)	暗褐色（2区） 灰黃褐色シルト層（1区）
III b層	(整地層)	暗褐色シルト・褐色粘土層（2区） 暗褐色・褐灰色シルト層（1区）
III c層	(整地層)	褐色粘土・シルト層（2区） にぶい黄褐色粘土・シルト層（1区）
III d層	(整地層)	黄褐色シルト・暗褐色粘土層（2区）
IV 層	(地山)	にぶい黄褐色シルト層（凝灰岩質）
V 層	(地山)	白色・褐色粘土層

*各層の土色・土質などについては、同層と見られる場合でも調査区毎に違いがみられる。層序については、壁面精査や検出レベル、遺物の出土状況などを検討した上で総合的に判断した。



第16図 2区基本層序模式図



第17図 1B区KS-53雨落溝跡付近土層状況
(北から)

3. 発見遺構

発見された遺構は、礎石跡25基・雨落溝跡2条・溝状遺構7条・掘立柱穴1基・柱穴4基・土坑4基・ピット状遺構25基などである。これら遺構は江戸時代の整地層であるIIIb・IIIc層上面又は地山であるIV・V層上面で検出されており、仙台城本丸に江戸時代初期に建築された大広間や御成門に関わる遺構とみられる。

以下、発見された遺構について（1）大広間跡に関わる遺構、（2）御成門跡に関わる遺構、（3）御成門から大広間に至る動線部とその周辺の遺構、（4）その他の遺構の4つに分類し報告する。なお、検出遺構についての記述は、仙台城跡調査指導委員会での検討を加えたものである。

（1）大広間跡に関わる遺構

大広間跡に関わる遺構は、2区と1B区・1A区東側で検出されており、雨落溝跡や礎石跡などがある。雨落溝跡は昨年度までの調査で大広間西辺・北辺・東辺部で併せて37mほど検出されている。礎石跡は昨年度までの調査で50基確認されており、うち7基には礎石が原位置で残存していた。

① 2区検出遺構

2区では大広間跡南辺部分の雨落溝跡1条と礎石跡17基が確認された。昨年度実施した第5次調査では大広間北辺部の雨落溝跡と礎石跡が検出されており、北辺ラインと南辺ラインの礎石列の心々距離は約26.3m、北辺ラ

インと南辺ラインの雨落ち溝跡の心々距離は約30.0mと図上で算出された。

【雨落ち溝跡】

- ・KS-163雨落ち溝跡 大広間南辺部分の円礫敷きの雨落ち溝跡が14.5mにわたって確認された。上面が平らな切石を縁石として両側に並べ、間に円礫を隙間なく充填している。溝跡の掘り方はⅢb層の上面から確認され幅2mほど、深さは50cmほどである。KS-164・165礫石跡を切っている。1層（円礫層）からは瓦154点や鉄製品11点、陶器3点、3層（掘り方）からは土師質土器3点が出土した。1層及び3層の土壤サンプル（No.1207・1208）を採取し、花粉分析を行っている。（p36・37参照）

縁石は多くが抜き取られていたが、建物内側の石列を中心に20石ほどを原位置で検出した。石材法量は、幅18~58cm、奥行き17~37cm、厚さ3~9cmほどであり、両側の縁石間の幅は50cmである。検出された縁石は1段のみであり、石材の上面は平坦である。

幅50cmの縁石間に、河原石を主とする円礫がほぼ隙間なく充填されている。円礫が充填されている層は厚さ10cmほどであり、円礫層の隙間には暗褐色から黒褐色シルトが含まれている。一部の円礫を取り上げ、個数の確認と石材調査をした結果、0.4m²の面積から118個の石材が取り上げられ、河原石を主体とする円礫101個と、やや大きめで風化のみられる礫17個に区分できた。石材の法量は、直径（長軸）は3.1~15.5cmであり、1石あたりの平均重量は0.25kgほどである。円礫層の上面には瓦が多く確認されたが、円礫層中からも瓦が少量確認できた。

雨落ち溝の掘り方は、50cm幅の円礫層の下部のみが15~20cmほど1段深く掘り込まれており、褐色シルトの埋土中には円礫や瓦は含まれていない。雨落ち溝掘り方に縁石を据えるための掘り方も確認でき、幅60cm、深さ20cmほどで木端石が多く含まれている。

【礫石跡】

KS-163雨落ち溝跡の北側に、径70~230cmほどの円形遺構が17基検出され、大広間南辺付近の礫石跡と推測される。平面プランの多くは二重の円形を呈しているものが多く、外側の円形プランは礫石を据えるための掘り方、内側の円形プランは礫石を抜き取った跡とみられる。多くの礫石跡の掘り方は径5~20cmほどの円礫を根固め石として含んでいる。礫石跡は東西に3列検出されており、南から落縁部礫石列、広縁（拭縁）部礫石列、座敷部礫石列と推測される。

i) 落縁部礫石列

雨落ち溝跡（KS-163）の心々ラインと約2mの距離で平行し、大広間の南辺ラインに位置する落縁部礫石跡と推測される円形の遺構7基が列をなして確認された。落縁部礫石跡は径80~130cmほどであり、掘り方には平均すると径5cmほどの円礫を根固めとして含んでいる。

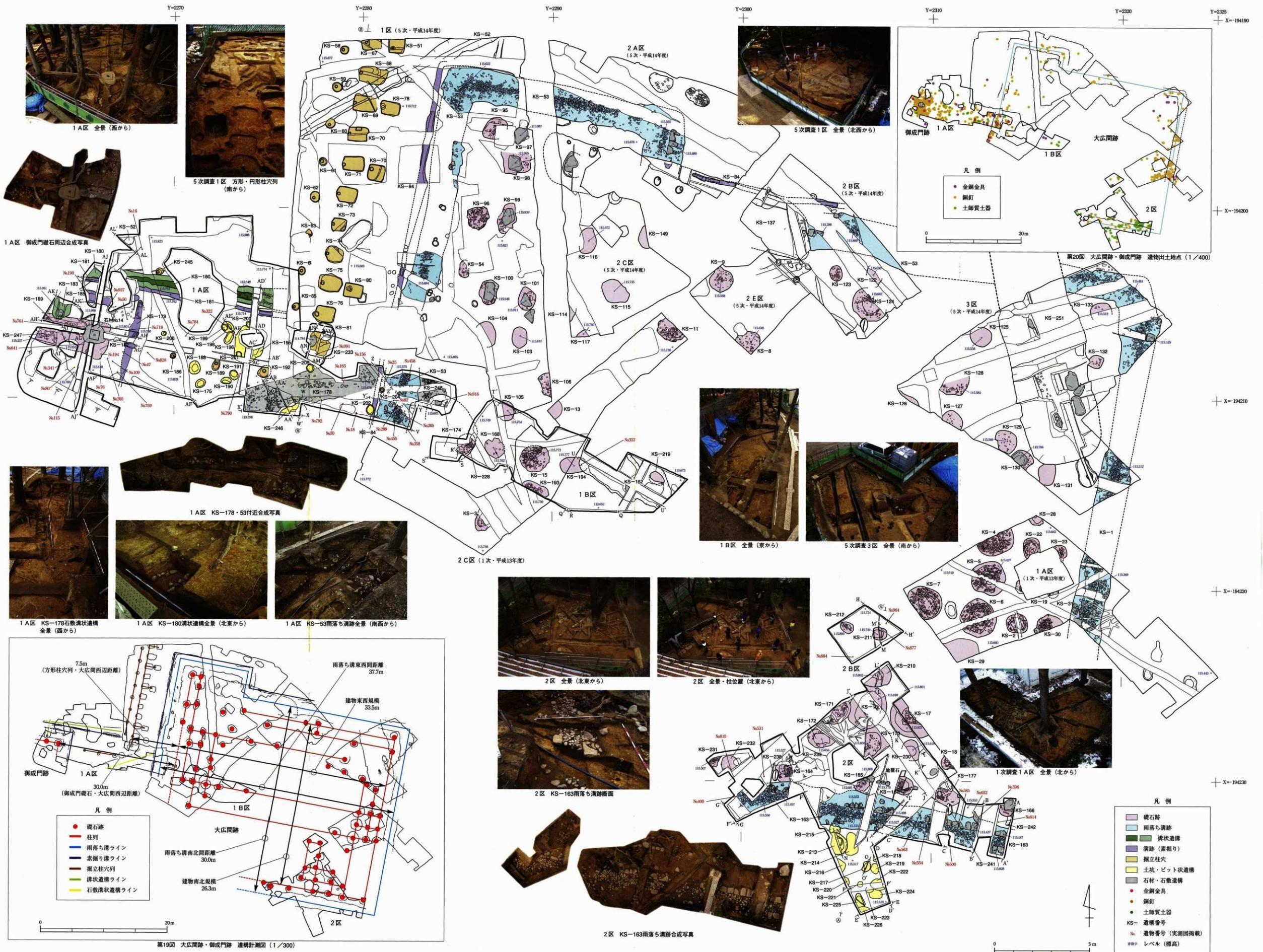
- ・KS-164礫石跡 直径100cmほどの円形で、径5~10cmほどの円礫が充填されている。中央に直径50cmほどの礫石抜き取り穴がある。KS-163雨落ち溝跡に切られている。

- ・KS-165礫石跡 直径100cm以上の円形とみられ、径5cmほどの円礫が充填されている。礫石とみられる石材の一部が壁面に確認でき、直径34cm以上、厚さ16cm以上の石材である。KS-163雨落ち溝跡に切られている。

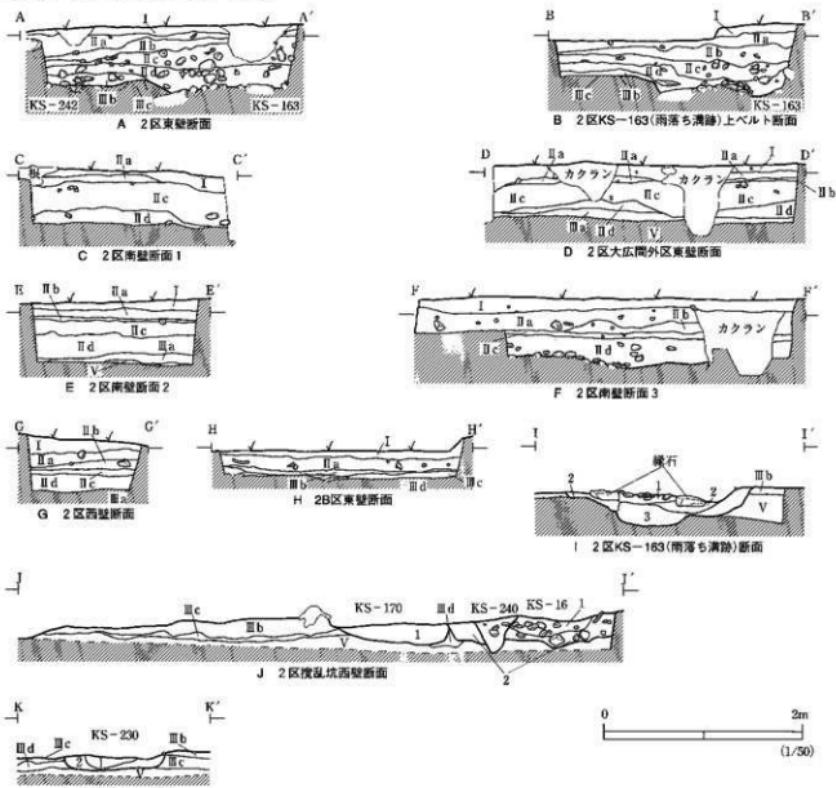
- ・KS-166礫石跡 直径80cmほどの円形とみられ、径5cmほどの円礫が充填されている。上面のⅡa層中に径60cmほどの上面が平坦な石材が確認された。

- ・KS-167礫石跡 直径90cmほどの円形で、径5cmほどの円礫が充填されている。中央に直径40cmほどの礫石抜き取り穴がある。

- ・KS-177礫石跡 直径130cmほどの梢円形で、径5~20cmほどの円礫や角礫が充填されている。



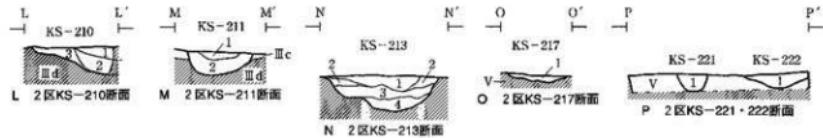
断面図 2区 [全て1/50・S.L.=116m]



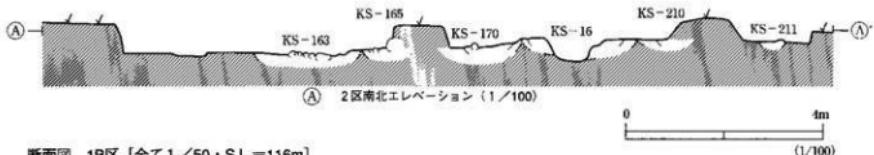
第21図 2区構造断面図 (1/50)

第4表 構造記表

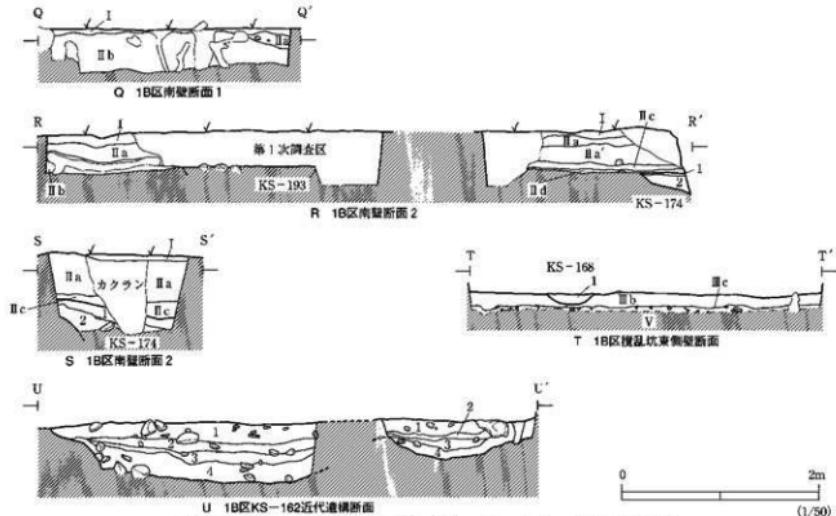
序号	構造番号・探査	部位	土 質			特 記	考
			土色	粘性	粒度		
A 15	2区東壁 KS-163(雨落ち溝跡 上部面)上ベルト	I	IIa 10YR4/2	褐色	シルト	なし ややあり	灰白色土上に白色シルト
		IIb 10YR5/1-10YR5/2	褐色	粘土	なし	白色土上に白色シルト	白色土をブロック状に多く含む。
		IIc 10YR4/2	灰褐色	粘土	あり	白色土に含む。	白色土の断続シルトを人字形に含む。
		IId 10YR4/2	灰褐色	粘土	あり	白色土に含む。	白色土に含む。
		IIIa 10YR3/4	褐色	シルト	ややあり	白色土に含む。	白色土を含む。
C D E F G	2区南壁	I	10YR5/2	シルト	なし	白色土上に白色シルト	白色土をブロック状に含む。
		IIa 10YR4/1	褐色	シルト	ややあり	白色土上に白色シルト	白色土をブロック状に含む。
		IIb 10YR4/4	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土をブロック状に含む。
		IIc 10YR4/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土をブロック状に含む。
		IIIa 10YR2/1	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
II 2-B	2区北壁	V	10YR5/8	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト
		IIIc 10YR5/2	褐色	シルト	なし	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIIb 10YR4/1	褐色	シルト	なし	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIIc 10YR4/6	褐色	シルト	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIId 10YR5/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
I 2	KS-163(雨落ち溝跡)	I	10YR3/3	褐色	シルト	なし	白色土上に白色シルト
		IIa 10YR5/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIb 10YR4/4	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIc 10YR5/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIIa 10YR5/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
J K	南北被災地東壁 KS-16壁石跡	I	10YR4/4	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト
		IIa 10YR4/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIb 10YR5/4	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIc 10YR5/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIIa 10YR4/4	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
I 2	KS-17壁石跡 KS-20壁石跡 KS-230壁石跡	I	10YR4/6	褐色	シルト	ややあり	白色土上に白色シルト
		IIa 10YR3/3	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIb 10YR4/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIIa 10YR4/4	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。
		IIIb 10YR5/6	褐色	粘土	あり	白色土上に白色シルト	白色土を含む。



エレベーション図 2区 [S.L.=116m]



断面図 1B区 [全て 1/50・S.L.=116m]

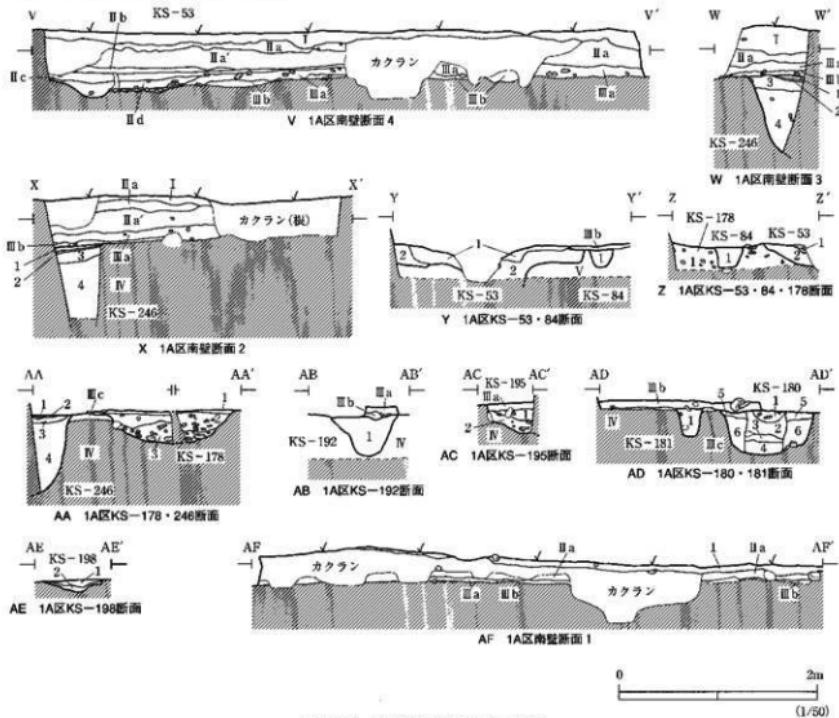


第22図 2区・1B区構造断面図 (1/50)・エレベーション図 (1/100)

第5表 構造記表

番号	測定点	地質構造・層別	層位	上 色	ナ ミ テ ク ス	中 色	下 色	特 徴	考 察
L	KS-210露頭	1 10Y3/2	高黄色	シルト質粘土	あり	ややあり	灰化物を含む。白色粘土をまだらに含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土	あり	ややあり	褐色粘土をブロック状に含む。		
		3 10Y3/6	黄褐色	粘土	あり	ややあり	褐色粘土をブロック状に含む。		
M	KS-211露頭	1 10Y3/2	褐色	粘土質シルト	やや多く	あり	褐色粘土を含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
		3 10Y3/6	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
N	KS-213露頭	1 10Y3/2	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
		3 10Y3/6	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
O	KS-217露頭	1 10Y3/2	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
		3 10Y3/6	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
P	KS-221露頭	1 10Y3/2	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
		3 10Y3/6	褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	褐色粘土を含む。		
Q	1B区南壁	1 25GY	灰色	粘土	あり	なし	褐色色・褐色シートをブロック状に含む。		
		2 25GY	灰色	粘土	ややあり	なし	褐色色・褐色シートをブロック状に含む。		
		3 SYM/4	灰褐色	シルト	ややあり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
R	KS-165露頭	1 10Y3/2	明黄色	シルト質粘土	やや多く	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		2 10Y3/4	明黄色	シルト質粘土	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		3 10Y3/6	明黄色	シルト質粘土	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
S	KS-163露頭	1 10Y3/2	褐色	粘土質シルト	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		3 10Y3/6	褐色	粘土質シルト	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
T	KS-168露頭	1 10Y3/2	褐色	粘土質シルト	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		3 10Y3/6	褐色	粘土質シルト	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
U	KS-162露頭	1 10Y3/2	褐色	粘土質シルト	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		2 10Y3/4	褐色	粘土	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		
		3 10Y3/6	褐色	粘土質シルト	あり	なし	褐色色・白色シートをブロック状に含む。		

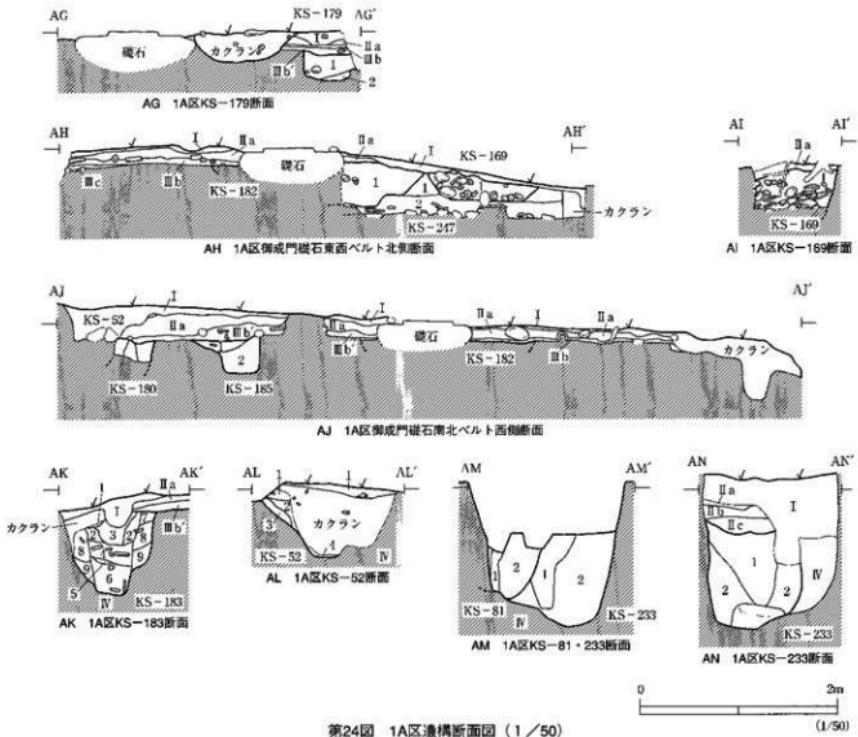
断面図 1A区 [全て1/50・S.L.=116m]



第23図 1A区 道構断面図 (1/50)

第6表 道構註記表

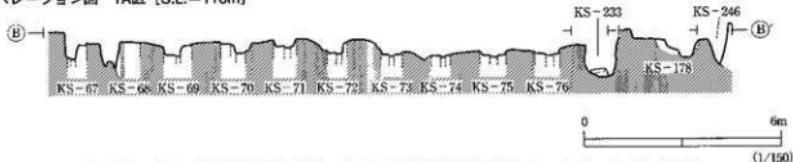
番号	測定区	測定番号・種別	層位	上 色	上 質	上 古	標 記
V W X	街市区南壁(東側)	I 10YR7/1	褐色	シルト	なし	なし	無水。
		IIa 10YR5/1	灰白色	粘土	あり	あり	灰白色上に、水膜色上をブロック状に含む。
		IIa 10YR5/4	灰白色	シルト+粘土	なし	なし	灰白色粘土ブロックに、灰白色シート・灰化物を大層に含む。既存を含む。
		IIb 10YR5/4	灰白色	シルト	なし	なし	灰白色粘土ブロックを多く含む。灰白色・灰褐色をまだらに含む。
		IIb 10YR4/1	褐色	粘土	あり	あり	灰白色粘土ブロックを多く含む。
		IIc 10YR4/1	褐色	シルト	なし	なし	灰白色粘土ブロックを多く含む。灰白色・灰褐色を含む。
		IIIa 10YR4/2	灰褐色	シルト	なし	なし	灰白色粘土ブロックを多く含む。灰白色・灰褐色を含む。
		IIIa 10YR5/6	褐色	粘土	あり	あり	灰白色粘土ブロックを多く含む。灰白色・灰褐色を含む。
		IIIc 10YR5/6	灰褐色	シルト	ややあり	ややあり	灰白色粘土ブロックを多く含む。灰白色・灰褐色を含む。
		IV 10YR5/5	灰褐色	シルト+粘土	ややあり	ややあり	灰白色粘土ブロックを多く含む。灰白色・灰褐色を含む。
KS-246上段	KS-246上段	1 10YR3/1	褐色	シルト+粘土	なし	なし	無水。
		2 NS	褐色	粘土	なし	なし	無水。
		3 10YR5/6	褐色	粘土	あり	あり	灰白色粘土ブロックを多く含む。
		4 10YR5/5	灰褐色	粘土+砂土	ややあり	ややあり	灰白色粘土ブロックを多く含む。灰白色・灰褐色を含む。
Y Z	KS-33附帯層	1 10YR3/1	褐色	シルト+粘土	ややあり	ややあり	灰白色粘土をブロック状に含む。
		2 10YR3/4	褐色	粘土+砂土	なし	なし	無水。
		3 10YR5/5	灰褐色	シルト+粘土	ややあり	ややあり	灰白色粘土をブロック状に含む。
		4 10YR5/4	灰褐色	シルト+粘土	なし	なし	無水。
AA	KS-178	1 10YR5/4	褐色	シルト	なし	なし	無水。
		2 10YR5/4	褐色	シルト	ややあり	ややあり	灰白色粘土をブロック状に含む。
AB	KS-192柱穴	1 10YR4/3	褐色	粘土+砂土	ややあり	なし	無水。
		2 10YR4/4	褐色	粘土	なし	なし	無水。
AC	KS-180土坑	1 10YR5/4	褐色	粘土+砂土	ややあり	ややあり	灰白色粘土をブロック状に含む。
		2 10YR5/4	褐色	粘土+砂土	ややあり	ややあり	灰白色粘土をブロック状に含む。
AD	KS-180柱状測面	1 10YR5/4	褐色	粘土+砂土	ややあり	ややあり	灰白色粘土をブロック状に含む。
		2 10YR5/4	褐色	シルト	なし	なし	無水。
AE	KS-188土坑	1 10YR1/7.1	褐色	シルト	なし	なし	無水。
		2 10YR1/7.1	褐色	シルト	なし	なし	無水。
AF	南壁(西側)	1a 10YR3/2	褐色	シルト	なし	なし	なし。
		1b 10YR5/4	灰褐色	シルト	なし	なし	灰白色粘土+ブロック状に含む。灰化物を含む。
		1c 10YR4/2	灰褐色	シルト	なし	ややあり	灰白色粘土+ブロック状に含む。灰化物を含む。
		1d 7.5Y5/1	灰褐色	シルト	なし	あり	灰白色粘土+ブロック状に含む。灰化物を含む。



第24図 1A区造構断面図 (1/50)

第7表 造構註記表

エベレーション図 1A区 [S.L.=116m]



第25図 1A区～方形据立柱列（平成14年度・5次調査検出）南北エレベーション（1/150）

- ・KS-232礎石跡 直径70cmほどの円形で、深さは30cm以上ある。根固め石は確認できなかった。
- ・KS-231礎石跡 直径60cm以上で、平面形は不明である。径5～10cmほどの円礎が充填されている。
- ・地覆石列 落緑部礎石列と同一ラインで7石の石材が列をなして検出されている。石材は幅18～29cm、奥行き13～40cm、厚さ5～12cmほどであり、7石中5石は河原石とみられる大きめの円礎である。建物外縁部分に地覆のために並べた石材とみられる。

ii) 広縁部礎石列

落緑部礎石列の北側に平行して、広縁部の礎石跡と推測される円形遺構が3基確認された。広縁部礎石跡は径100～150cmほどであり、掘り方に平均すると径10cmほどの円礎を根固めとして含んでいる。

- ・KS-170礎石跡 直径150cm以上の円形とみられるが、西側部分が樹根による搅乱を受けており、全体を検出できなかった。中央部に直径100cmほどの礎石抜き取り穴が確認され、径5～15cmほどの円礎が抜き取り穴に大量に含まれていた。KS-16礎石跡に切られている。
- ・KS-172礎石跡 直径140cmほどの楕円形で、5～10cmほどの円礎が含まれている。中央部に直径80cmほどの楕円形の礎石抜き取り穴が確認された。
- ・KS-230礎石跡 直径120cmほどの円形とみられ、5～10cmほどの円礎が少量含まれている。中央部に直径60cmほどの礎石抜き取り穴が確認された。

iii) 座敷部礎石列

広縁部礎石列の北側に平行して、座敷部礎石跡と推測される円形遺構が3基確認された。座敷部礎石跡は径180～230cmほどの掘り方を持ち、径10～25cmほどの円礎を根固めとして含んでいる。

- ・KS-16礎石跡 直径230cmほどの楕円形で、径10～25cmほどの円礎が充填されている。直径170cmほどの楕円形の礎石抜き取り穴が確認された。KS-170礎石跡を切り、KS-171・KS-210礎石跡に切られている。
- ・KS-17礎石跡 直径230cmほどの円形とみられ、直径130cm以上の礎石抜き取り穴が確認された。
- ・KS-171礎石跡 直径180cm以上の円形とみられ、径10～20cmほどの円礎が充填されている。KS-16礎石跡を切っている。

iv) 座敷内部礎石跡

KS-16礎石跡の北側で3基の礎石跡と思われる円形遺構を確認した。径70～140cmほどの掘り方を持ち、根固め石は明瞭に確認されなかった。座敷間部分の束柱を置いた礎石跡の可能性が考えられる。

- ・KS-210礎石跡 直径140cmほどの円形とみられ、深さは30cmほどである。中央部に直径40cm以上の礎石抜き取り穴が確認された。KS-16礎石跡を切っている。
- ・KS-211礎石跡 直径70cmほどの円形で深さは20cmである。直径40cmの礎石抜き取り穴が確認された。
- ・KS-212礎石跡 直径70cmほどの楕円形で、径5～10cmほどの円礎が含まれている。

v) 南北礎石列

KS-165・KS-170・KS-16・KS-210・KS-211礎石跡は南北に列をなしており、雨落ち溝跡を含めた南北工

レベーションをとると、雨落ち溝跡に比べ落縁部分と広縁部分の礎石跡の検出レベルは15cmほど高くなっている。また建物本体部分の礎石の検出レベルはさらに15cmほど高くなっていることが確認された。また、礎石跡はほぼ等間隔で検出されている。

②1A・1B区検出遺構

1A区では大広間西辺部分の雨落ち溝跡1条と素掘り溝跡1条が検出された。昨年度の調査で検出された西辺部雨落ち溝跡の延長部にある。1B区では大広間建物内部に向けて東西に伸びる礎石列を検出した。

【雨落ち溝跡・溝跡】

・KS-53雨落ち溝跡 大広間西辺の円礎敷きのKS-53雨落ち溝跡が2.7mにわたって確認された。縁石はすべて抜き取られていたが、充填された円礎は残存していた。雨落ち溝跡の掘り方はⅢb層の上面から掘り込まれ、幅2mほど、深さは30cm以上で、円礎層の下部のみがさらに1段深く掘り込まれていることが確認された。円礎層（1層）上面からは釘釘13点、金銅金具4点、鉄釘5点などが出土している。KS-178石敷溝状遺構を切っている。

・KS-84溝跡 KS-53雨落ち溝跡の東側で、昨年度検出されたラインと一致して、KS-84溝跡が2.5mほど確認された。幅30cm、深さ20cmほどである。昨年度までの調査で、KS-53雨落ち溝跡とほぼ平行して大広間西辺部から北辺部にかけて検出されている。昨年度の調査でKS-53雨落ち溝跡に切られていることが確認されている。KS-178石敷溝状遺構を切っている。遺物は出土していない。

【礎石跡】

大広間の礎石跡と考えられる円形遺構が7基確認された。うち5基は東西に列をなす。2区で検出された礎石跡と異なり、礎石抜き取り穴が明瞭に確認できず、すべて掘り方ラインのみの検出である。

・KS-15礎石跡 直径160cmほどの円形で、径5~15cmほどの円礎が充填されている。

・KS-105礎石跡 直径90cm以上の円形とみられ、径5~10cmほどの円礎が充填されている。

・KS-168礎石跡 直径110cmほどの円形で、径5~10cmほどの円礎が少量含まれている。

・KS-193礎石跡 掘り方は直径150cmほどで平面形は不明である。径5~15cmほどの円礎が充填されている。

・KS-194礎石跡 直径110cmほどの楕円形で、座敷部内部の礎石跡と推測される。

・KS-219礎石跡 直径70cmほどで平面形は不明である。径5cmほどの円礎が少量充填されている。

・KS-228礎石跡 直径110cmほどの円形で、径5~10cmほどの円礎が大量に充填されている。

【石敷整地遺構】

・KS-248石敷整地遺構 KS-53雨落ち溝跡の東側で、直径1~5cmほどの円礎を大量に含む暗褐色シルト質粘土層が幅1mにわたり2~3cmの厚さで確認された。大広間西辺部雨落ち溝跡と落縁部の礎石列の間に位置し、車寄と推定される部分南側の軒下に位置した部分である。

（2）御成門跡に関わる遺構

御成門に関わる遺構は、1A区西側で検出されており、柱座の加工がみられる礎石や、礎石抜き取り跡、円礎や丸を充填した布掘り状の礎石掘り方などがある。検出された礎石は、その状況から御成門の礎石と推定される。また、礎石周辺では礎石跡から北に伸びる溝状遺構などが検出された。

【礎石跡】

・御成門礎石跡（石材No.14・KS-182礎石掘り方） 御成門跡推定地付近では、調査前から地表面に点在した石材6石の他、正方形の柱座加工のみが地表面で確認できた石材1石（石材No.14）が確認されていた。石材調査の結果、石材No.14の直径は124cmほどあり、上面全体に丁寧なノミ加工がみられ、50cm角で高さ5cmほどの正方形の柱座と8cm角で深さが5cmほどのぼぞ穴を彫り出している。石材No.14は、加工された上面部分がほぼ水平に

据えられており、また、柱座の辺は大広間の柱筋とほぼ平行となる。また、発掘調査の結果、石材No.14（以下、御成門礎石）は、KS-182礎石掘り方が検出されたことから、原位置を保っていると考えられ、御成門礎石の1つであると推測される。KS-182礎石掘り方は直径195cmほどの円形を呈しているものと推測され、深さは45cmを計る。埋土からは瓦9点が出土している。

・KS-169御成門礎石跡 御成門礎石の西側で、礎石の抜き取り穴と推測される直径115cmほどの円形の平面形を持つKS-169礎石跡を確認しており、御成門礎石北側の礎石抜き取り跡と推測される。遺構からは瓦368点と多量の円礫が出土しており、礎石を抜き取った後に混入したものと推測される。礎石抜き取り跡底部からはKS-247礎石掘り方に充填されている大量の円礫が確認されている。

・KS-247礎石掘り方 KS-182 磂石掘り方跡からKS-169礎石跡については、それぞれ円形の平面プランで検出していたが、測定を進める中で、KS-182とKS-169が幅170~200cmほどの東西に伸びる布掘り状の遺構の中に位置していることが確認された。御成門礎石からKS-169の中央部を通り東西に設定したベルトの北側部分について幅30cmほどで断ち割り測定をした結果、断面観察からも、御成門礎石とKS-182、KS-169は、布掘り状の掘り方の中で検出されることを確認した。2層中に径10~20cmの円礫と平瓦を中心とする瓦が多量に含まれることから、根固めとして充填された可能性がある。2層から瓦201点が出土している。KS-183溝状遺構に切られている。

これら御成門礎石跡に関する遺構の検出状況から、礎石の掘り方は布掘り状に、2~3石の礎石掘り方を一度に構築した可能性がある。掘り方には円礫などを根固めとして充填した後、KS-169礎石跡に位置する礎石を据え、一度埋め戻した後、KS-182礎石掘り方を構築し、御成門礎石（石材No.14）を設置したと推測される。

【溝状遺構】

・KS-183溝状遺構 KS-183溝状遺構はKS-169御成門礎石跡から北側に溝状に伸びており、南北に15mほど検出された。幅90cmほどの掘り方を持ち、掘り方の中央部分には幅30~50cmほどで瓦を多く含む暗褐色粘土を主体とする層がさらに溝状に確認された。掘り方全体の深さは85cmほどであるが、60~75cm下がった部分で段がついており、40cmほどの幅で10~25cmほどさらに下がっているとともに、暗褐色粘土を主体とする層が底部から上面まで柱状に観察された。溝状遺構最南部分の掘り方底部で、直径35cmほどの上面が平らな自然石が検出され、柱を据えていた礎板石の可能性がある。KS-247礎石掘り方を切っている。瓦98点が出土している。2層及び6層の土壤サンプル（No.1259・1260）を採取し、蛍光X線及びプラントオパール分析を実施している。（p36・37参照）

・KS-179溝状遺構 KS-179溝状遺構は御成門礎石の東側2mほどの位置で南北に伸びており、幅50cmほどで4.3m分検出された。深さ25cmほどで、壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面は平面である。溝跡上面の一部では円礫が列をなしている。大広間の南北ラインとほぼ平行している。遺物は出土していない。

・KS-185溝状遺構 御成門礎石の北側2mほどの位置で、東西に伸びており、幅50~60cmほどで2.8m分検出された。深さは35cmほどで、断面形はKS-179溝状遺構と類似している。大広間の東西ラインとほぼ平行している。遺物は出土していない。

【整地層】

御成門礎石の南側とKS-179溝状遺構の西側に位置する部分では、褐灰色や灰色を呈するシルト質粘土層（Ⅲb層）が約1~2cmほどの厚さで約5mの範囲で検出されている。御成門礎石の北側とKS-179溝状遺構の東側では確認されず、門の内側部分に特別に行った整地であると推測される。KS-182礎石掘り方やKS-179は上部がこの層により整地されている。整地層上面からは、銅釘や崩瓦などが多数出土している。土壤サンプル（No.1263）を採取し、蛍光X線分析を実施している。（p36・37参照）

(3) 御成門から大広間に至る動線部とその周辺の遺構

御成門から大広間に至る動線部とその周辺の遺構は、1A区で検出されており、東西に伸びる2条の溝状遺構や東西に斜めに伸びる石敷溝状遺構、礎板石を伴う掘立柱穴、柱穴などがある。

【溝状遺構】

・KS-180溝状遺構 KS-180溝状遺構は、1A区御成門礎石北側部分で、東西に9.8mにわたり確認された。平成14年度の調査区西壁でも検出されていることから、延長は11m以上になると推測される。幅90cmほどあり、掘り方の中央部には炭化物を多く含む暗褐色土層が幅40cmほどで帯状に伸びている。一部断ち割りして断面観察を行った結果、掘り方は深さ45cmほどであり、上幅は90cmで下幅は70cmほどである。底部は平坦で、直径5~10cmほどの円窪が2列に置かれている。掘り方の中央部分には炭化物の混じる暗褐色土が幅40cmほどで底部から上部まで柱状に確認される。KS-181溝状遺構に切られている。掘り方からは遺物は出土していないが、炭化物層の上面から瓦19点と鉄釘6点が出土している。1・2・4・6層から土壤サンプル(No.1216・1217・1219・1230)を採取し、蛍光X線及びプラントオパール分析(No.1216のみ灰像分析も実施)を実施している。(p36・37参照)

・KS-181溝状遺構 KS-181溝状遺構は、KS-180溝状遺構の南側で東西に9.8mほど検出された。幅30cm・深さ30cmほどの掘り方を持つ。KS-180とはほぼ平行に伸びるが、1A区西側部分でKS-180を切っている。遺物は出土していない。1層から土壤サンプル(No.1231)を採取し、蛍光X線及びプラントオパール分析を実施している。(p36・37参照)

・KS-178石敷溝状遺構 KS-178石敷溝状遺構は大広間跡と御成門跡の間で東西7.4mにわたり検出された。幅は170cmほど、深さは35~40cmほどで、緩やかな弧を描くような断面形を呈している。上層は粘性のあるシルト層となっており、上面に1~10cmほどの平らな河原石が張られている。埋土はややしまりのないシルト層で、下層には径20~30cmほどの円窪が大量に含まれている。大広間西端部のKS-53兩落ち溝跡とKS-84に切られている。遺物は出土していない。方向は大広間や御成門の東西軸方向に比べ、30°ほど北に傾いている。

【掘立柱穴】

・KS-233掘立柱穴 第5次調査では大広間跡西側で長方形の平面形をもつ掘立柱列が10基9間分検出されており、その南側延長部(1A-B区)でKS-233掘立柱穴を検出した。東西に150cm以上、南北に110cmほどの東西に長い掘り方を持つ長方形のプランであり、西側部分を断ち割りした結果、深さは110cmほどあることが確認された。西壁付近の底面部で、直径60cmほどの上面が平坦な石材を検出し、断面で柱の抜き取り痕跡を確認した。KS-233は、方形掘立柱列の南側の延長部に位置するとともに、礎板石の検出ラインも柱痕跡ラインと一致した部分にあり、柱間寸法もほぼ等間隔である。KS-81柱穴(第5次調査検出)に切られている。瓦1点が出土している。

・KS-246遺構 KS-233掘立柱穴の南側3.5mほどの部分に位置し、1A区南壁部分で南北に幅40cm分のみ検出されている。全体形を検出することはできなかったが、幅は1m以上で深さは80cm以上あるとみられる。KS-233と対になる掘立柱穴の可能性もある。遺物は出土していない。KS-233とKS-246の間にKS-178石敷溝状遺構が位置する。

【柱穴列】

・KS-186・189・192柱穴 御成門礎石の東側約4.3mの位置から、3個の柱穴が東西に列をなして検出され、2間分4.8mを測る。KS-186柱穴は直径32cmほどの円形で、直径10cmほどの円形の柱痕跡がある。KS-189柱穴は直径60cm以上ほどの楕円形で、直径15cmほどの円形の柱痕跡がある。KS-192柱穴は直径60cm以上の円形で、直径18cmほどの円形の柱痕跡がある。これら3個の柱穴は大広間東西軸とほぼ平行して検出されている。遺物は出土していない。他に柱痕跡の確認された柱穴はKS-245柱穴やKS-204柱穴などがあるが、列をなす柱穴は確認されなかった。

(4) その他の遺構

今回の調査で検出されたその他の遺構には、2区南部で検出された14基の円形遺構や、1A区中央部で検出された13基の円形遺構がある。これら遺構群の大きさは大小様々であり、検出された場所は建物が位置した部分の外側であることから積載など庭園に問わる遺構も含まれている可能性があるが、明確に確認することはできなかった。また、1A区西部では近代の大規模な溝跡、1B区東部からは大規模な近代土坑が検出された。

【2区検出遺構】

大広間南辺部分の雨落ち溝の南側では、直径30~120cmほどの円形または楕円形の平面形をなす遺構が、地山（V層）上面から14基検出されている。

・KS-213土坑 直径120cmほどの円形で、断面形はやや不整形な半円形で深さは35cmほどである。堆積土は4層に分かれ、3層には灰白色シルトが大量に含まれている。KS-214土坑、KS-215ピット状遺構を切っている。土師質土器2点が出土している。3層からは土壤サンプル（No.1050）を採取し、蛍光X線及びプラントオバール分析を実施している。（p36・37参照）

・ピット状遺構（KS-215・216・217・218・219・220・221・222・223・224・225・226） 直径30~60cmの円形や楕円形を呈するピット状の遺構である。うち3個（KS-217・221・222）について半裁して断面形と深さを調査した結果、深さは5~15cmほどで断面形も様々であった。KS-215はKS-163雨落ち溝跡に切られている。これらの遺構の埋土から土師質土器が7点出土した。KS-222からは土壤サンプル（No.1209）を採取し、周辺の旧表土（No.1211）と併せて花粉分析を実施している。（p36・37参照）

【1A区検出遺構群】

1A区中央部、KS-178石敷溝状遺構とKS-180溝状遺構の中間部分で円形または楕円形の平面形の遺構が13基検出されている。

・KS-195土坑 直径190cmほどの不整円形で、深さは25cm以上である。底部に径1~5cm程の円礫を多く含んでいる。KS-200・201ピット状遺構に切られている。金銅金具1点、土師質土器1点が出土している。

・KS-198土坑 直径120cmほどの円形で、深さは12cmほどである。遺構の底部に焼面があり、2層は炭化物層である。KS-196・199ピット状遺構に切られている。2層からは土壤サンプル（No.1214）を採取し、灰像分析を実施している。（p36・37参照）

・ピット状遺構（KS-175・188・190・191・196・199・200・201・202・205・208） 直径20~70cmの円形や楕円形のピット状の遺構である。

【近代遺構】

出土遺物から近代以降の遺構と考えられるものは、以下の3基である。

・KS-52溝跡 1A区西側から、幅150cmほどの溝跡が3.5mにわたり検出された。第5次調査の1区北西部で、11mにわたり検出された溝跡の延長部と見られる。深さは70cmほどで、断面形は逆台形である。

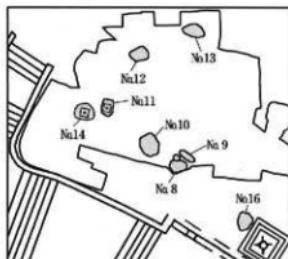
・KS-162土坑 1B区東側から東西5m以上、南北2mほどの土坑が検出された。深さは60cmほどで、底面は平坦である。ガラス片など近代の遺物とともに、1400点余りの瓦片が出土した。

・KS-174土坑 1B区西側から1A区東側にかけて検出され、東西2m以上、南北3m以上と推測される。金銅金具1点や鉄製品、瓦などが出土している。

4. 石材調査

調査前の1A区西側（御成門跡推定地付近）には直径1mを超える大型の石材が8石点在していた。いずれの石材も表面にノミによる加工痕が認められ、石材の1面に平坦面をつくりだしている。8石中7石は調査区（1A区）内に位置していたが、石材周辺の発掘調査と石材調査の結果、6石は原位置を保っていないことが確認できたことから、重機により調査区外に移動した。石材調査の結果、3石に柱座とほぞ穴の加工が認められ、その法量はほぼ一致している。柱座加工のある3石の内1石は、1A区西側で原位置を保ち検出された御成門礎石（石材No.14）であり、他の2石（石材No.9・No.11）についても御成門の控柱部分に使用された礎石の可能性が高い。御成門礎石（石材No.14）は柱座の確認できた面とその側面5cmほどまでは丁寧なノミ加工が認められ、加工が見られる部分は地表面に出ていた可能性が高い。

昨年度の大広間跡の発掘調査により、調査区内（大広間建物内部部分）に点在していた石材（8石）と原位置で確認された礎石（7石）、併せて15石の石材調査を行ったが、多くは加工を見られない自然石であり、その長径も平均80cmほどで、1mを超えるものは2石のみであった。このことから、御成門推定地付近で確認された礎石は大型な上、多くで加工痕が見られるなど、大広間礎石や付近で確認された石材とは異なっている。



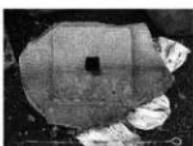
第26図 1A区付近石材点在状況 (1/300)



第27図 1A区調査前石材点在状況 (南東から)



石材No.8



石材No.9



石材No.10



石材No.11



石材No.12



石材No.13



石材No.14



石材No.16

第28図 石材写真

第8表 石材計測表

石材番号	底 面			重量(kg)	粗面接触面(cm)			14年次接觸面(cm)		
	長軸(cm)	横径(cm)	高さ(cm)		幅	横	高さ	幅	横	高さ
8	118	92	39	800						
9	104	72	42	400	50	50	33~25	8	8	5
10	147	114	28	1,200						
11	123	79	41	700	50	50	5	8	8	5
12	107	75	68	750						
13	136	102	65	800						
14	124	94	10+		50	50	5	8	8	5.5
16	118+	96+	33+							

5. 出土遺物

調査区から出土した遺物には、金属製品・陶磁器・瓦などがある。全体的には近代以降の層（I・II層）からの出土量が多いが、江戸時代の旧表土及び整地層上面（III層）からも出土している。

※文章中の遺物番号〔No.〕は、p30~34までの遺物実測図に対応する。

(1) 金属製品

出土した金属製品には、金銅金具・銅釘・鉄釘などがあり、大広間や御成門で使用された金属製品が多く含まれているとみられる。その他、古錢や弾丸なども出土している。

①金銅金具 31点出土しており、多くは建物内部や外部に取り付けられた飾り金具の破片とみられる。23点は大広間西側に位置する1A区からの出土で、KS-53雨落ち溝跡の円環層上面からは4点が出土している。金具の形状は様々であるが、うち15点にはこれまで出土した金銅金具と同様に魚子打ち（魚卵状の小さな粒）や鑿による巻形などの加工、鍍金などの特徴がみられる。筒状の形状示す金具や厚みがある金具など、これまでの調査で出土していない形状もあり、今後のさらには検証していく必要がある。

一部の金具について蛍光X線分析装置により組成金属の成分分析を行った結果、含有する銅の割合が極めて高く、金具は「純銅」で構成されていることが判明した（p35参照）。これら金銅金具は、錆落などのクリーニング作業を行った後、適切な保存処理を行なう予定である。

〔金銅金具No.59〕（横8.5cm・縦4.5cm・厚さ0.7mm）薄手の銅の地金に径2mmほどの魚子打ち（魚卵状の小さな粒）を施し、細い縫で丁寧に巻形して径5cmほどの花菱紋を表現している。鍍金が良好に残存しており、釘穴が3箇所にみられることからも、装飾性の高い部材に取り付けた可能性が高い。巻形した部分から大きく2つに折損している。（註 文化財建造物保存技術協会武藤正幸氏のご教示による。）

〔金銅金具No.531〕（横7.7cm・縦5.6cm・厚さ3~6mm）全体形は菱形を呈す。各辺に均等なくびれをもたせ立体感をもたせるなど装飾性をみせているが、鍍金は確認されなかった。他の金銅金具に比べ厚手で重量もあり、鑿がみられることから鋳造の可能性が高い。中央部に縦1.1cm、横2.5cmの長方形の穴があけられおり、棒状の部材が取り付けられたものと考えられる。建物の垂木部分に取り付けられた吊金具の可能性も指摘されている。

②銅釘 計417本出土しており、大広間西側の1A区から380本、2区から36本、1B区から1本が出土した。出土地点を示した図20（p15・16右上）からは、大広間建物内側部分に比べ建物外側部分からの出土が顕著であるとともに、建物東面・西面付近からの出土量が多いことを示している。また、御成門跡周辺からの出土量が極めて多いこ

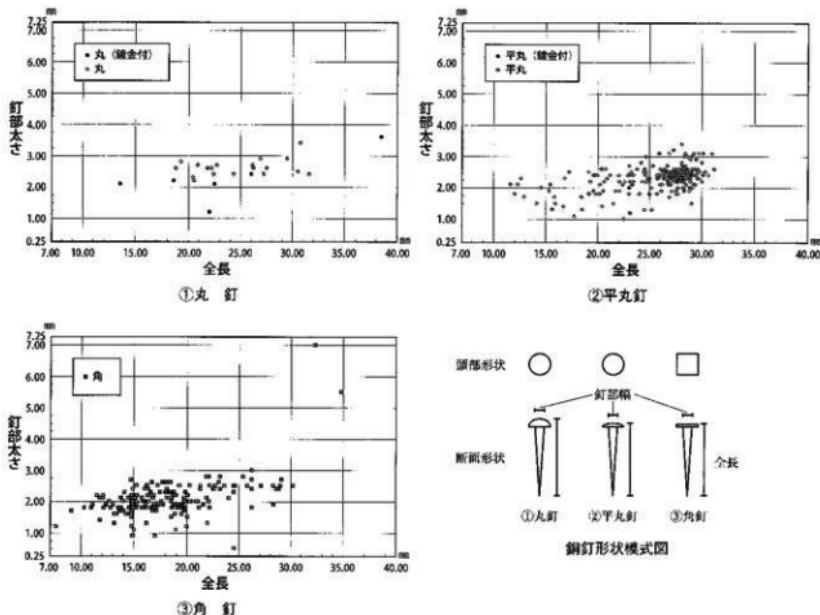
第9表 銅釘出土本数・法量

頭部形状	本数	全長 (mm)	釘頭大きさ (mm)		
			最大	最小	平均
平角	163 (123)	210	29.1 (30.2)	7.6	17.3
丸	30 (19)	33	31.6 (38.5)	18.8	24.7
半丸	103 (89)	300	30.1 (31.2)	11.6	23.4
不整形・破損	119	295	87	18.2	34
合計	417 (309)	702			() は調査全件における数値

とも確認できる。金銅金具12点には釘穴がみられることや、丸釘を中心として頭部に鍍金が見られる釘釘も8本出土しており、鍍金は金銅金具を建築材に取り付ける際に使用されたとみられる。

出土した銅釘は、すべて釘頭が四角形の断面形をなす角釘であり、釘頭部の形状から平角釘と半丸釘、丸釘、不整形（不明）の4つに分類した。大広間跡調査のこれまでの累計では、合計702本の銅釘が出土している。内訳は平角釘が300本（42.7%）、半丸釘が210本（29.9%）、丸釘が33本（4.7%）、不整形（不明）159本（22.7%）である。今年度は平角釘が417本中163本（39.1%）出土しており、累計で42.7%を占めている半丸釘よりも多い。

欠損のない銅釘の計測データについては、これまでの2年次の調査で出土した銅釘の計測結果と併せて図29に示し



第29図 出土銅釘法量分布グラフ・銅釘形状模式図

た。銅釘の全長は最小7.6mmから最大38.5mmまで大小様々あり、釘部幅(太さ)の相関関係を示すグラフからは、全長と幅がおむね比例傾向を示すことが確認できる。金銅金具同様、一部の銅釘について蛍光X線分析装置により組成金属の成分分析を行った結果、No.531銅釘では銅(Cu)の割合が94%を示すなど、ほぼ純銅で構成されていることを確認した。

③その他銅製品

古錢は7点出土しており、江戸時代のものは寛永通宝が1点〔No.154〕のみで、その他は一錢銅貨など明治以降の通貨である。全長1.7cm、径0.8cmほどの弾丸が1点〔No.15〕出土しており、明治期に仙台城跡に拠を置いた軍隊に関わる遺物の可能性がある。

④鉄製品

166点出土している。多くは棒状を呈しており鉄釘とみられるが、多くは赤錆に包まれ原型を留めていない。鉄釘の多くは頭部が角形をしており、全長18cm以上の大型の鉄釘も含まれるなど大小様々である。Ⅲ層上面から33点、KS-53・163雨落ち溝上面から20点出土しており、大広間に使用された鉄釘の可能性がある。また、全長23cmほどの鍔状の鉄製品〔No.105〕も出土している。

(2) 陶磁器 (磁器・陶器・土師質土器)

陶磁器には、磁器・陶器・土師質土器などがあり、大広間南辺部である2区からの出土量が多い。磁器・陶器はI・II層からの出土量が多くを占めるが、土師質土器はIII層や遺構内からの出土量が多い。

①磁器 50点出土している。Ⅲ層からの出土は2点のみで、遺構からは出土していない。器種・産地が特定できたものは20点で、肥前産の染付皿や碗が8点出土している他、中国産、瀬戸美濃産、大堀相馬産などが数点みられる。多くは19世紀以降の比較的新しいものであるが、17世紀の肥前産染付皿〔No.139〕や16~17世紀初頭（明代末）の中国産輸入磁器〔No.958〕なども含まれている。

②陶器 35点出土している。Ⅲ層からの出土は4点のみで、遺構からは出土していない。器種・産地が特定できたものは20点で、大堀相馬産15点の他、美濃産や織部産、肥前産などが数点みられる。大堀相馬産の多くは18~19世紀の施釉碗や香炉などであり、施釉技法には、灰釉・白湯釉・青釉・施釉などがみられた。織部産は17世紀前半の鉄輪大鉢〔No.552〕であり、長石釉や目跡などが確認された。その他、中世陶器が2点出土しており、常滑産の壺〔No.818〕と在地産の壺〔No.1097〕である。

③土師質土器 105点出土している。2区から77点出土しており、うち40点がⅢ層及び遺構内から出土している。器種の多くは一般的に「かわらけ」と称される皿であり、鉢や焼塙壺なども含まれている。2区Ⅱ層からほぼ完形で出土した皿〔No.585〕は、口径86mm・器高17mm・底径49mmで底部に回転糸切り痕がみられる。口縁部に煤が付着していることから灯明皿として使われた可能性が高く、所属時期は江戸時代中期以降とみられる。（註 陶磁器類の年代・産地については、仙台市博物館佐藤洋氏に実見して頂き、ご教示を得た。）

(3) 瓦

瓦は、総計5772点（713kg）出土しており、平瓦（4307点・430kg）と丸瓦（925点・106kg）が出土点数全体の約90%を縮めている。全体的にはI・II層からの出土量が多いが、1A区御成門跡周辺からはⅢ層や遺構内からも出土している。大広間と御成門の屋根は柿葺きであったと推測されるため、多くは仙台城本丸内の他の建造物で使用された瓦が調査区内に混入した可能性が高い。御成門礎石（石材No.14）周辺のⅢ層上面からは、堀瓦（堀平瓦・駒巴瓦）がまとめて出土したため、下図のとおりにトレント区分（AT~DT）を設定し、取り上げ位置を確認した。絵図には御成門の南北に軒や腰掛などの施設の存在を示すものもあることから、これらの施設に葺かれていた瓦の可能性がある。

①軒丸瓦 32点出土している。瓦当部の文様が判別できるものが19点あり、九曜文7点〔No.417〕・三巴文6点〔No.1191〕・珠紋三巴文5点〔No.43・611〕・桐文1点〔No.576〕である。

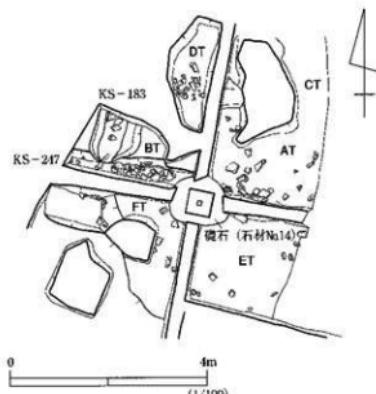
②軒平瓦 22点出土している。瓦当部の文様が判別できるものが13点あり、菊花文2点〔No.654〕・篆文3点〔No.7・883・1276〕・三引文1点〔No.1200〕などがある。また、文様不明であるが、滴水瓦が4点〔No.282・972〕出土している。

③棟瓦 棟瓦は25点出土し、軒棟瓦は4点ある。瓦当部の文様が判別できるものは三巴文〔No.981〕と九曜文〔No.264〕の2点である。

④棟瓦 70点出土している。熨斗瓦10点、輪邊29点、面戸瓦20点、冠瓦4点〔No.123-37〕、伏間瓦5点、菊丸瓦1点〔No.1040〕などがある。

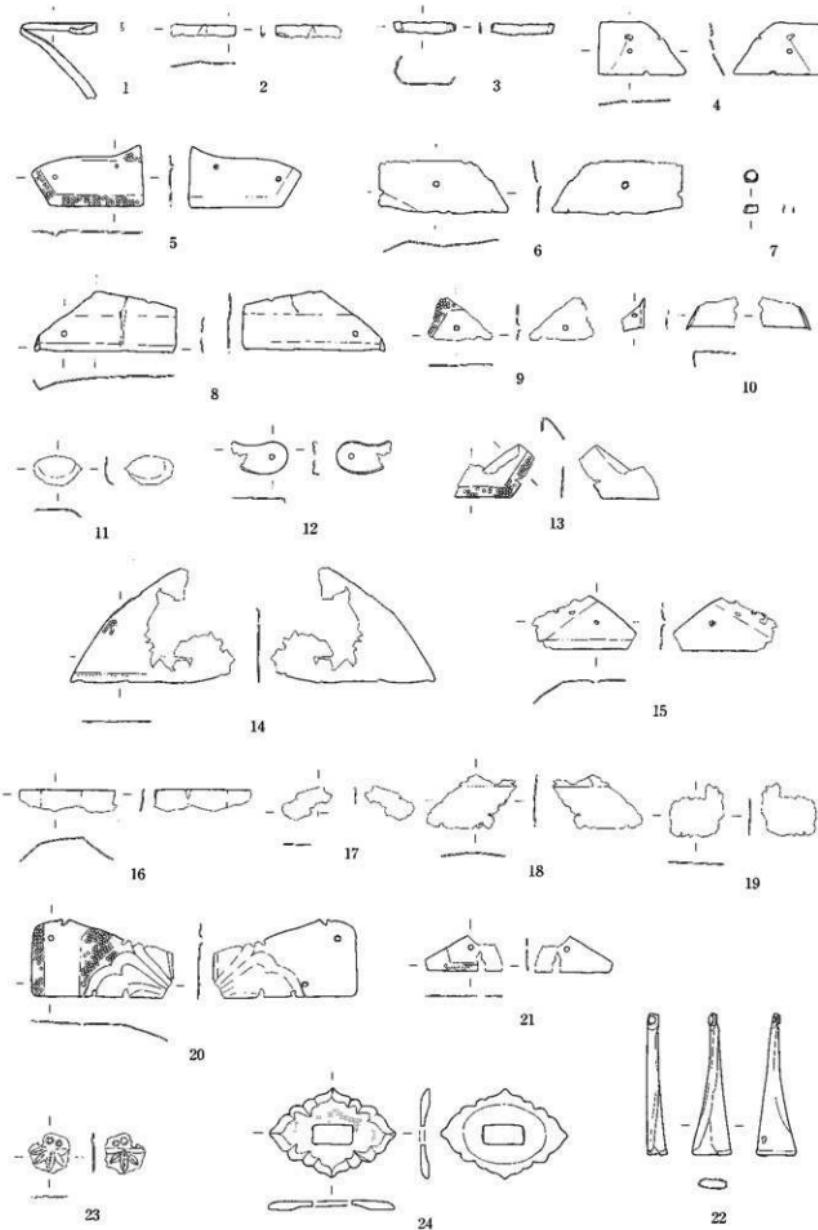
⑤飾瓦 13点出土しており、鬼瓦8点〔No.1269・430・1271〕が含まれている。

⑥道具瓦 29点出土しており、谷丸瓦1点が含まれている。

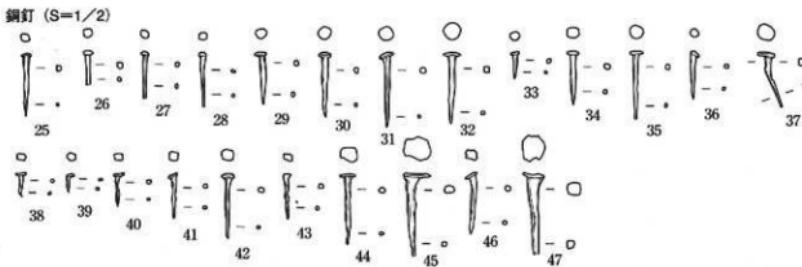


第30図 御成門礎石周辺瓦出土状況

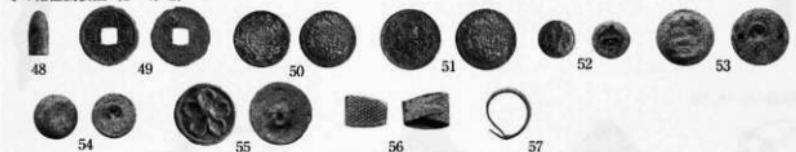
金銅金具 (S=1/3)



第31図 大広間跡出土遺物実測図・写真1 (金銅金具・銅釘・その他金属製品)



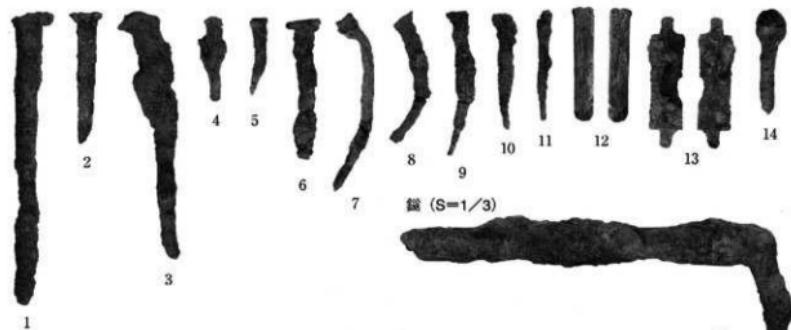
その他金属製品 (S=1/2)



第10表 大広間跡出土遺物記表1

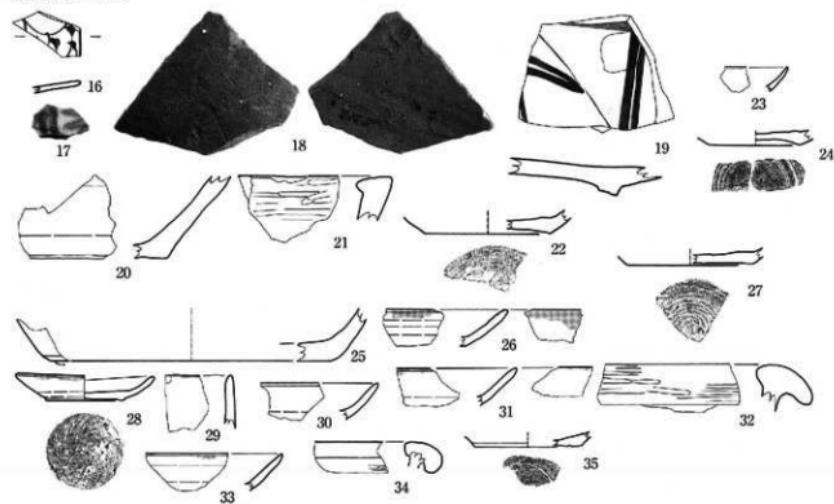
図版 番号	種類	遺物番号	区	遺跡・層位	直　　高　　横　　厚さ (mm・g)			考
					幅	高さ	厚さ	
1		2	IA	I	5	125	1.0	39
2		30	IA	I	8	49	0.8	1.1 純金
3		31	IA	I	7	55	0.8	1.4 純金
4		32	IA	I	30	65	0.8	53.1 純金 刃穴有り (孔径3mm)
5		33	IA	I	35	69	0.7	45.5 純金 刃穴有り 無子牙打ち
6		34	IA	I	23	80	0.7	76 純金 刃穴有り
7		35	IA	I	6	6	0.6	6.1
8		36	IA	I	27	87	0.6~0.7	9.2 純金 刃穴有り (孔径3mm)
9		38	IA	KS-53・1	26	39	0.6	1.8 純金 刃穴有り (孔径3mm)
10		39	IA	KS-53・1	18	31	0.5	1.4 (X1.2, 小2.2) 純金 刃付 (No.290) 刃穴有り (孔径3mm)
11		40	IA	KS-53・1	18	20	0.9	1.2
12		41	IA	被覆	20	133	0.8	2.5 純金 衣付有り (孔径3mm)
13		42	IA	被覆	20	65	0.7	2.3 純金 衣付有り
14	金銀合金	43	IA	被覆	33	63	0.7~0.8	4.7 純金 衣付有り
15	金銀合金	44	IA	KS-174・1	33	72	0.4~0.7	3.2 純金 衣付有り
16	金銀合金	45	IA	被覆	14	59	0.7	4.4 純金
17	金銀合金	46	IA	被覆	130	(54)	0.5	3.0 純金
18	金銀合金	47	IA	被覆	130	(22)	0.6	6.9 純金
19	金銀合金	48	IA	被覆	130	(34)	0.5	1.8 純金 衣付有り
20	金銀合金	49	IA	被覆	46	50	0.7	1.1 純金 衣付有り
21	金銀合金	50	IA	被覆	22	47	0.7	2.3 (X1.0, 小0.4) 純金 衣付有り (孔径3mm)
22	金銀合金	51	IA	KS-53・1	24	68	0.6	5.8 衣付有り 1.孔径(4mm) 第2孔(3mm) 衣の際 (大5mm×小3mm)
23	金銀合金	52	IA	KS-53・1	25	32	0.4~1.0	0.7 衣付有り
24	金銀合金	53	IA	被覆	56	77	0.6~0.9	4.5 衣付 (軸が入っている) 衣穴有り (2.5×1.2cm)
図版 番号	種類	遺物番号	区	遺跡・層位	直　　高　　横　　厚さ (mm・g)			考
					幅	高さ	厚さ	
25		54	IA	被覆	26.0	0.45	38~35	2.4 衣部・頭部純金
26		55	IA	被覆	13.0	0.35	33~37	2.3 衣部・頭部純金
27		56	IA	被覆	14.6	0.39	37~35	2.2 衣部・頭部純金
28		57	IA	被覆	22.0	0.30	35~33	2.1 衣部・頭部純金
29		58	IA	被覆	21.8	0.50	48~42	2.6 衣形
30		59	IA	被覆	26.2	0.67	54~51	2.6 衣形
31		60	IA	被覆	30.8	0.93	62~60	3.4 衣形
32		61	IA	被覆	30.1	1.08	74~65	3.1 衣形
33		62	IA	被覆	11.6	0.21	38~37	2.1 衣形
34		63	IA	被覆	22.0	0.61	57~52	2.4 衣形
35		64	IA	被覆	27.7	0.61	57~52	2.1 衣部先端純金
36		65	IA	被覆	18.8	0.37	43~36	2.4 衣形・衣部先端取り有り
37		66	IA	KS-53・1	24.2	0.60	72~67	2.8 衣形・金銀合金 (No.289) に何番
38		67	IA	KS-53・1	10.3	0.11	43~33	1.8 衣形・形相
39		68	IA	KS-53・1	7.6	0.06	39~35	1.2 衣形
40		69	IA	被覆	137	0.21	46~2.7	1.7 衣形
41		70	IA	被覆	18	0.32	38~3.5	2.1 衣形
42		71	IA	被覆	26.2	0.75	62~56	3.0 衣形
43		72	IA	被覆	14.5	0.35	34~24	2.9 衣形・衣部先端取り有り
44		73	IA	被覆	29.1	0.88	66~61	2.7 衣形・衣部先端取り有り
45		74	IA	被覆	34.8	3.22	111~98	5.7 衣部先端純金
46		75	IA	被覆	24.6	0.68	44~42	2.6 衣形
47		76	IA	被覆	32.5	4.42	105~9.6	7.0 衣部先端純金・衣部先端取り有り
図版 番号	種類	遺物番号	区	遺跡・層位	直　　高　　横　　厚さ (mm・g)			考
					幅	高さ	厚さ	
48	その他の 金属製品	77	IA	被覆	17.2	8.0	0.8	7.8 純金
49	その他の 金属製品	78	IA	被覆	23.1	1.0	0.8	8.8 純金 袋状
50	その他の 金属製品	79	IA	被覆	30.1	1.7	0.9	9.9 純金 不明
51	その他の 金属製品	80	IA	被覆	21.0	1.2	0.5	3.5 一鉛錠
52	その他の 金属製品	81	IA	被覆	13.5	0.8	1.2 ボタン	
53	その他の 金属製品	82	IA	被覆	21.3	6.3	2.6 ボタン	
54	その他の 金属製品	83	IA	被覆	16.7	5.6	2.0 ボタン	
55	その他の 金属製品	84	IA	被覆	21.3	4.4	2.3 ボタン	
56	その他の 金属製品	85	IA	被覆	13.5	5.5	2.4 ボタン	
57	その他の 金属製品	86	IA	被覆	17.5	5.5	2.4 ボタン	
58	その他の 金属製品	87	IA	被覆	21.1	4.9	2.4 ボタン	
59	その他の 金属製品	88	IA	被覆	13.4	5.1	2.4 ボタン	

鉄製品 ($S=1/3$)

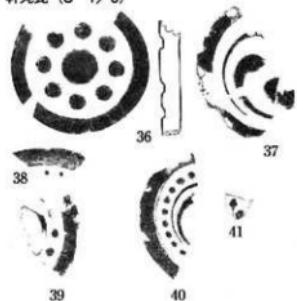


鎌 ($S=1/3$)

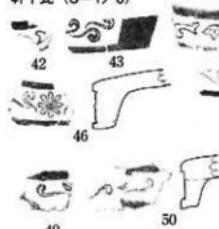
陶磁器 ($S=1/3$)



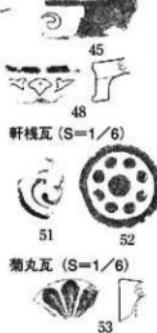
軒丸瓦 ($S=1/6$)



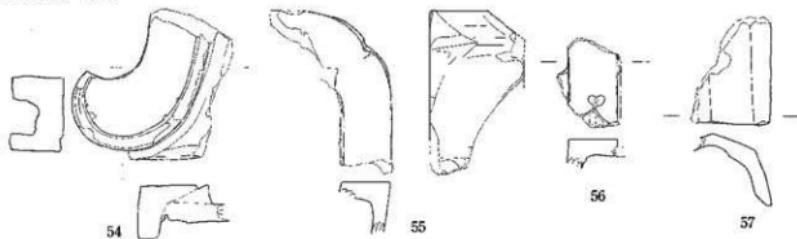
軒平瓦 ($S=1/6$)



軒桟瓦 ($S=1/6$)



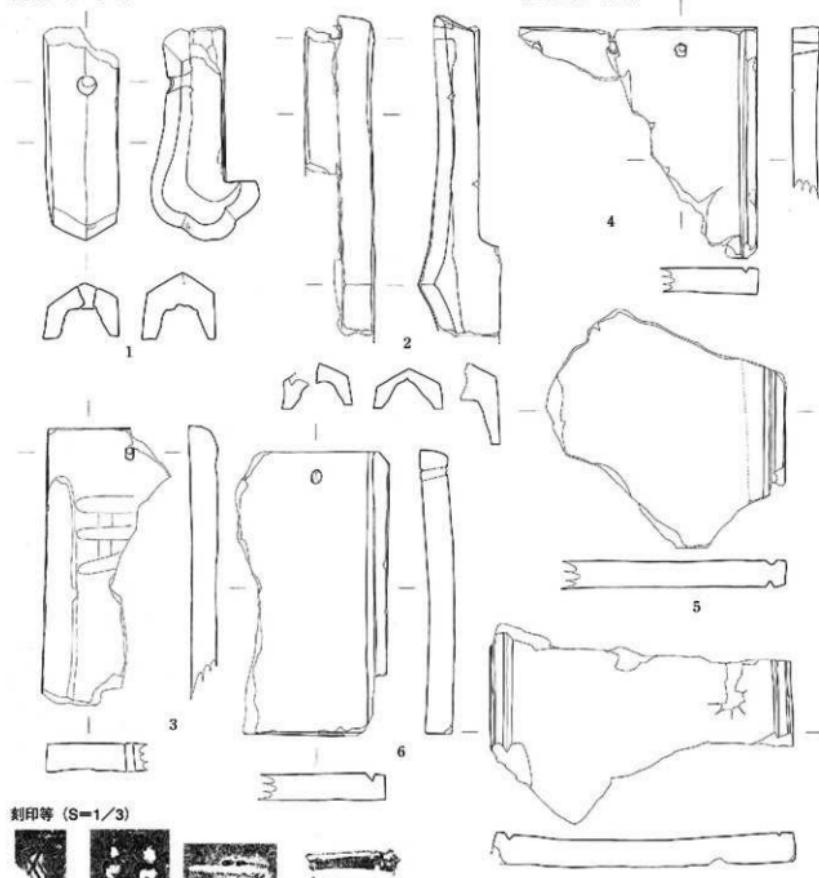
第32図 大広間跡出土遺物実測図・写真2 (鉄製品・陶磁器・瓦)



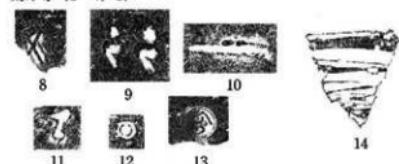
第11表 大広間跡出土遺物記録表2

遺物 番号	遺物番号	区	遺物・部位	重 量 (kg)					備 考
				全長	幅	厚さ	形狀	備考	
焼灰	21	IA	II	(77.0)	26.0	1.0	直角	直人縫	瓦片
	176	IA	傾斜	(61.0)	20.4	1.2	直角	直人縫	1.15
	747	IA	II	(156.1)	(25.4)	1.6	直角	直人縫	3.15
	752	IA	II	(32.4)	—	—	直角	直人縫	6.4
	797	IA	KS-174-2	47.9	10.3	6.8	直角	直人縫	5.5
	935	IA	KS-180-2	(96.3)	21.6	10.0	直角	直人縫	7.8
	475	IB	KS-162-1	119.3	9.1	6.9	直角	直人縫	6.0
	8	—	II	(87.9)	15.2	8.2	直角	直人縫	7.5
	320	—	II	(91.0)	13.7	8.5	直角	直人縫	5.5
	520	—	II	(91.0)	12.4	7.3	直角	直人縫	5.9
鉄製品	622	—	II	63.2	—	—	直角	直人縫	3.2
	338	IB	KS-162-1	68.7	11.9	3.9	直角	直人縫	9.6
	993	IA	I	60.7	19.5	2.6	直角	直人縫	17.1
	342	IB	KS-162-1 (614)	8.6	9.2	—	直角	直人縫	20.6
	—	—	—	—	—	—	直角	直人縫	不明種類(金物)
鐵鋤	遺物番号	IP	直角・傾斜	長さ	幅	厚さ	形狀	備考	備 考
	106	IA	傾斜	11.2	18.5	0.6	直角	直人縫	31.3
	129	IA	傾斜	10.2	—	—	直角	直人縫	4.82
	938	—	II	—	—	—	直角	直人縫	0.74
	1097	—	I	受	—	—	直角	直人縫	0.74
	352	—	II	棒	—	—	直角	直人縫	128.62
	818	—	II	棒	—	—	直角	直人縫	79.19
	1095	—	II	棒	—	—	直角	直人縫	47.60
	90	IA	II	直角	—	—	直角	直人縫	25.7
	792	IA	II	直角	—	—	直角	直人縫	1.5
土器質土器	1303	IA	KS-191-1	圓	—	—	直角	直人縫	10.35
	1094	IA	圓	—	—	—	直角	直人縫	36.35
	347	IB	KS-162-1	圓	—	—	直角	直人縫	8.31
	295	—	I	圓	—	—	直角	直人縫	12.66
	386	—	II	圓	66	17	直角	直人縫	59.97
	396	—	II	圓	—	—	直角	直人縫	5.6
	693	—	II	圓	—	—	直角	直人縫	5.75
	662	—	II	圓	—	—	直角	直人縫	4.5
	819	—	II	圓	—	—	直角	直人縫	10.16
	332	—	II	圓	—	—	直角	直人縫	4.5
柱頭瓦	1119	—	II	圓	—	—	直角	直人縫	18.81
	864	—	II	圓	—	—	直角	直人縫	66
	417	IA	D-T	丸瓦	(128.0)	12.0	2.3	直角	直人縫
	1193	IA	KS-169-1	三文瓦	—	—	直角	直人縫	0.5
	1189	IA	KS-162-1	三文瓦	—	—	直角	直人縫	0.5
	43	—	I	三文瓦	—	—	直角	直人縫	0.1
	611	—	—	三文瓦	—	—	直角	直人縫	0.39
	576	—	II	三文瓦	—	—	直角	直人縫	0.19
	7	IA	I	三文瓦	—	—	直角	直人縫	0.01
	1015	IA	KS-169-1	滑石瓦	—	—	直角	直人縫	0.005
軒瓦瓦	1276	IA	KS-162-1	室内瓦	—	—	直角	直人縫	0.25
	263	IB	KS-162-1	室内瓦	—	—	直角	直人縫	0.32
	651	—	II	室瓦	—	—	直角	直人縫	0.072
	1200	—	II	引瓦	—	—	直角	直人縫	0.032
	883	IB	II	三段瓦(瓦底)	—	—	直角	直人縫	0.19
軒瓦瓦 (滑水)	252	IB	KS-162-1	滑水	(2.5)	13.0	3.0	直角	直人縫
	972	—	II	滑水	—	—	直角	直人縫	0.009
板瓦	7	IA	I	板瓦	—	—	直角	直人縫	0.23
	1015	IA	KS-169-1	滑石瓦	—	—	直角	直人縫	0.25
	1276	IA	KS-162-1	室内瓦	—	—	直角	直人縫	0.318
	263	IB	KS-162-1	室内瓦	—	—	直角	直人縫	0.322
	651	—	II	室瓦	—	—	直角	直人縫	0.072
	1200	—	II	引瓦	—	—	直角	直人縫	0.032
	883	IB	II	三段瓦(瓦底)	—	—	直角	直人縫	0.19
	252	IB	KS-162-1	滑水	(2.5)	13.0	3.0	直角	直人縫
	972	—	II	滑水	—	—	直角	直人縫	0.009
	—	—	—	滑水	—	—	直角	直人縫	0.23
板瓦 (瓦底)	961	IA	II	二巴(瓦底)	8.2	2.1	0.4	直角	直人縫
	264	—	I	九瓣瓦	10.2	2.1	0.6	直角	直人縫
	—	—	—	九瓣瓦	—	—	直角	直人縫	0.23
板瓦 (瓦底)	1010	IA	KS-169-1	瓦花	(0.5)	—	—	直角	直人縫
	1209	IA	KS-182-1	瓦花	(1.6)	—	—	直角	直人縫
板瓦 (瓦底)	430	—	I	瓦花	(2.0)	11.7	2.0	直角	直人縫
	1271	—	I	瓦花	(1.6)	8.0	3.7	直角	直人縫
板瓦 (瓦底)	1010	IA	KS-169-1	瓦花	(0.5)	—	—	直角	直人縫
	1209	IA	KS-182-1	瓦花	(1.6)	—	—	直角	直人縫
板瓦 (瓦底)	123-37	IA	C-T II	瓦花	(1.6)	1.8	—	直角	直人縫

駒巴瓦 (S=1/6)



刻印 (S=1/3)



第33図 大広間跡出土遺物実測図・写真3 (瓦)

第12表 大広間跡出土遺物註記表3

圖版 番号	種類	遺物番号	区	遺物・位置	法 量 (cm・kg)				名 称
					高さ	幅	厚さ	重さ	
1	駒巴瓦	120-87	IA	ATB-1 (2860)	7.1				駒六・印無 縦5.2cm 右右2.1 左左2.1 斜板面13.3 斜板厚5.1
2		120-88	IA	ATB-1 (2860)	6.25	4.4~1.1	1.0~5.0	1.25	駒六・印有 短5.2cm 右右2.1 左左2.1 斜板面13.3 斜板厚5.1
3		120-84	IA	DTB-1 (2860)	34.4	15.4	3.3	1.63	駒六・印有 短5.2cm 右右2.1 左左2.1 斜板面13.3 斜板厚5.1 4点合計
4		120-13	IA	ATB-1 (2860)	29.6	32		2.06	駒六・印有 短5.2cm 右右2.1 左左2.1 斜板面13.3 斜板厚5.1
5	柳平瓦	120-61	IA	ATB-1 (2860)	26.3	29.7	3.3	3.14	上端水切り短板13.5 高0.7 重0.6 下端本切19.5 重0.6 亂0.6 亂0.6
6		120-79	IA	DTB-1 (2860)	69.4	187	3.3	3.21	水切り位置15.5 高1.0 重0.6 駒六 柳円 12×2.6cm 角削?
7		120-83	IA	DTB-1 (2860)	21.7	37.6	3.4	2.79	駒六 水切り位置15.5 高1.0 重0.6 駒六 柳円 12×2.6cm 角削?
8	駒巴瓦	120-79	IA	法標・駒巴 位置未定					駒六 水切り位置15.5 高1.0 重0.6 駒六 柳円 12×2.6cm 角削?
9	丸瓦	120-10	IA	KS-162-1 上端					
10		120-29	IA	KS-247-2 下端					
11	駒伏四	120-44	IA	1					
12	柳平瓦	1149	IA	1					
13	(水切6)	120-14	IA	印付2月 右側面					
14	平瓦	120-33	IA	CTB 斜板面					
		1157	IA	1					古たれ底

⑦堺平瓦 249点 (106kg) 出土している。方形ないし長方形の平坦な板状の瓦であり、計測を行った結果、長さは26.5cm [No.123-13] 及び40.4cm [No.123-79]、幅は37.6cm [No.123-83]、厚さは3.2~3.4cmである。棟付き平板瓦も13点出土した他、30点で側面部分に水切り（溝）があり、水切り幅0.4~1.0cm、深さ0.5~0.9cmを有する。接合痕から袖部が付属したことを示す瓦 [No.123-84] や両側面に水切りを有する瓦 [No.123-83] なども確認された。駒巴瓦と一対で組み合わされて使用されたとみられる。

⑧駒巴瓦 100点 (33kg) 出土している。駒の背のような形状の丸瓦が2~3本連結した形状を示すものと思われ、堺平瓦と一対で組み合わされて使用されたとみられる。頭部は丸みを帯びており、2段のゆるやかな縫れを有している [No.123-87]。幅は9cmほどで、上部に釘穴がみられ、内側には指ナデ調整の痕跡がみられるものが多い。三の丸跡や二の丸跡の発掘調査でも出土しているが、完形のものは出土しておらず、全長や全体形は不明である。

6. 金属製品の分析

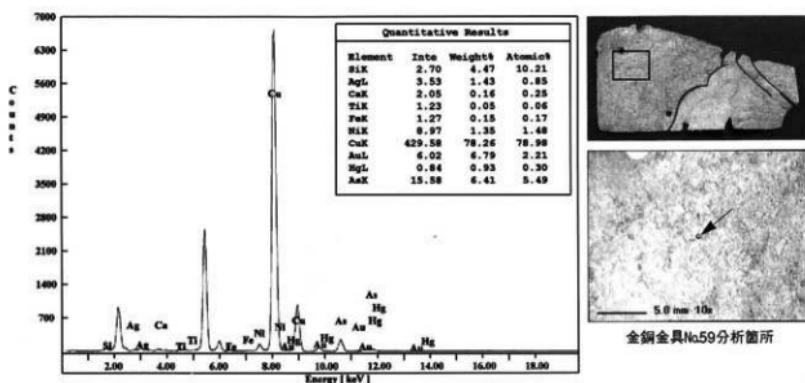
出土した金銅金具については、理科学的な検証資料を得ることを目的に、奈良大学文学部文化財学科教授である西山要一氏の協力を得て蛍光X線分析装置による金属組成の成分分析を実施した。

分析の結果、銅 (Cu) の含有率は90%以上を示し、金銅金具は極めて純度の高い銅で構成されていることが判明した。また、数点から砒素 (As) が検出されており、銅の溶解効率を高め加工を容易にするために混入した可能性が認められる。金部分からは、金 (Au) のほか微量の水銀 (Hg) も検出され、鍍金（メッキ）である可能性が高いことが判明した。鍍金部分にX線を照射した場合でも金 (Au) の成分は6%程度であることから、鍍金部分は薄いとともに、表面には多くの穴が空いており銅のサビ（錆）が全体に噴出している可能性がある。ケイ素 (Si) やチタン (Ti)、ニッケル (Ni) など土壤成分が検出されていることから、表面のクリーニング作業を行ってから再度詳細な分析を実施する必要が認められた。

これら分析結果は、京都など他地域の城郭で使用された金銅金具の分析データ等と比較検討する具体的な資料となるものであり、仙台城跡で出土した金銅金具の特徴や技術的特性などを解明する重要な資料となり得るものである。



第34図 分析作業風景



第35図 蛍光X線分析装置による金銅金具の分析結果（金銅金具No59）

7. 土壤分析

本調査における土壌サンプルの各種分析については、株式会社環境研究所に委託した。なお、以下の視点から分析サンプルの選定を行った。

IA区のKS-180・181・183溝状造構から採取した土壤サンプルについては、蛍光X線及びプラント・オパール分析を実施した。これら造構は堀跡など遮蔽施設の可能性があるために、壁上に含まれていたと推測されるササなどイネ科植物の存在や、漆喰に含まれるカルシウム分などの成分を検出することを目的としたものである。2区のKS-163雨落ち溝跡・KS-222土抗・Ⅲa層(旧表土)から採取した土壤サンプルについては、花粉分析を実施した。この周辺から植栽痕(植木穴)とみられる土抗やビット状造構などが多数検出されているため、当時の植栽状況などの解明を目的としたものである。また、IA区検出のKS-198土抗の炭化物層から採取した土壤サンプルは灰像分析を、2区KS-213土抗から採取した灰白色土は蛍光X線及びプラント・オパール分析などを実施し、それ

第13表 分析試料一覽

試料	サンプルNo	区	遺傳子名	性状	分析方法①	分析方法②	分析方法③
1	1216	IA			1 安光純合子分類	1 安光純合子分類	1 実験分析
2	1219	KS - 180	溝状濃度	4 安光純合子分類	4 安光純合子分類	4 実験分析	
3	1230			6 安光純合子分類	6 安光純合子分類	6 実験分析	
4	1231	IA	KS - 181	溝状濃度	1 安光純合子分類	1 安光純合子分類	1 実験分析
5	1259	IA	KS - 183	溝状濃度	2 安光純合子分類	2 安光純合子分類	2 実験分析
6	1260			6 安光純合子分類	6 安光純合子分類	6 実験分析	
7	1214	IA	KS - 198	土斑	2 土斑分析		
8	1263	IA	三B種	斐地斑	安光純合子分類		
9	1207	2			1 花粉分析		
10	1208		KS - 163	衛脣状葉	3 花粉分析		
11	1209	2	KS - 222	土斑	1 花粉分析		
12	1211	2	三B型	田んぼ土	花粉分析		
13	1050	2	KS - 213	土斑	3 実験純合子分類	3 実験純合子分類	3 実験分析

・プラント・オバール（植物珪酸体）分析および灰像分析

KS-180・6層(No.1230)では、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。4層(No.1219)では、ミヤコザサ節型が増加しており、イネ、ネザサ節型などが出現している。1層(No.1216)では、ミヤコザサ節型がさらに増加しており、キビ族型、ススキ属型、ウクシ族サ族Aなども出現している。イネの密度は700~1,300個/gと比較的低い値である。1層(No.1216)からは、イネ科植物に由来する灰像組織は認められなかった。KS-181・1層(No.1231)では、イネなどが検出されたがいずれも少量である。イネの密度は800個/gと低い値である。KS-183・2層(No.1259)6層(No.1260)では、イネ、ネザサ節型などが検出されたがいずれも少量である。イネの密度は700~800個/gと低い値である。KS-213・3層(No.1050)では、イネ、メダケ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたがいずれも少量である。イネの密度は800個/gと低い値である。KS-198・2層(No.1214)では、イネ科植物に由来する灰像組織は認められなかった。KS-180・181・183・213埋土の堆積当時は、周辺で耕作が行われていたと考えられ、便らかの形

で各遺構内にイネの植物甘酸体が混入したと推定される。

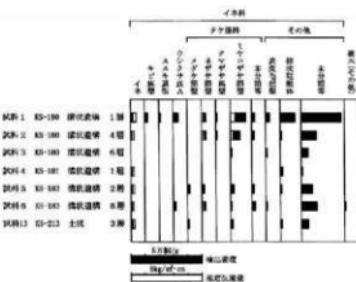
また、遺跡周辺にはミヤコザサ節などのササ類が生育していたと考えられ、部分的にススキ属やチガヤ属、ネザサ節なども見られたと推定される。灰像分析では、イネ科植物に由来する灰像組織は認められなかった。

· 花粉分析

KS-163・3層(No.1208)では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりも極めて高い。樹木花粉では、スギやマツ属複維管束東属が優占し、コナラ属コナラ亞属、ハンノキ属、クリ、ブナ属などが伴われる。草本花粉では、

それ遺憾の性格空明を目的とした。

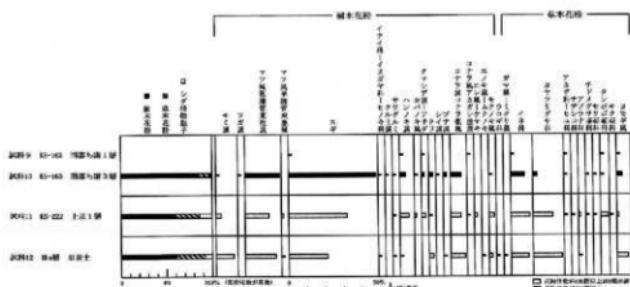
分析の結果、1A区溝状造構の土壤サンプルからは、イネ密度やカルシウムなどの成分を顕著に検出することはできず、造構の性格を解明する資料を得ることはできなかった。また、2区雨落ち溝跡・土抗・Ⅲa層の土壤サンプルからは、樹木花粉の占める割合が高いことを示すデータが得られたが、当時の植栽状況を推定するには至らなかった。以下、分析結果について報告する。



第36図 ブラント・オバール分析結果

イネ科が比較的多く、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われる。

1層 (No.1207) では、スギ、コナラ属アカガシ亞属、イネ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。KS-222・1層 (No.1209) では、樹木花粉の占める割合が草



第37図 花粉分析結果

本花粉よりも高く、シダ植物胞子もやや多い。樹木花粉では、スギやマツ属複維管束亞属が優占し、コナラ属コナラ亞属やハンノキ属などが伴われる。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が比較的多く、タンボボ科、アブラナ科、ヨモギ属などが伴われる。Ⅲa層 (No.1211) 樹木花粉の占める割合が草本花粉よりも高い。樹木花粉では、スギやマツ属複維管束亞属が優占し、モミ属、コナラ属コナラ亞属などが伴われる。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科が比較的多く、ヨモギ属などが伴われる。

KS-163・3層の堆積当時は、近隣にスギやマツ類を主体として、ナラ類、ハンノキ属、クリ、ブナ属なども見られる森林が分布していたと考えられ、部分的にイネ科やヨモギ属などが生育する日当たりの良い開かれたところも見られたと推定される。1層からは、花粉があまり検出されないことから、植生や環境の詳細な推定は困難である。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことが考えられる。KS-222・1層の堆積当時は、近隣にスギやマツ類を主体として、ナラ類、ハンノキ属、モミ属なども見られる森林が分布していたと考えられ、イネ科、カヤツリグサ科、タンボボ科などの草本類が生育する日当たりの良い開かれたところも見られたと推定される。Ⅲa層堆積当時は、近隣にスギやマツ類を主体として、モミ属、ナラ類、クリなども見られる森林が分布していたと考えられ、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育する日当たりの良い開かれたところも見られたと推定される。

・蛍光X線分析

KS-213 (土坑) の3層 (No.1050) では、カルシウム (CaO) の含量が45.1%、珪酸 (SiO₂) が29.1%、アルミニウム (Al₂O₃) が12.0%、鉄 (Fe₂O₃) が10.1%であり、カルシウムが主成分となっている。これは、消石灰 (水酸化カルシウム、Ca(OH)₂) に植物根糞 (スサ) や山上などを混ぜた漆喰土の分析結果に類似しており、本試料に漆喰土が含まれている可能性が考えられる。その他の造構の試料 (No.1216・1217・1230・1231・1259・1260) や整地層 (No.1263) では、珪酸 (SiO₂) の含量が56.9～65.7%、アルミニウム (Al₂O₃) が18.5～27.4%、鉄 (Fe₂O₃) が7.7～11.1%であり、いずれも珪酸が主成分となっている。このような元素組成は、一般的な土壤の分析結果と類似している。また、その他の元素についても、特に明瞭な特徴は認められなかった。

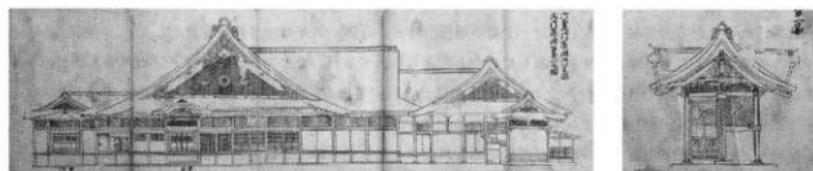
元素・実測 （%）	KS-163				KS-162				KS-213				KS-211			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
11 Na ₂ O	0.018	0.341	0.425	0.315	0.420	0.669	0.135	0.361								
12 Mg ₂ O	0.024	0.154	0.155	0.255	0.514	0.724	0.474	0.405								
13 Al ₂ O ₃	18.502	16.490	21.444	26.715	21.981	21.391	23.948	15.003								
14 SiO ₂	63.120	65.699	56.304	58.261	62.355	69.191	62.218	62.090								
15 Fe ₂ O ₃	1.247	1.485	1.164	1.166	1.287	1.248	1.128	0.576								
16 SO ₃	0.051	0.020	0.063	0.060	0.060	0.200	0.200	0.106								
17 K ₂ O	1.746	3.795	0.147	1.061	1.664	1.193	1.386	0.177								
18 CaO	1.065	1.168	1.237	1.496	2.439	1.066	1.436	45.006								
19 TiO ₂	1.270	0.339	0.933	1.041	0.979	1.141	0.961	1.107								
20 V ₂ O ₃	0.017	0.025	0.034	0.019	0.022	0.035	0.024	0.002								
21 MnO	0.205	0.286	0.152	0.239	0.235	0.235	0.234	0.232								
22 Fe ₂ O ₃	10.930	7.480	16.195	9.071	8.224	11.111	8.933	30.071								
23 CuO	0.036	0.020	0.060	0.000	0.060	0.080	0.081	0.026								
24 Rb ₂ O	0.013	0.013	0.004	0.000	0.000	0.011	0.011	0.007								
25 S ₂ O	0.026	0.128	0.027	0.019	0.021	0.052	0.052	0.052								
26 ZrO ₂	0.060	0.261	0.015	0.020	0.020	0.002	0.005	0.005								

第38図 蛍光X線分析結果

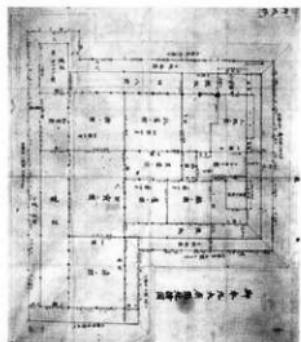
8. 絵図・文献資料の検討

『伊達家記録』によると、大広間は仙台城の築城開始より10年を経た慶長15年〔1610〕に完成したと記されており、慶長18年〔1613〕の記録には、大広間に儀式が執り行われたとの記事がある。また、幕末に筆写されたとされる『仙台古文記』に、慶長9年〔1604〕、政宗が仙台で初めて正月を迎える、「大広間」で正月の年始をした記録があり、慶長15年の大広間完成以前にも仙台城には「大広間」と称された建造物があった可能性も指摘されている。安永4年〔1775〕に仙台城を訪れた安倍彦右衛門の『御本丸拝見覚書』には、御成門から見た大広間の様相が記されており、大広間が鍍金された金具で飾られていたことが記されている。御成門に関しての記録には、明治以降に記された『伊達家史叢談卷之五』や『仙台藩祖尊皇事蹟』などがあり、御成門が日暮門と称されていたことや、その装飾の様子などが詳細に記されている。

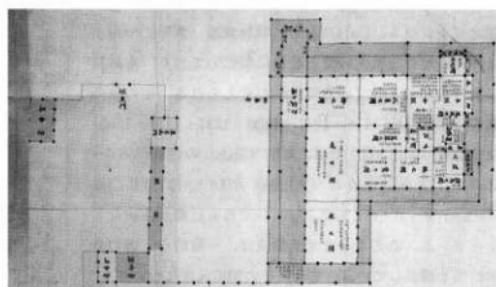
大広間と御成門の外観を推定する資料としては、仙台藩の大工棟梁千田家に伝來した『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』(仙台市博物館蔵)が参考となる。この絵図は、建物の正面と側面を展開図として百分の一の縮尺で描いており、礎石や建物の柱が詳細に描かれている。また、大広間と御成門の平面的建物規模や構造または位置関係を推定する資料としては、『仙台城旧御本丸御屋形図』(明治26年〔1893〕写 仙台市博物館蔵)や『御本丸御家作御絵図』(明治元年〔1868〕宮城県図書館蔵)、『御本丸大広間地絵図』(年代不詳・斎藤報恩会蔵)、『青葉城御本丸之図』(江戸時代・仙台市博物館蔵)、『背山公造制城郭木写之略図』(17世紀後半・宮城県図書館蔵)などがある。これらの絵図には、建物の柱位置が記されるとともに、座敷間の名称や玄関位置などが記されており、発掘調査成果を検証する上で重要な資料となる。『仙台城旧御本丸御屋形図』には建物内部の座敷間や障壁画などの内装施設が詳細に記されており、これまでの調査で出土している金銅金具などを理解する上で重要な資料となっている。



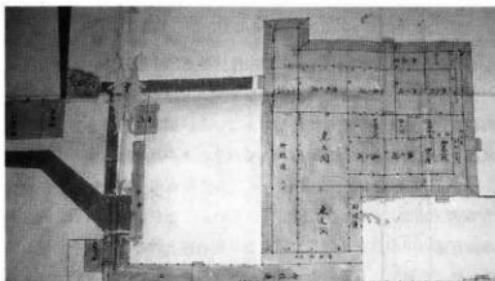
第39図 仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図（左）大広間部分（右）御成門部分（江戸時代）仙台市博物館蔵



第40図 御本丸大広間地絵図（江戸時代）
斎藤報恩会蔵



第41図 仙台城旧御本丸御屋形図（明治26年〔1893〕写）仙台市博物館蔵



第42図 御本丸御家作御絵図（明治元年 [1868]）宮城県図書館蔵



第43図 青葉城御本丸之図（江戸時代）
仙台市博物館蔵

『伊達治家記録』

慶長5年 [1600]

12月24日 十二月己丑小廿四日甲午。辰刻、公、千代城へ御出、御普請御繩張始メアリ。文字ヲ仙臺ト改メラル。昔時此城ノ側ニ千體佛アリ。因テ千體ト號ス。其後、文字ヲ千代ト改ム。此城、元ハ國分ノ前主國分能登守殿盛氏、先祖ヨリ居住セラルト云云。○晚、御普請初ノ御祝儀、御龍五番アリ。高砂・田村・野宮・養老・猩々ナリ。（卷20下 - 2 - 501）

慶長6年 [1601]

1月11日 十一日庚戌。仙臺城御普請始アリ。總奉行後藤孫兵衛信康、川嶋豊前景泰ナリ。御城下地形ノ繪圖ヲ以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル。川嶋豊前、金森内膳 許不知 是ヲ奉ル。（卷21 - 2 - 505）

慶長8年 [1603]

8月 此月、若君台徳院殿ヨリ 公ヘ御歸國ノ御暇仰出サレ、仙臺へ御下向、仙臺城御普請既ニ成就シ、直ニ城ニ御着、御移徙御祝儀等アリ此等ノ事其日井ニ委事不知。（卷21 - 2 - 526）

慶長15年 [1610]

此年、仙臺城大廣間御造営成ス。縱十七間半、横十三間半、北ニ長三間、廣二間半、南ニ長七間半、廣六間ノ曲屋アリ。是ヨリ前、大工棟梁梅木彦左衛門家次ヲ紀州へ差登サレ、天下無雙ノ大匠刑部左衛門國次ト云者ヲ雇ヒ來テ、大廣間ノ指圖ヲ致サシム。御作事奉行波邊近内 許不知、油井善助景成ナリ。御張付ハ畫工佐久間左京畫ス。其奉行ハ茂庭利兵衛定元、眞山式部繼重ナリ御造営ノ日等ハ不知。（卷22 - 2 - 554）

慶長18年 [1613]

8月1日 八月辛酉小朔日丁亥。一家・一族ノ輩、當日ノ御禮トシテ登城、大廣間ニ於テ、御目見アリ。（卷23 - 2 - 592）

8月21日 南蠻人梵天呂登城、大廣間ニ於テ御對面、梵天呂進上物アリ。（卷23 - 2 - 594）

11月7日 大廣間ニ於テ越後少將殿御使者右平次・有右衛門兩人共ニ氏不知御目見 右平次密帯百五十、有右衛門御鷹ノ決拾三指進ス。（卷23 - 2 - 601）

『仙台古文記』『伊達家御給主・高梨家文書』

慶長七年壬寅仙台御城被ノ果大広間御作事出来、同九年甲辰正月元日ニ御一門衆御一族初而座列之義原田甲斐・五十嵐信濃・武山出雲被 仰付遂吟味左之通被相定之由及承事（後略）

『御本丸拝見覚書』 安倍彦右衛門記 安永4年 [1775] 4月

（前略）右之所拝見済而日暮御門内より拝見仕候。菊の御紋彫物すさまし、中々筆に及不申候。金めつきかな具有。（後略）

『仙台藩祖尊皇事蹟』 矢野顯藏 明治32年 [1899]

城門菊桐章燃然目ヲ幕フニノ丸ノ如シ門ヲ入りテ左一門アリ車寄御門ト曰フ刻スルニ朝陽鳳鳴ノ図ヲ以テス丹セフ墨セ常ニ構シテ（中略）車寄御門一二日幕之御門ト称ス

『伊達家史叢談卷之五』 伊達邦宗 大正10年 [1921]

城門ヲ北ニ設ク、詰ノ御門ト称ス、（中略）門ヲ入りテ又左ニ門アリ、御車寄御門ト云フ、一二日幕御門ト称ス、常ニ閉鎖セリ、朝陽鳳凰人物鳥獸草花ヲ彫ル、丹墨金碧ヲ施サズ、刀法神ニ入り、皆生氣アリ、其彫刻巧妙ナルヲ以テ、世人之ヲ甚五郎ノ作ナリト云ヒ伝フ、（後略）

9. 柱間寸法尺度の検討

3次にわたる大広間跡の調査では延べ900mほどの発掘調査を行い、大広間の柱位置を示す遺構である礎石跡を70基ほど検出している。大広間跡付近は多くの樹木が林立しているため全面的な発掘調査は不可能であったが、これまでの調査成果から大広間柱間寸法を総合的に推定する資料が得られたと考えている。調査成果をもとに作成した遺構平面図を検証すると、多くの礎石跡は東西・南北に列をして検出されており、その検出幅も多くの場合でほぼ一定の割合を持っている。7次調査2区（大広間南辺部）や1次調査1A区（大広間東辺部）など、特に遺構が明瞭に検出されている部分からは、礎石跡が東西・南北に1間おきに検出されていることが推定される。各次調査では、柱間寸法を計測する際は、それぞれの礎石跡の中心点を推定し、隣り合う礎石跡との心々距離を測定していたが、礎石が残存していない礎石跡が多いことや、建築的にも礎石の中心に柱が位置するとは限らない場合もあるとされ、正確な柱位置を推定することは困難であった。

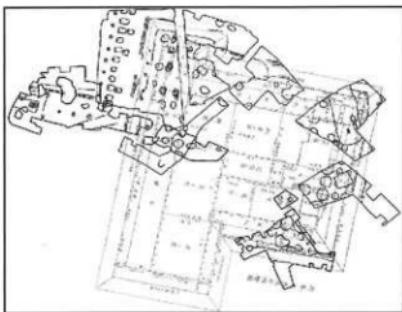
大広間の平面図を描いた各種絵図からは、大広間は東西方向に大棟を持つ長方形の主屋に、北と南に鍾形に曲り扉を付けた形状をしており、西側外縁部の延長に中門廊突出部を配すなどの特徴を確認できる。5次調査で検出された北辺部の礎石跡・雨落ち溝跡は中門廊突出部の形状を示すとともに、推定された大広間東西・南北の規模についても各種絵図とほぼ一致するなど、各種の絵図と調査成果は多くの共通点を示している。絵図には柱位置が示されており、多くの絵図で共通して示されている柱位置は建築上重要な柱筋にあるものと見られ、発掘調査でも多くの部分で一致して検出されている。また、柱位置が絵図に描かれていない部分からも、発掘調査では礎石跡が検出されており、補助的な役割をする柱（東柱）は1間おきに置かれていた可能性がある。このように発掘調査成果と絵図資料とを対比させることで、総合的な検証が可能となっている。

江戸時代に製作されたとみられる『御本丸大広間地絵図』には、座敷間名や柱位置の他、座敷間の間数、建物外周の規模までが詳細に記載されている。この絵図には数箇所に「6尺5寸」という記載があり、大広間の柱間寸法を示すものと推定される。また、建物外縁部（落縁）には「5尺」という記載が多く箇所でみられ、絵図からも外縁部がやや狭く描かれていることが確認できる。『御本丸大広間地絵図』について、仙台城跡調査指導委員である西和夫氏（神奈川大学工学部建築学科教授・建築史）からは、発掘調査成果と多くの点で一致しており、史料価値が高いとの評価を受けている。また、同氏により遺構平面図と『御本丸大広間地絵図』との合成図（1／50）を作成していただき、礎石跡の検出位置と絵図が示している柱位置がほぼ一致することを検証していただいた。

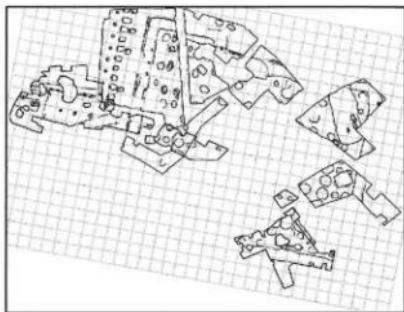
また、197cm（6尺5寸）（註）の1／200方眼メッシュ透視シートを用い、1／200遺構平面図と合わせることで柱間寸法を検証することを試みた。その結果、メッシュ図の方眼交点が遺構平面図の礎石跡と多くの部分で一致しており、「6尺5寸」が大広間の柱間寸法の基準となっている可能性を裏付けるものになった。また、建物外縁部（落縁部分）についても、「5尺」（152cm）幅が妥当である検証結果となった。

この柱間寸法に関する調査成果は、今後の仙台城跡の他の建物群に関する調査を進める際に重要な手がかりになるものと思われ、調査の大きな進展となるものである。

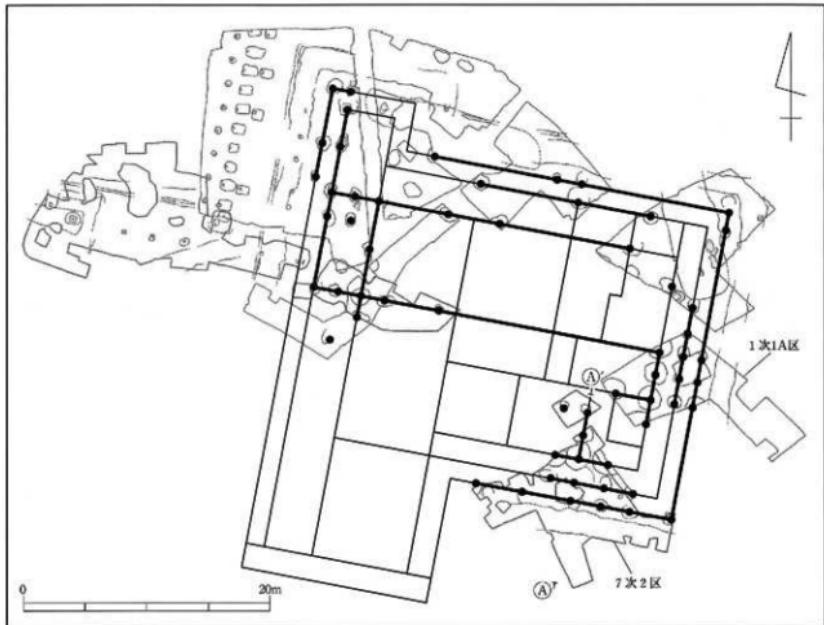
(註) 1寸は3.03cm、1尺は30.3cmで計算しており、6尺5寸は196.95cmであるが約197cmで計算、5尺は151.5cmであるが152cmで計算した。



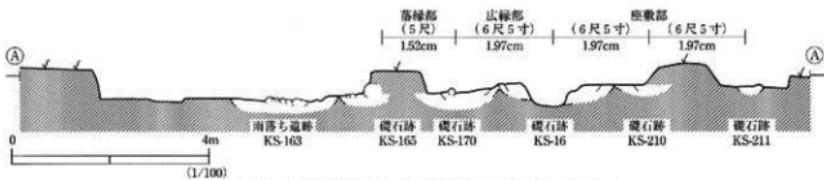
第44図 大広間跡遺構平面図と御本丸大広間
地絵図の合成図（1／800）



第45図 大広間跡遺構平面図と6尺5寸
(197cm) 方眼メッシュ図の合成図（1／800）



第46図 大広間建物礎石位置復元図（1／400）（作成指導 神奈川大学教授西和夫氏）



第47図 大広間跡南辺部・南北礎石列部分断面図（東から）

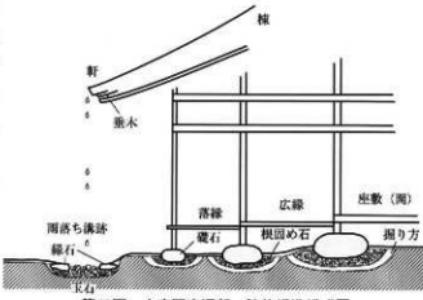
10.まとめ

これまでの3次にわたる大広間跡の調査では、延べ900mの発掘調査を行い、雨落ち溝跡や礎石跡など大広間に関わる遺構が検出してきた。1次調査（平成13年度実施）では大広間東辺部を中心に13基の礎石跡が検出され、建物の東辺ラインを確認している。5次調査（平成14年度実施・大広間2次調査）では、大広間西辺部から北辺部にかけて31基の礎石跡を検出し、西辺部・北辺部の建物ラインを確認するとともに、建物の東西規模（33.5m）を解明した。今年度の大広間跡の調査は、これまでの2年次にわたる調査を補完するとともに、御成門推定地からその導線部までを含め、総合的に大広間の全容を理解することを目的としたものである。

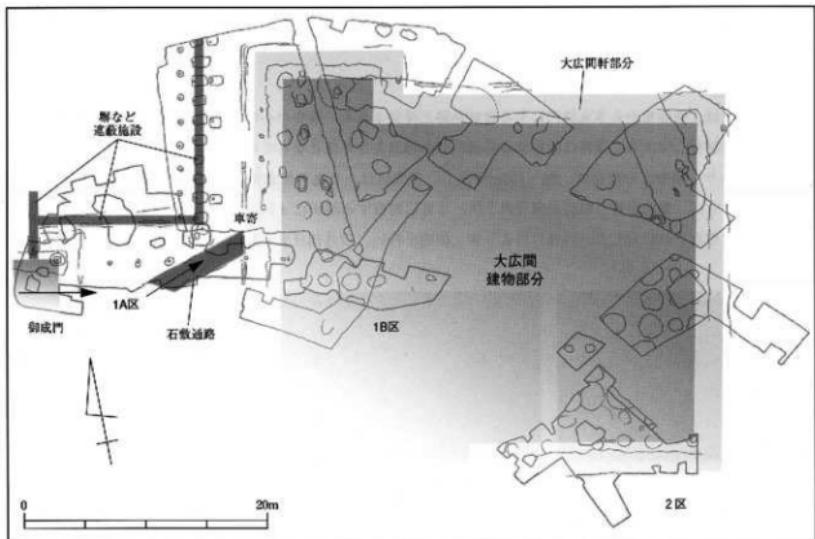
大広間跡の調査により建物南辺部分の遺構を明瞭に検出し、大広間の南北建物規模（南北26.3m）を解明した。また、雨落ち溝跡と建物縁部礎石跡、座敷部礎石跡の検出レベルの違いを確認でき、遺構を構築した整地面には建物の内外で高低差をつけるなど、極めて計画的に規格性をもって建てられた建築であることが判明した。また、礎石跡の検出状況を絵図資料などと総合的に検証することで、大広間の柱間寸法を「6尺5寸」であると推定することができた。御成門跡推定地で検出された礎石には、柱座やほぞ穴の加工がみられ、大広間跡で検出された礎石とは明らかに様相が異なっている。周辺の遺構検出状況や遺物の出土状況、整地面の検出状況などから、礎石は御成門の北東控柱部分の礎石である可能性が高く、御成門の位置を解明する重要な発見となった。御成門礎石跡から北側に延びる溝状遺構は、底部に柱を据えた礎板石が検出されていることから、御成門と平行して築かれた駆跡の可能性がある。御成門から大広間に至る動線部とその周辺の調査で東西に検出された溝状遺構は、5次調査で検出された掘立柱穴列と併せて、堀などの遮蔽施設が築かれていた可能性を示している。また、御成門跡から大広間跡まで東西に検出された石敷溝状遺構は、御成門の中心部分から大広間車寄まで築かれた通路遺構の可能性を検討しており、今後のさらなる検証が必要である。

大広間跡から出土した金銅金具類は、前年度まで出土した金具類と併せ、瑞巌寺や大崎八幡宮などと共に桃山期の特徴を有しており、慶長期の建物金具の実態を解明する上で貴重な資料である。魚々子打ちや蹴影などの精細な加工は、当時の金工職人の優れた技術を示すものである。今年度は金銅金具の金属組成を解明するために、蛍光X線分析装置による成分分析を行った結果、金具は極めて純度の高い銅により構成されていることが判明した。この分析結果は、京都など他地域の城郭との比較検討や金工技術の伝播などを解明する上で重要な資料となり、今後のさらなる調査検討が不可欠である。

これまでの大広間跡の発掘調査により、仙台城本丸御殿の主要な建造物である大広間の実態を解明する重要な資料を得ることができた。今後は、その座敷配置などを示す文献資料や発掘調査成果などを併せつつ、さらなる総合的な調査を進めていく必要がある。大広間は豊臣秀吉が染いた聚楽第大広間などと共に桃山期の建築式を伝える武家御殿建築と考えられており、現存類例として
は京都府京都市にある二条城二の丸大広間や滋賀県
大津市にある圓城寺（三井寺）勸學院・光淨院など
がある。また、御成門は、切妻屋根の前後に軒唐破
風を張り出した四脚門であったと推測され、仙台城
の格式を示す建造物である。御成門跡の遺構発見は、
大広間跡周辺の遺構配置状況などを解明する上で重
要であり、今後のさらなる検証が必要である。



第48図 大広間南辺部 建物構造模式図



第49図 検出造構から推定した建物等の配置様式図（1／400）



第50図 二条城二の丸大広間



第52図 圓城寺光淨院客殿



第51図 二条城二の丸唐門



第53図 圓城寺光淨院客殿と門

VI 第8次調査

1. 調査経過

第8次調査は、中曲輪から本丸詰門に至る登城路跡と推定される一帯を中心実施した。調査地点の現況は、市道青葉城線に平行して大きく東西に蛇行する歩道沿いの林および草地となっている。地形的には青葉山丘陵北斜面の急傾斜地であり、調査区の標高は、86～100mである。調査区は、本丸石垣北側の歩道北寄りの急斜面上に西から1区、2区、3区、歩道南寄り緩斜面部分の2区、3区に対応する場所に4区、5区、沢曲輪南側の崖地上の土壠部分に6区をそれぞれ設定した。11月17日より表土掘削を行い、12月18日まで調査を実施し、12月22日に埋め戻しを終了した。



第54図 1区調査前状況（西から）



第55図 4区・5区調査前状況（東から）



第56図 6区調査前状況（西から）

2. 発見構造と出土遺物

各調査区が離れているため、基本層序は統一せず調査区ごとに記載する。

（1）1区

7×4mの調査区を設定した。基本層序は5層に分かれ、V層が地山と考えられる。III層上面で円礫の集中が認められた（平面図の着色部分）。北西隅部には比較的大きく平たい石がまとまっており、何らかの施設があった可能性も考えられる。I層下は南に向かって下がっており、掘り下げた結果、石組側溝の石材4石とIV層を切る掘り方を検出した。また、東北部のII層およびIII層からは瓦が集中して出土した。

出土遺物 I層：瓦（九曜文軒丸瓦2点、三引両文軒丸瓦12点、軒丸瓦瓦当部6点、軒丸瓦接合部1点、並文軒平瓦3点、軒平瓦瓦当部4点、三引両文軒棧瓦1点、平瓦447点、丸瓦146点、棧瓦1点、角模瓦2点、櫛斗瓦7点、面戸瓦5点、谷平瓦1点、不明瓦6点）、鉄釘、II層：瓦（九曜文軒丸瓦3点、三引両文軒丸瓦4点、軒丸瓦瓦当部1点、軒丸瓦接合部2点、桔梗文軒平瓦1点、三枚並文軒平瓦1点、軒平瓦瓦当部2点、平瓦86点、丸瓦77点、駒巴瓦1点、櫛斗瓦3点、面戸瓦1点、輪違1点、谷平瓦1点）、磁器（瀬戸美濃 19世紀1点）、土師質土器（皿江戸1点）、焼夷弾、III層：瓦（九曜文軒丸瓦5点、三引両文軒丸瓦3点、三枚並文軒平瓦1点、雪持ち並文軒平瓦1点、不明+唐草文軒平瓦1点、平瓦95点、丸瓦12点、櫛斗瓦12点、面戸瓦2点、不明瓦1点）、磁器（中国染付1点）、鉄製品、IV層：瓦（九曜文軒丸瓦1点）が出土した。

KS-236石組側溝 現存する石組側溝（KS-243）の延長線上に位置する。北側列の4石を検出した。長さが東西方向に2.2m、上幅80cm、下幅60cm、深さ40～70cmである。南側列は検出できなかった。底面には円礫が散かれている。側溝内の堆積土は2層に分かれれる。掘り方はIV層上面を掘り込み面としており、幅40～50cm、深さ20cmで堆積土は2層に分かれ、層中に礫、木端石を含む。

出土遺物 側溝内1層：ガラス（瓶）2点、2層：ガラス（瓶）1点、層不明：不明瓦1点が出土した。

KS-235土坑 III層を掘り込み面としている。平面形は東西に長い楕円形で、長径1.2m、短径1m、深さ80cmである。堆積土は6層に分かれれるが、しまりなくぼろぼろした土である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、底面

には凹凸がある。底面直上に径40cmの礫が1石含まれている。

出土遺物 三引両文軒丸瓦1点、平瓦53点、丸瓦19点、不明瓦1点が出土した。

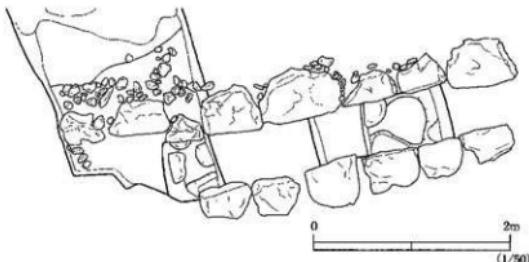
(2) 2・3区

石組側溝からその北側にかけて2×5mの2区を設定し、石組側溝を3区とした。

基本層序は4層に分かれ、IV層が地

山である。II層、III層には円礫が含まれるが、III層は少なく、II層に比べてしまがある。狭い範囲で断ち割りを行った結果、南側ではII層がうすくIII層が露出するが、北側ではII層が厚く、III層が下がっていくようである。石組側溝の掘り方は、III層上面で検出された。

出土遺物 基本層I層：瓦（三引両文軒丸瓦5点、平瓦93点、丸瓦42点、壇平瓦2点、熨斗瓦4点、面戸瓦7点、磁器（不明1点）、土師質土器（足付鉢 江戸1点）、II層：瓦（九曜文軒丸瓦1点、三引両文軒丸瓦2点、軒丸瓦瓦当部1点、軒丸瓦接合部1点、熨斗瓦1点、磁器（中国 染付1点）、III層：瓦（連珠三引文軒丸瓦1点、軒丸瓦瓦当部1点）、搅乱：瓦（三引両文軒丸瓦2点）



第58図 KS-243石組側溝平面図

KS-243石組側溝 調査前から既に地表に顕在していたものである。規模は検出した長さが東西方向に7.8m、上幅50~60cm、下幅50~80cm、深さ70cmである。石組側溝を構成する石材は北端部で10石、南端部で12石である。東に離れて1石あるが、側溝石材かどうか不明である。石材は方形の切石であり、内面にはハツリ加工した面や平坦な剖面を向けている。北側の石材の中には、南に向かって倒れこんでいるものがある。

西側掘り込み部 2か所で側溝内部を掘り下げた。2区南端では、側溝内堆積土は6層に分かれ、層中に礫を含む。6層上面で径20~30cmの礫を2石確認した。側溝内の底面に敷かれたものと考えられる。掘り方はIII層を切って検出され幅90cm、深さは不明である。堆積土は2層に分かれ、層中に礫、木端石を含む。

出土遺物 側溝内堆積土3層：陶器（大堀相馬1点）、ガラス（瓶1点）、5層：ガラス瓶、層不明：瓦（九曜文軒丸瓦1点、平瓦1点、丸瓦1点）が出土した。

東側の掘り込み部 堆積土は5層に分かれる。層中には礫を多量に含んでいる。底面には、径30~50cmの礫が3石敷かれていた。

出土遺物 堆積土2層：陶器（不明）、3層：ガラス瓶、5層：陶器（大堀相馬 18世紀後半から19世紀前半）、層不明：瓦（九曜文軒丸瓦1点、三引両文軒丸瓦1点、笠文軒平瓦1点、平瓦35点、丸瓦10点、壇平瓦1点、熨斗瓦1点）が出土した。

(3) 4区

2×4mの調査区を設定した。基本層序は5層に分かれ、V層が凝灰岩質の岩盤である。表土直下に黄橙色の盛上層（Ib層）が厚く存在し、その下に旧表土（Ic層）と3枚の整地層が認められた。II層は円礫を多量に含む層であり、III層、IV層も礫を含むがII層よりは少ない。II層上面は、南に向かいやすいや下がっている。地山岩盤は南壁が斜面となっており、人為的な整形の可能性を考えられ、今後の検討が必要である。

出土遺物 I層：瓦（平瓦37点、丸瓦13点、棧付壇平瓦1点、面戸瓦1点、輪違1点、不明瓦2点）、彈丸1点、II層：瓦（平瓦10点、丸瓦1点）

(4) 5区

2 × 6 mの調査区を設定した。基本層序は6層に分かれ、VI層が凝灰岩質の岩盤であり、4区V層に対応する。表土直下には4区同様の盛土（Ib層）がありその下に旧表土（Ic層）がある。IIIa層は調査区全体的に広がり、礫混じりでしまっており、層の上面はほぼ平坦であることから、上面を使用する目的で整地された可能性が考えられる。II層は調査区西半のみ分布する。IIIb層以下も礫を多量に含むが、IIIa層ほどのしまりはない。地山の岩盤は南側と西側が斜面となっている。南壁途中にはステップ状の平坦面がごくわずかに見られる。

出土遺物 I層：磁器（肥前17世紀後半1点、中国染付1点）、瓦（平瓦11点、丸瓦9点、輪違1点）、ガラス（瓶12点）、IIIa層：磁器（肥前青磁1点、瀬戸美濃近代1点、中国染付33点）、陶器（占瀬戸蓋15世紀1点、瀬戸美濃1点、織部17世紀前半1点、唐津2点）、瓦（三巴文軒丸瓦2点、軒平瓦接合部1点、平瓦130点、丸瓦46点、軒平瓦1点、冠瓦1点、面戸瓦1点）、鉄釘1点、ガラス（ビード1点）、IVa層：磁器（中国染付18点、中国白磁1点、中国青磁1点、肥前青磁2点、肥前染付1点、不明4点）、陶器（備前？17世紀？1点、志戸呂？17世紀1点、織部17世紀前半1点）、瓦（三巴文軒丸瓦1点、軒丸瓦接合部1点、軒平瓦瓦当部1点、軒平瓦接合部1点、平瓦188点、丸瓦47点、軒平瓦3点、駒巴瓦1点、熨斗瓦1点、面戸瓦1点、不明瓦1点）、IVb層：磁器（中国染付1点）が出土している。中国磁器が多量に出土しているが、2cm程度の小破片であり、図示が困難である。

(5) 6区

市道脇に長さ約55mにわたり土壟状の高まりが認められるため、その一部に1 × 6 mの調査区を設定し断ち割り調査を行った。基本層序は4層みとめられ、IV層が地山と考えられる。

出土遺物 I層：瓦（平瓦9点、丸瓦4点）、ガラス（瓶1点）、II層：焼夷弾1点

KS-248土壘 断面での規模は、基底部幅2.8m、上幅80cm、地表面からの高さは北面で40cm、南面で70cmである。北側では木の根により、南側ではコンクリート側溝のため搅乱されている。積み土は2層確認した。2層は層中に径30cm前後の円礫、瓦を多量に含む。断面の観察や出土状況から、これらの円礫は、ほぼ水平に積み上げられているものと考えられる。土壠上からは柱列などの付属施設や堀跡などに係わる遺構は検出されなかった。

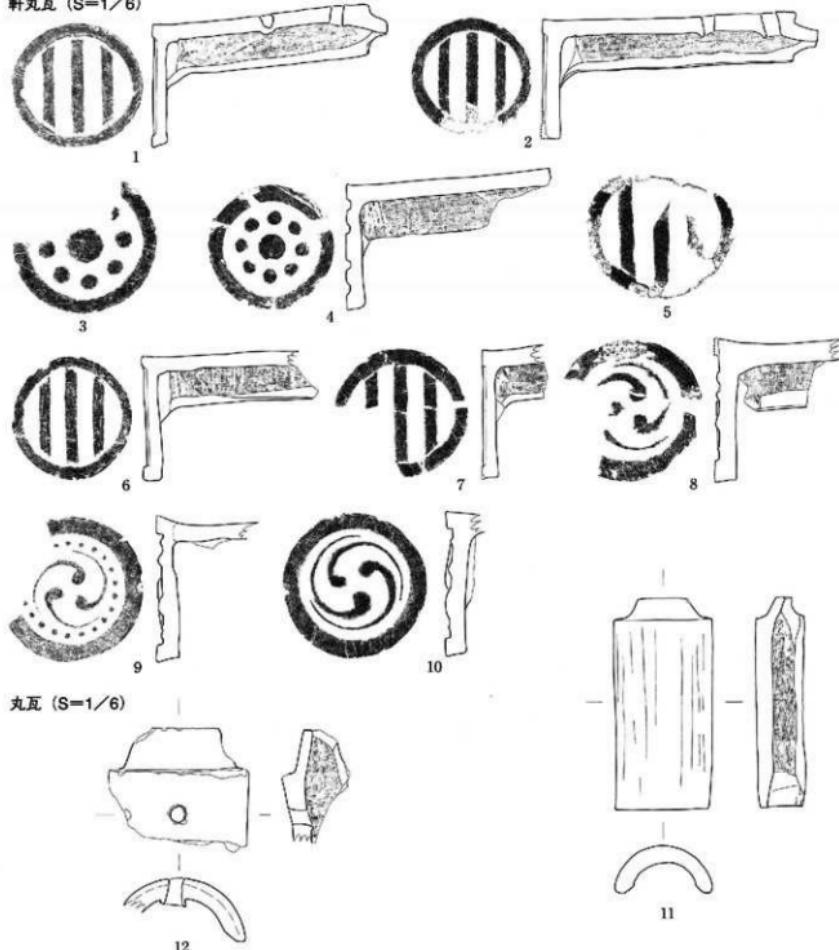
出土遺物 1層：瓦（平瓦17点、丸瓦3点、軒棧瓦1点、熨斗瓦1点）、2層：瓦（三引両文軒丸瓦1点、軒丸瓦瓦当部1点、平瓦114点、丸瓦34点、熨斗瓦1点）、層不明：磁器（瀬戸美濃19世紀1点）、鉄製品（鍵1点）、ガラス（瓶1点）が出土した。

KS-244性格不明遺構 KS-248上段南半の基底部直下で確認した。南側はコンクリート側溝に切られている。IV層を削り出したかもしくは自然地形上に整地を施したものと考えられる。堆積土は5層に分かれる。5層には多量の瓦が含まれている。なおコンクリート側溝南側でも整地層と考えられる堆積土が5層検出されているが、これらについてもKS-244と同一の遺構の可能性が考えられる。

出土遺物 5層：瓦（三巴文軒丸瓦4点、連珠三巴文軒丸瓦1点、軒丸瓦瓦当部2点、桔梗文軒平瓦3点、雪持ち笠文軒平瓦1点、不明+唐草文軒平瓦7点、平瓦472点、丸瓦116点、熨斗瓦46点、輪違1点、面戸瓦21点、谷平瓦2点、不明1点、重量約110kg）が出土している。

KS-249土坑 北端部で検出した。II層上面を掘り込み面としている。遺構の大半が調査区外へ延びているため詳細については不明であるが、円形もしくは長円形と考えられる。検出した規模は、東西40cm、南北60cm、深さ70cmである。堆積土は2層に分かれる。壁は底面からほぼ直立して立ち上がり南壁部の途中に段がある。遺物は出土しなかった。

軒丸瓦 (S=1/6)

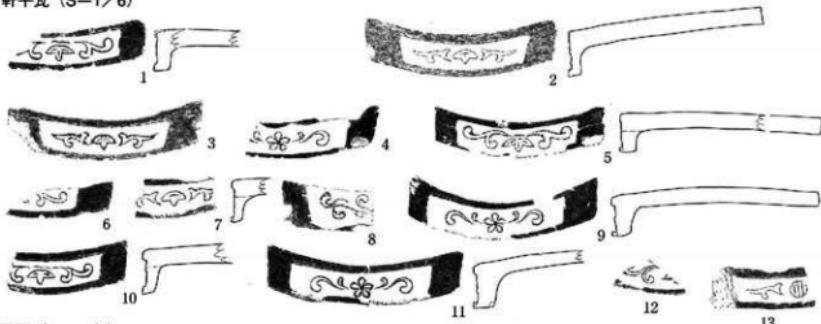


第59図 登城路跡出土遺物実測図1

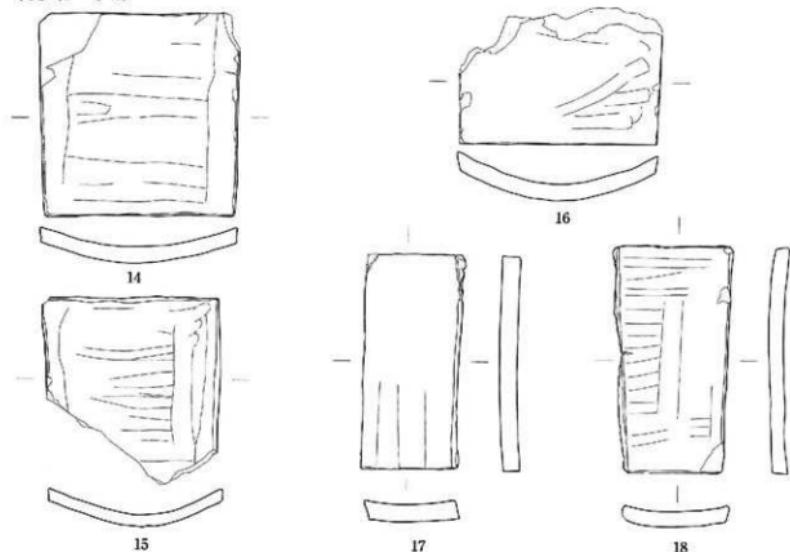
第14表 登城路跡出土遺物註記表1

測定番号	種類	遺物番号	区	測量・断面	文様	已査	直角部 (cm)		周縁 (cm)		重さ (kg)	備考 (単位:12cm)
							直角 内側	厚さ	幅 高	底		
1	軒丸瓦	4	1	I	三引両文		14.9	11.8	1.8	13~15	0.7	1.88 文様幅1.5~1.6 上曲引脚付 先端(1.3cm)底2.15
2		21	1	I	三引両文		14.4	11.4	1.9~2.0	1.6	0.5	1.72 文様幅1.6~1.8 上曲引脚付
3		37	1	I	三引両文		13.0	11.0	1.8	13~15	0.7	1.68 文様幅1.5~1.6
4		70	1	I	丸瓦		13.2	11.2	2.3	2.0	0.5	1.8 距離中心3.4 底2.0
5		139	1	KS-235-2	三引両文		(14.9)	11.8	2.2	1.6	0.6	1.4 文様幅1.5
6		2	2	I	三引両文		(14.9)	11.8	2.2	1.6	0.6	1.4 文様幅1.5
7		76	3	KS-234	三引両文		(13.6)	12.1	2.0	1.9	0.5	0.8 文様区間1.5~1.7
8		151	6	KS-248-2	三巴文 左崩	(17.4)	12.7	2.6	2.5	0.5	1.6	
9		242	6	KS-344左崩	三巴 文崩	(13.5)	13.4	2.7	2.2	0.8	1.0 距離1.0	
10		193	6	KS-344右崩	三巴 文崩							
測定番号	種類	遺物番号	区	測量・断面	文様	已査	直 角 部	厚 さ	幅 高	底	重 さ	備 考 (単位:12cm)
11	丸瓦	94	1	I			11.9~11.2	2.1~2.2	1.355			丸瓦 宽形 (小)
12		445	6	KS-248-2			11.6	2.6	0.735			斜穴形2.0
測定番号	種類	遺物番号	区	測量・断面	文様	已査	直 角 部	厚 さ	幅 高	底	重 さ	備 考 (単位:12cm)
11	丸瓦	94	1	I			11.9~11.2	2.1~2.2	1.355			丸瓦 宽形 (小)
12		445	6	KS-248-2			11.6	2.6	0.735			斜穴形2.0

軒平瓦 (S=1/6)



平瓦 (S=1/6)

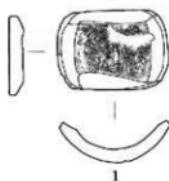


第60図 登城路跡出土遺物実測図2

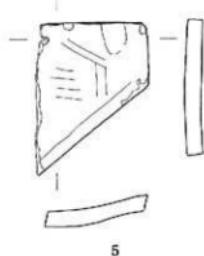
第15表 登城路跡出土遺物註記表2

遺物 番号	種類	遺物番号	区	遺構・層位	文様	瓦当部 (cm)		文様部 (cm)		底幅高 (cm)	重さ (kg)	備考
						高さ	幅	外寸幅	幅×長さ			
1	軒平瓦	72			直面	4.9	10.5	3.3	3.3 × 3.2	0.4	0.479	
2		294	1		直面	5.3	2.5	1.2	0.75 (4.5 ~ 3.5)	14.7 × 3.2	0.4	2.02
3			1		三段重飛龍							
4		64	1	三	枯葉雲							
5		93	1	四	青狩雲唐草	4.8	2.5	0.9 ~ 0.8	2.8 ~ 3.5	15.0 × 3.0	0.3	1.526 4点複合
6		102	1	四	内側直線 (直)							
7		139	1	四	内側直線 (直)							
8		239	6	KS-244A直板	枝葉雲	3.9	4.0	0.8 ~ 0.5	2.3 ~ 4.2	21.6 × 3.3 (0.5)	2.02	
9		244	6	KS-244A直板	瓣持牡丹	5.5	1.3	1.0 ~ 0.8	2.4	12.6 × 3.3	0.4	0.6
10		260	6	KS-244A直板	瓣持文	3.4	2.8	1.0 ~ 0.7	3.0 ~ 4.0	17.6 × 3.3	0.4	1.08
11		203	6	KS-244A直板	瓣持文	3.4	2.8	1.0 ~ 0.7	3.0 ~ 4.0	17.6 × 3.3	0.4	1.08
12		24	1	三引乳頭								
13	折线瓦											
遺物 番号	種類	遺物番号	区	遺構・層位	文様	瓦当部 (cm)				底幅高 (cm)	重さ (kg)	備考
						高さ	幅	外寸幅	幅×長さ			
14	平瓦	34	2		直	2.2	2.3	2.1	1.80			
15		347	6	KS-244A直板		2.2	1.868	3.1	1.5			
16		447	6	KS-244A直板		1.53	1.855	1.6	2.0	1.18		3点複合
17	筒瓦	394	1	直		1.8	1.8	1.8	1.8 × 1.8	5.9	1.016	
18		398	6	KS-244A直板		2.2	1.18	1.17	2.4	1.016		裏面の指の跡とみられる凹みが6ヶ所ある
						22.4	14.4	11.7	1.8	1.063		

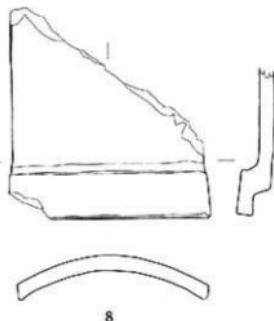
面戸瓦 (S=1/6)



道具瓦 (S=1/6)

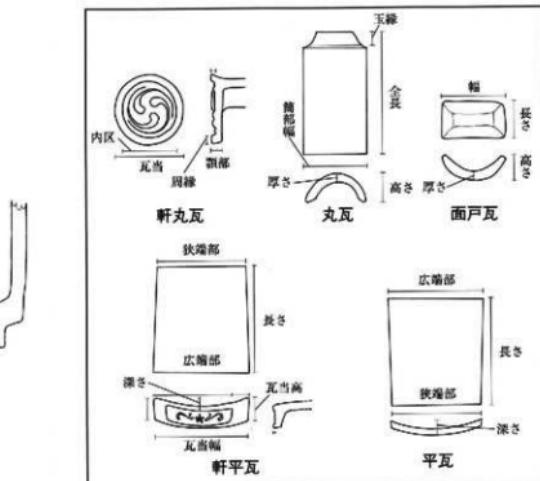
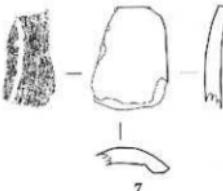


棟瓦 (S=1/6)



8

行基瓦 (S=1/6)



瓦の計測部位

第61図 登城路跡出土遺物実測図3

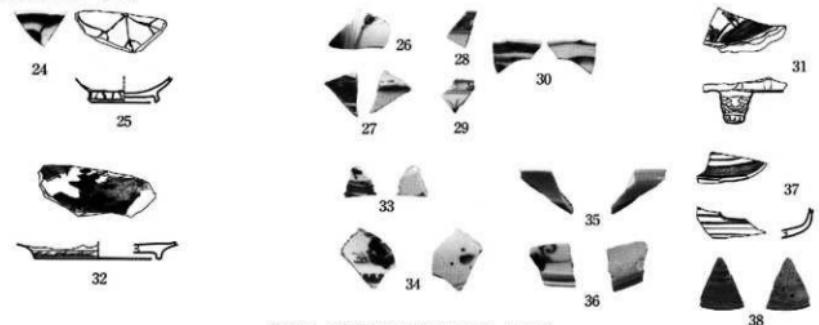
第16表 登城路跡出土遺物註記表3

遺物 番号	種類	遺物番号	区	遺構・層位	底 面 (cm × kg)			備 考
					長さ	幅	厚さ	
1		519	4	1c	9.6	13.2	1.7	0.32
2	面戸瓦	186	6	KS-244瓦集積	9.5	11.7	2.0	0.32
3		206	6	KS-244瓦集積	10.0	(8.0)	1.7	0.34
4		207	6	KS-244瓦集積	9.1	(14.3)	1.9	0.36
5	谷平瓦	468	1		(18.0)	(13.5)	2.1	0.38
6		489	1		(9.4)	(13.5)	2.2	0.39
7	行基瓦	204	6	KS-244瓦集積	(12.4)	(9.1)	1.1—1.9	0.3900
遺物 番号	種類	遺物番号	区	遺構・層位	底 面 (cm × kg)			備 考
					長さ	幅	厚さ	
8	棟瓦	3	1	1	(23.6)	22.9	(1.8)	0.37

刻印等 (S=1/3)



陶磁器 (S=1/3)



第62図 登城路跡出土遺物実測図・写真4

第17表 登城路跡出土遺物註記表4

目次番号	種類	遺物番号	区	遺物・附位	部種	実測値				備考
						長	幅	厚	底	
1	丸瓦	509		遺物						
2		479	2	遺物						
3		355	3	遺物						
4		443	1	遺物						
5		330	1	遺物						
6		369	1	遺物						
7		465	1	遺物						
8		439	1	遺物						
9		475	2	遺物						
10		430	2	遺物						
11	平瓦	450	2	遺物						
12		422	2	遺物						
13		371	6	六角						
14		389	6	KS-244J.集版						
15		373	6	KS-244J.集版						
16	軒丸瓦(第三引両支)	9	1	1						
17	軒丸瓦	4	1	1						
18		517	1							
19	脛斗瓦	403	2	1						
20		255	6	KS-248-1						
21		366	1	1						
22	圓戸瓦	395	1	1						
23		404	2	1						
24	繩	遺物番号	区	遺物・附位	部種	実測 (mm)				備考
25		165	5	1c						中國 安徽
26		153	5	1a						中國 海南島
27		129	5	1a						日本
28		131	5	1a						中国 南北 廣
29		154	5	1a						中國 韶關
30		167	5	1a						中國 湖南
31		119	5	1a						山東付 三足(鐵製)輪軸鋸 同材
32		122	5	1a						山東付 1足付鋸 17c前半
33		171	5	1a						山東付 1足付鋸 17c前半
34		274	5	1a						中國 長沙
35		284	5	1a						中國 青島 落灰灰陶 17c時代西漢の伝統品
36		304	5	1a						中國 杭州 落灰灰陶 16末-17c前半
37		133	5	1a						綿都 丹霞 武陵 17c前半
38		125	5	1a						古晉付 北朝 小型の鍬か 15c?

(6) その他の採集遺物

1区から3区の周辺で以下の瓦が表面採集された。三巴文軒丸瓦1点、青持ち符文軒平瓦1点、平瓦25点、丸瓦10点、駒バ瓦1点、熨斗瓦5点、面戸瓦2点。

3.まとめ

(1) 1区から3区について

石組側溝が西に約23m延長し、総延長は32mになることが判明した。また、石組側溝は掘り方をもち、玉石、木端石の混じる裏込め上であり、側溝底面には石を敷いている。側溝内からは現代の遺物が出土することから、近年の道路改修の際に埋められたようである。見付堀の基礎構造は判明しなかったが、集中して出土した瓦が見付堀に用いられた可能性が考えられる。丸曜文および三引両文軒丸瓦と符文軒平瓦のセットである。

(2) 4区・5区について

整地層と地山岩盤の傾斜が確認された。4区整地層は2区との通しエレベーション図を見ると石組側溝石材の上面を仮に路面の高さとみた場合、4区整地層はそれよりレベルが下がり、また整地層上面も平坦でないことから、登城路路面とは考えがたい。路面の基礎構造やそれ以外の遺構の可能性が考えられる。

5区Ⅲa層は上面が平坦であり、しまりがあるため、登城路路面もしくは路面直下の可能性が考えられる。また、5区からは16世紀末から17世紀前半に位置付けられる中国産磁器が多量に出土していることから、整地の時期は17世紀後半以降と考えられる。寛文8年[1668]の地震以降の修復に伴う工事を示すものと考えたい。

地山岩盤は南から北に向かい斜面が見られる。人為的な削平であれば登城路の構築にあたり造成された可能性が考えられるが、中世千代城に関わる遺構である可能性も視野に入れつつ今後検討していく必要がある。

(3) 6区について

土壘状の高まりについては、土壘として構築されたものであることが確認された。構築土は疊混じりのしまりない層であり、版築などの工法も認められない。土壘下部に瓦を多量に含む遺構が発見されたことから、遺構変遷が考えられるとともに、市道造成の際に削平を受けていない箇所もあり遺構が保存されていることが判明した。

(4) 瓦を多く含む層について

各区の層は瓦が多量に混じっている。1区の北側斜面にも瓦混じりの層は広く分布しており、これらは石垣裏込め土と考えられる。本丸北壁石垣が地震で崩壊した際に、北斜面へ流れ出したものと想定される。

(5) 瓦について

1区から3区にかけて出土する軒丸瓦は三引両文、九曜文が主体であり、5区・6区から出土する軒丸瓦は三巴文が主体である。これらは、使用される施設の違いか、使用される時期の違いを示している可能性があり、今後周辺からの出土瓦も含めて検討していきたい。

VII 第9次調査

1. 石垣の位置

広瀬川西岸には川に沿って二重の石垣が築かれている。川寄りには切り石を使用した石垣が大橋をはさんで長さ約100mにわたり築かれている。川からの高さは約7mである。大橋南側には自然石や割石を使用した石垣が、途中崩れた箇所や間知石積み擁壁があるが、長さ約260mにわたり築かれている。今年度は、大橋南側の石垣のうち、北端部長さ約22m分の測量を行った。

作業工程は、12月9日より清掃を開始し、12月16日に測量用の写真撮影を行った。2月2日から5日にかけて石材調査を行った。

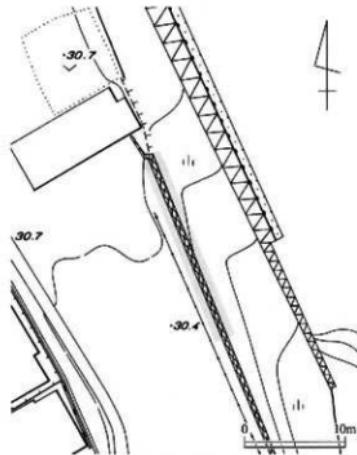
2. 測量結果

測量した範囲では、石垣は広瀬川に並行し直線状をなしている。北端部は崩れおり、「築き留め」の形状は認められない。石垣の高さは、北端部で高さ1.5m、測量した南端部で3.2mである。石垣の傾斜角度は2m毎に測ったが、77度から85度であり、平均は80度である。

石積みは横目地が通らない乱積みである。裏込めには玉石を用いている。

305石について石材調査を行った。90%が自然石であり、10%が割石である。23石に加工が見られ、ハツリ加工14石、ノミ加工6石、タタキ加工3石である（加工の重複する石材がある）。矢穴は2石（各1か所）に認められ、法量が分かるものは、開口6.5cm、末口4cm、奥行き3.5cmである。

石垣天端石材は崩落したものと考えられるが、北から10m程の位置にある横長の4石の石材が、かろうじて残った天端石材かもしれない。



第64図 測量範囲

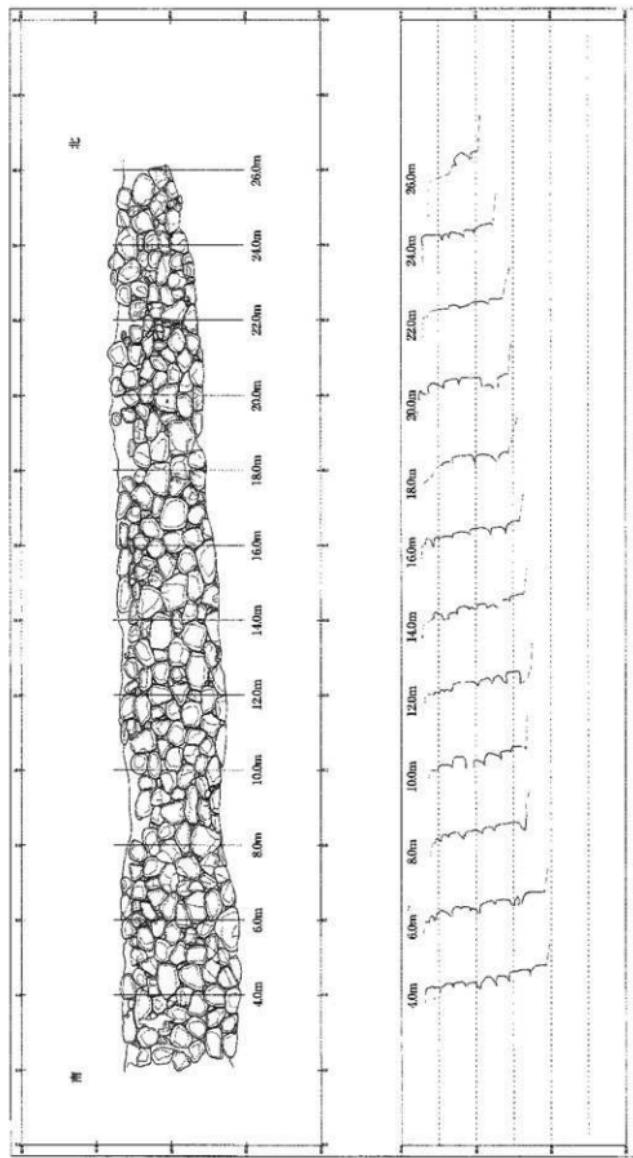


第63図 広瀬川護岸石垣の位置

清掃などの際には遺物は採集されなかった。測量範囲では、石材の抜けはあるが、はらみやせり出しなどは見られなかった。

3.まとめ

- ・広瀬川護岸石垣の一部について測量調査を行った。
- ・今回調査を行った石垣については、主として自然石を使用した乱積みの石垣であり、傾斜角度は80度前後である。



第65图 石墙立面图・断面图 (1/130)



全景（東から）



全景（北東から）



立面アップ（東から）



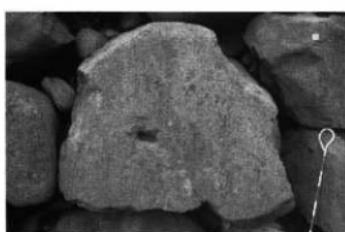
立面アップ（東から）



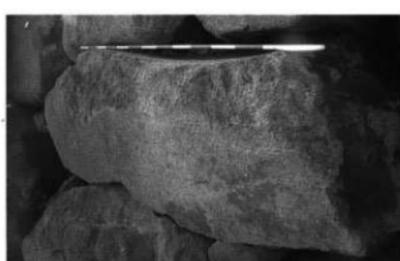
全景（南東から）



北端部の状況（北から）



矢穴



ハツリ加工（小面部分）

第66図 9次調査写真図版

VIII 総 括

この調査は、各種遺構確認調査や絵図文献調査などを通じて総合的に仙台城跡の実態を解明することを目的とした学術調査である。第1期5ヵ年では、仙台城跡の全体像を把握すること目標とした城跡全域の遺構分布調査と石垣の測量調査など現況調査を行うとともに、本丸跡内の遺構遺存状況について発掘調査による遺構確認調査を実施する計画である。3年次にあたる本年度は、今後の調査計画を策定する基礎データとなる仙台城跡全域の遺構現況調査（6次調査）と、本丸大広間跡（7次調査）及び登城路跡（8次調査）の発掘調査、広瀬川護岸石垣の測量調査（9次調査）を実施した。併せて絵図・文献等の調査を進めており、発掘調査などの成果を検証するための資料を作成したいと考えている。

第6次調査では、仙台城跡全域にわたる遺構現況調査を実施し、確認遺構を台帳にまとめた。今後の調査や整備事業を計画・進行させて行く上の基礎的資料となり得るものである。第7次調査では、大広間跡の発掘調査を実施し、検出遺構から建物の南北規模や柱間寸法などを解明した。併せて行われた御成門跡推定地の調査では、丁寧な加工の施された御成門の礎石が検出され、門跡の正確な位置を推定する資料が得られた。また、御成門から大広間に至る動線部の調査では、通路遺構と推測される石敷遺構や、廻跡と推測される溝状遺構などが検出され、大広間周囲の施設について解明する貴重な手がかりを得た。遺構確認面からは、これまでの調査と同様に鍍金された金銅金具や銅釘が多数出土するとともに、御成門礎石の周辺では多くの廻瓦が出土するなど、遺構の理解と合致した遺物検出状況を示している。本年度は金銅金具の科学的成分分析を行うなど、遺物理解のための多角的な資料を得ることができた。第8次調査では、本丸に至る登城路部分の遺構確認発掘調査を行い、石組側溝の延長部分の確認や、土壙状の高まり部の性格究明を行った。第9次調査は、追削地区の東端、広瀬川の護岸部分に築かれた石垣の測量調査を行った。昨年5月の三陸南地震では清水門跡と中門跡付近の石垣が崩落しており、このような石積み状況の記録化は、今後行われる可能性がある石垣修復工事などに役立つものである。

本調査においては、写真撮影は高解像度のデジタルカメラを使用するとともに、測量にトータルステーション（光波測距機）やデジタルカメラを使用し、3次元CADソフトなどを利用して測量図面などを作成してきた。仙台城跡に関わるこれらデジタルデータはすべてコンピュータ管理しており、今年度からは「仙台城跡GISデータ管理システム」を構築して管理・活用する試みを進めている。また、仙台城跡では、これまで本丸跡石垣解体修理工事に伴う発掘調査や市博物館建設に伴う三の丸跡の発掘調査、東北大学の施設拡張に伴う二の丸跡の発掘調査などが行われてきた。また、市博物館を中心に文献・絵図に関わる調査も市史編纂事業などを通じて継続的に行われている。これら調査成果を含め、解明された仙台城跡に関わるあらゆる調査成果をデジタルデータ化し、総合的に管理するシステムに発展させることが、今後の調査を効率的に進める上で必要である。

仙台城跡については、国史跡指定が平成15年8月27日付けの官報告示により実現したことから、今年度は整備基本構想の策定を行い、今後の保存管理と整備の基本方針を決定した。来年度は整備基本計画を立案し、その後、具体的な整備事業が進められることになる。仙台城跡に関する調査研究は緒についたばかりであり、今後さらに調査研究を進めるべき課題が山積している。今後とも遺跡全体の総合調査を継続して、市民へ高度な情報を伝達する一方、史跡としてこれまで以上に遺跡の価値を高めるべく調査に邁進していきたいと考えている。

参考文献

- 『仙台城の建築』小倉強 昭和5年 [1930]
- 『松島瑞巌寺と仙台城大広間』小倉強 仙台郷土研究第2巻第12号 昭和7年 [1932]
- 『仙台城大広間絵図について』小倉強 仙台郷土研究第12巻第11号 昭和17年 [1942]
- 『仙台城と仙台領の城・要害(日本城郭史研究叢書2)』小林清治編 昭和57年 [1982]
- 『伊達政宗』小林清治 昭和34年 [1959]
- 『仙台城居館の変遷とその構成・機能』『近世武士住宅』佐藤巧 昭和54年 [1979]
- 『仙台城の建築と姿絵図』佐藤巧 東北大大学建築学年報第21号 昭和56年 [1981]
- 『建築技術史の謎を解く「続・工匠たちの知恵と工夫」』西和夫 昭和61年 [1986]
- 『図解古建築入門』西和夫 平成3年 [1991]
- 『仙台城沿革』第一師団司令部 大正15年 [1926]
- 『仙台城』仙台市教育委員会 昭和42年 [1967]
- 『仙台城三ノ丸跡』仙台市教育委員会 昭和54年 [1985]
- 『仙台城址の自然』仙台市教育委員会 平成2年 [1990]
- 『年報1~17』東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 昭和60~平成14年 [1985~2002]
- 『仙台城跡石垣修復等調査指導委員会 第1~9回資料』 平成9~12年 [1997~2000]
- 『仙台城石垣修復工事専門委員会 第1~15回資料』仙台市建設局 平成13~16年 [2001~2004]
- 『仙台城跡調査指導委員会 第1~9回資料』仙台市教育委員会 平成13~16年 [2001~2004]
- 『仙台城 - しろ・まち・ひと - 』仙台市博物館特別展図録 平成13年 [2001]
- 『金色のかぎり - 金属工芸にみる日本美 - 』京都国立博物館 平成15年 [2003]
- 『仙台城本丸大広間の復原的研究』西研究室渡部薫 平成15年度神奈川大学建築学科卒業研究・修士論文集 集合 [2004]
- 『奥州仙台城絵図』 正保2・3年 [1645・1646] (宮城県図書館蔵)
- 『仙台城下絵図』 宽文4年 [1664] (宮城県図書館蔵)
- 『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』(仙台市博物館蔵・千田家資料)
- 『御本丸大広間地絵図』(齋藤報恩会蔵)
- 『青葉城御本丸之図』(仙台市博物館蔵)
- 『御本丸御家作御絵図』 明治元年 [1868] (宮城県図書館蔵)
- 『仙台城旧御本丸御形図』 明治26年 [1893] 遠藤允信追記 (仙台市博物館蔵)
- 『伊達治家記録』(貞山公治家記録)
- 『仙台古文記』 慶長7年 [1602] (伊達家御給主 高梨家文書 平成5年 [1994] 所収)
- 『御本丸拝見覚書』 安永4年 [1775] 安倍彦右衛門記 (仙台市史 昭和4年 [1929] 所収)
- 『仙台藩祖尊皇事蹟』矢野頼藏 明治32年 [1899]
- 『伊達家史義談卷之五』伊達邦宗 大正10年 [1921]

写 真 図 版



2区全景（北から）



2区全景 造構築出状況（北東から）



2区 KS-163雨落ち溝跡検出状況（北東から）



2区 KS-163雨落ち溝跡検出状況（西から）



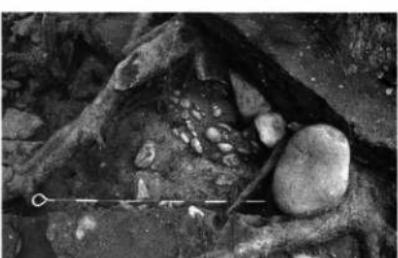
2区 KS-163雨落ち溝跡断面（東から）



2区 磚石跡検出状況（北東から）

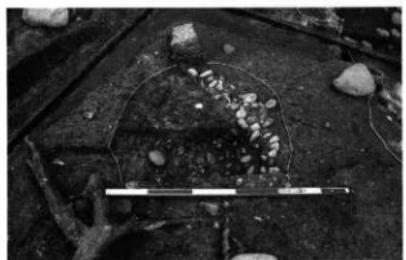


2区 KS-164磚石跡検出状況（東から）



2区 KS-165磚石跡検出状況（東から）

図版1 大広間跡（1）



2区 KS-167礫石跡検出状況（西から）



2区 落縁部地覆石検出状況（東から）



2区 KS-170礫石跡検出状況（東から）



2区 KS-230礫石跡検出状況（南西から）



2区 KS-172礫石跡検出状況（南から）



2区 KS-16礫石跡検出状況（南東から）

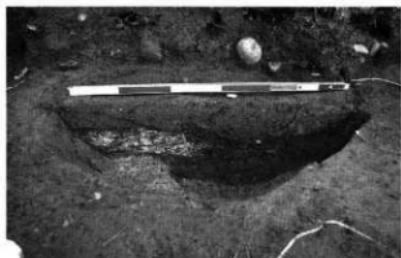


2B区 KS-210・211礫石検出状況（西から）



2区 大広間跡南側 ピット状遺構・土坑群検出状況（北西から）

図版2 大広間跡（2）



2区 KS-213土坑断面（東から）



2区 KS-163雨落ち溝跡上面土層断面（西から）



1B区全景（北西から）



1B区 KS-15礎石跡検出状況（北から）



1B区 KS-168礎石跡検出状況（東から）



1B区 KS-228礎石跡検出状況（南東から）



1B区 KS-162近代造橋完掘状況（北東から）



1A区全景（北東から）

図版3 大広間跡（3）



1A区 全景（北西から）



1A区 全景・遺構検出状況（西から）



1A区 KS-52雨落ち溝跡検出状況（北から）



1A区 KS-248石敷遺構検出状況（南西から）



1A区 御成門礎石（石材No14）・KS-182振り方検出状況（東から）



1A区 御成門礎石南側整地面検出状況（北東から）



1A区 御成門礎石西侧東西ベルト断面・
KS-247・169検出状況（北から）

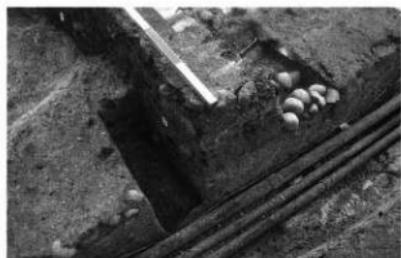


1A区 KS-247礎石振り方・
KS-183溝状遺構検出状況（西から）

図版4 大広間跡（4）



1A区 KS-179溝状遺構検出状況（南東から）



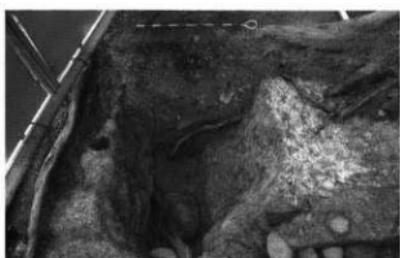
1A区 KS-179溝状遺構断面（南西から）



1A区 KS-185溝状遺構断面（西から）



1A区 KS-183溝状遺構検出状況（南から）



1A区 KS-183溝状遺構断面（南から）



1A区 KS-180・181溝状遺構検出状況（東から）



1A区 KS-180・181溝状遺構検出状況（東から）



1A区 KS-180・181溝状遺構断面（東から）

図版5 大広間跡（5）



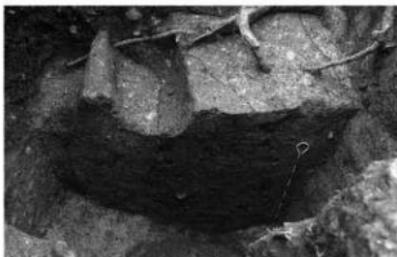
1A区 KS-178石敷溝状造構（東から）



1A区 KS-178石敷溝状造構断面（北東から）



1A区 KS-233掘立柱穴（東から）



1A区 KS-233掘立柱穴断面（西から）



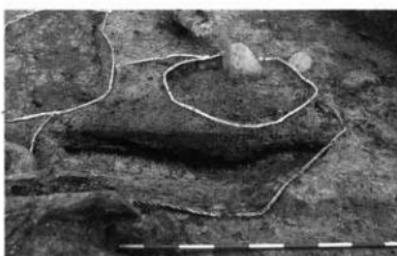
1A区 KS-246遺構（北西から）



1A区 KS-192柱穴（東から）



1A区 KS-195土坑（東から）

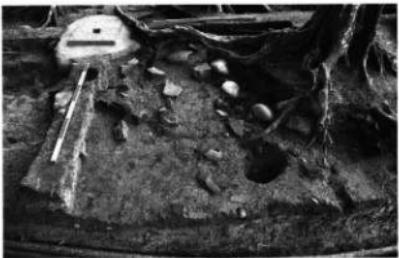


1A区 KS-198土坑（北東から）

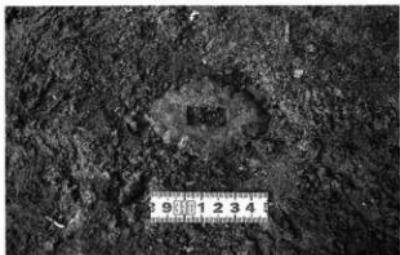
図版6 大広間跡（6）



1A区 KS-247 磚石掘り方瓦出土状況（北西から）



1A区 御成門礎石北側瓦出土状況（東から）



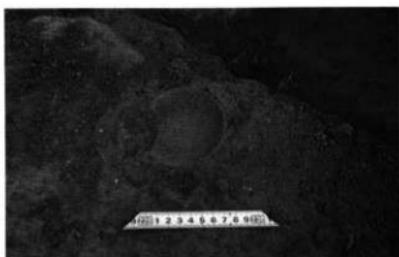
2区 金銅金具 [No.531] 出土状況



1A区 金銅金具 [No.59] 出土状況



1A区 鋼釘 [No.142・143・144] 出土状況



2区 土師質土器 [No.265] 出土状況

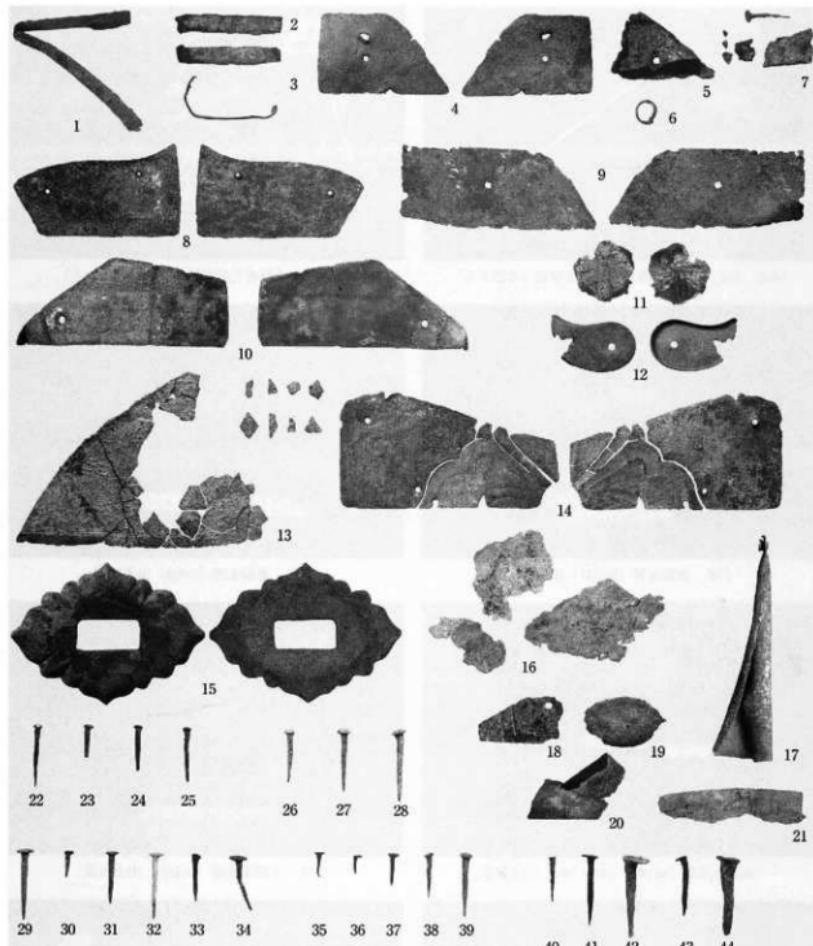


調査風景



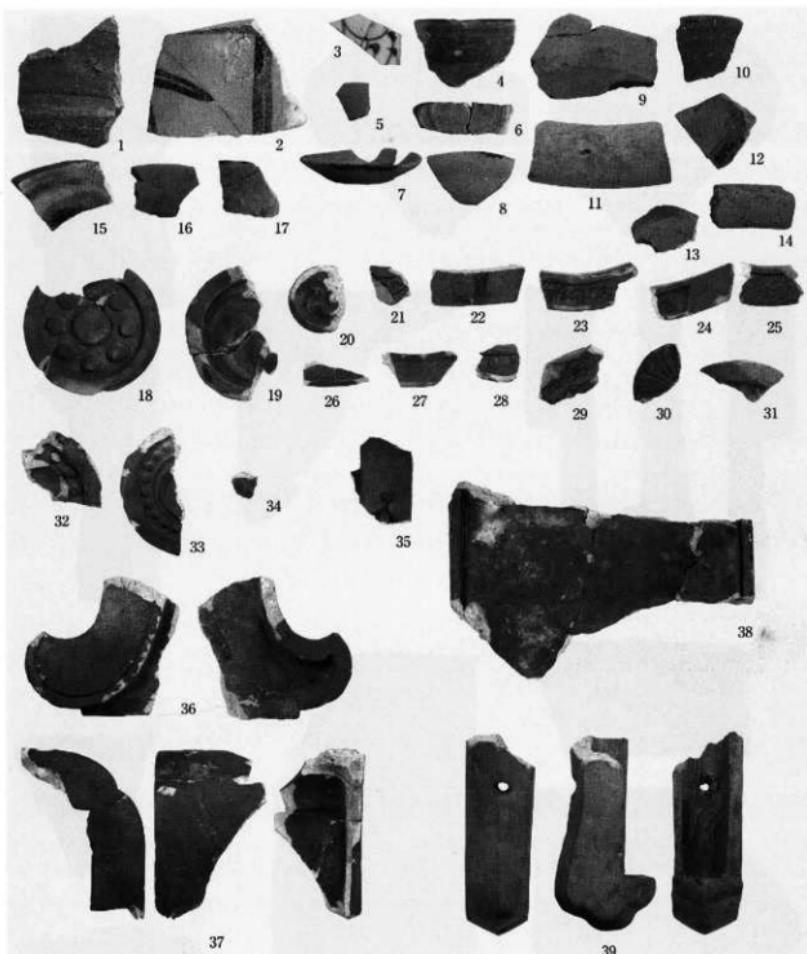
現地説明会風景

図版7 大広間跡（7）



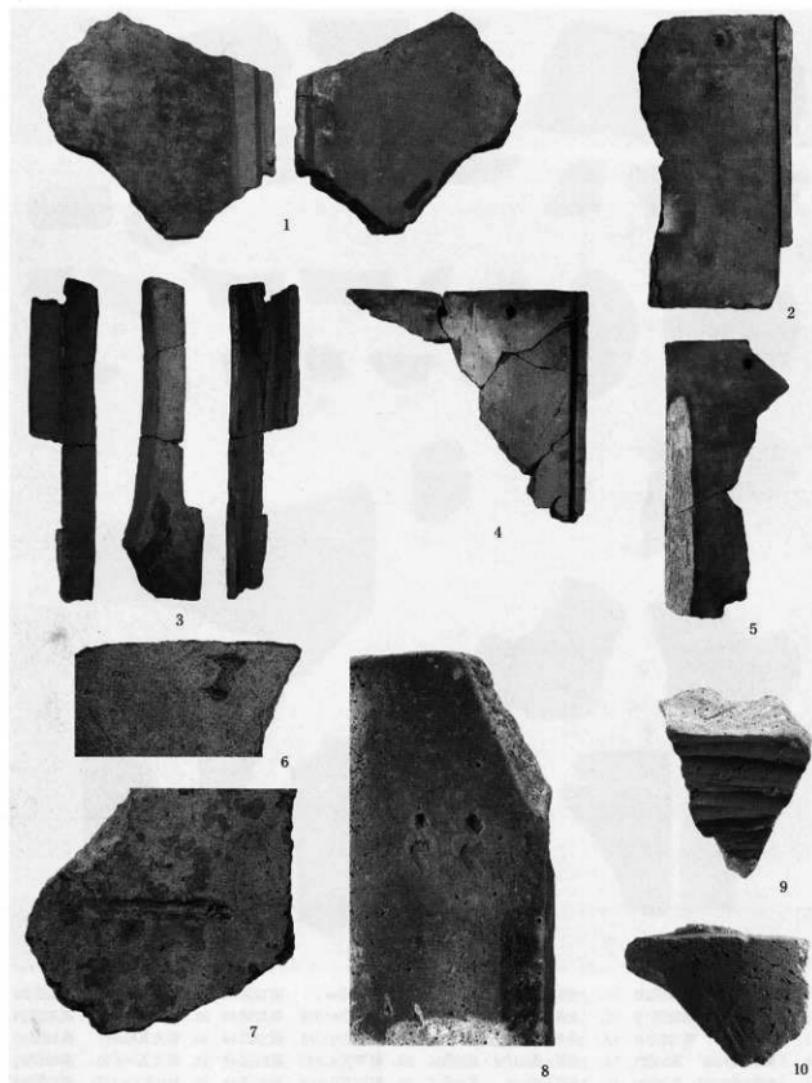
- | | | | | | | | |
|----------------|--------|---------------------|--------------|--------------|--------|--------------|--------|
| 1. 金銅金具No.2 | 第31図1 | 12. 金銅金具No.205 | 第31図12 | 23. 銅釘No.115 | 第31図26 | 34. 銅釘No.290 | 第31図37 |
| 2. 金銅金具No.30 | 第31図2 | 13. 金銅金具No.918-1 | 第31図14 | 24. 銅釘No.554 | 第31図27 | 35. 銅釘No.358 | 第31図38 |
| 3. 金銅金具No.31 | 第31図3 | 14. 金銅金具No.59 | 第31図20 | 25. 銅釘No.614 | 第31図28 | 36. 銅釘No.455 | 第31図39 |
| 4. 金銅金具No.50 | 第31図4 | 15. 金銅金具No.531 | 第31図24 | 26. 銅釘No.47 | 第31図29 | 37. 銅釘No.718 | 第31図40 |
| 5. 金銅金具No.285 | 第31図9 | 16. 金銅金具No.18-1-2-3 | 第31図17-18-19 | 27. 銅釘No.76 | 第31図30 | 38. 銅釘No.759 | 第31図41 |
| 6. 金銅金具No.322 | 第31図7 | 17. 金銅金具No.353 | 第31図22 | 28. 銅釘No.194 | 第31図31 | 39. 銅釘No.761 | 第31図42 |
| 7. 金銅金具No.289 | 第31図10 | 18. 金銅金具No.918-2 | 第31図21 | 29. 銅釘No.82 | 第31図32 | 40. 銅釘No.828 | 第31図43 |
| 8. 金銅金具No.165 | 第31図5 | 19. 金銅金具No.458 | 第31図11 | 30. 銅釘No.109 | 第31図33 | 41. 銅釘No.991 | 第31図44 |
| 9. 金銅金具No.190 | 第31図6 | 20. 金銅金具No.790 | 第31図13 | 31. 銅釘No.341 | 第31図34 | 42. 銅釘No.877 | 第31図45 |
| 10. 金銅金具No.35 | 第31図8 | 21. 金銅金具No.16 | 第31図16 | 32. 銅釘No.784 | 第31図35 | 43. 銅釘No.937 | 第31図46 |
| 11. 金銅金具No.400 | 第31図23 | 22. 銅釘No.563 | 第31図25 | 33. 銅釘No.641 | 第31図36 | 44. 銅釘No.964 | 第31図47 |

図版8 大広間跡出土遺物(1)



1. 陶器No.818 第32図20 11. 土師質土器No.819 第32図31 21. 軒平瓦No.7 第32図42 31. 軒丸瓦No.1189 第32図38
 2. 陶器No.552 第32図19 12. 土師質土器No.265 第32図27 22. 軒平瓦No.1092 第32図43 32. 軒丸瓦No.43 第32図39
 3. 磁器No.139 第32図16 13. 土師質土器No.884 第32図35 23. 軒平瓦No.1276 第32図44 33. 軒丸瓦No.611 第32図40
 4. 瓦質土器No.1085 第32図21 14. 土師質土器No.1119 第32図34 24. 軒平瓦No.283 第32図45 34. 軒丸瓦No.576 第32図41
 5. 土師質土器No.792 第32図23 15. 土師質土器No.820 第32図22 25. 軒平瓦No.654 第32図46 35. 鰐り鬼瓦No.1271 第32図56
 6. 土師質土器No.1003 第32図24 16. 土師質土器No.600 第32図30 26. 軒平瓦No.1200 第32図47 36. 鬼瓦No.1269 第32図54
 7. 土師質土器No.585 第32図28 17. 土師質土器No.652 第32図31 27. 軒平瓦No.883 第32図48 37. 鰐り鬼瓦No.1062, 430 第32図55
 8. 土師質土器No.265 第32図27 18. 軒丸瓦No.417 第32図36 28. 軒平瓦(滴水)No.282 第32図49 38. 檜瓦No.123-83, 1340 第33図7
 9. 土師質土器No.1091 第32図25 19. 軒丸瓦No.1191 第32図37 29. 軒平瓦(滴水)No.927 第32図50 39. 駒巴No.123-87 第33図1
 10. 土師質土器No.547 第32図26 20. 軒丸瓦No.981 第32図51 30. 菊丸瓦No.1040 第32図53

図版 9 大広間跡出土遺物 (2)



1. 塚瓦Na123-61 第33回5 4. 塚瓦Na123-13-18·
2. 塚瓦Na123-79 第33回6 48-95 第33回4 7. 平瓦Na1244
3. 骑巴Na1324 第33回2 5. 板塚瓦Na123-84-90 第33回3 8. 平瓦Na1302
第33回9 6. 冠伏筒Na1149 第33回11 9. 平瓦Na1157 第33回11
10. 丸瓦Na1129 第33回8

圖版10 大廣間跡出土遺物（3）



1区全景（南から）



1区 KS-236石組側溝（南西から）



1区 KS-235土坑断面（南から）



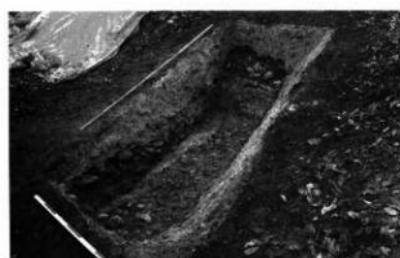
2区全景（北西から）



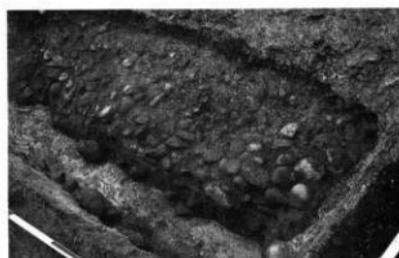
2区 KS-237石組側溝断面（西から）



3区 KS-243石組側溝全景（東から）



4区全景（北西から）



4区 Ⅲ層検出状況（北東から）

図版11 登城路跡（1）



5区 全景（南西から）



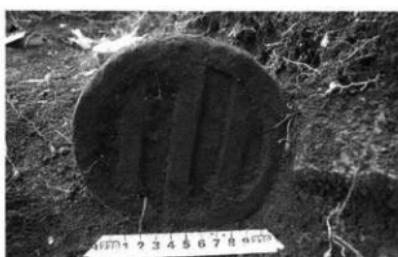
6区 全景（南から）



6区 KS-248土壌断面（東から）



1区 瓦出土状況（南から）



1区 三引両文軒丸瓦（No.4）出土状況



1区 笹文軒平瓦（No.294）出土状況

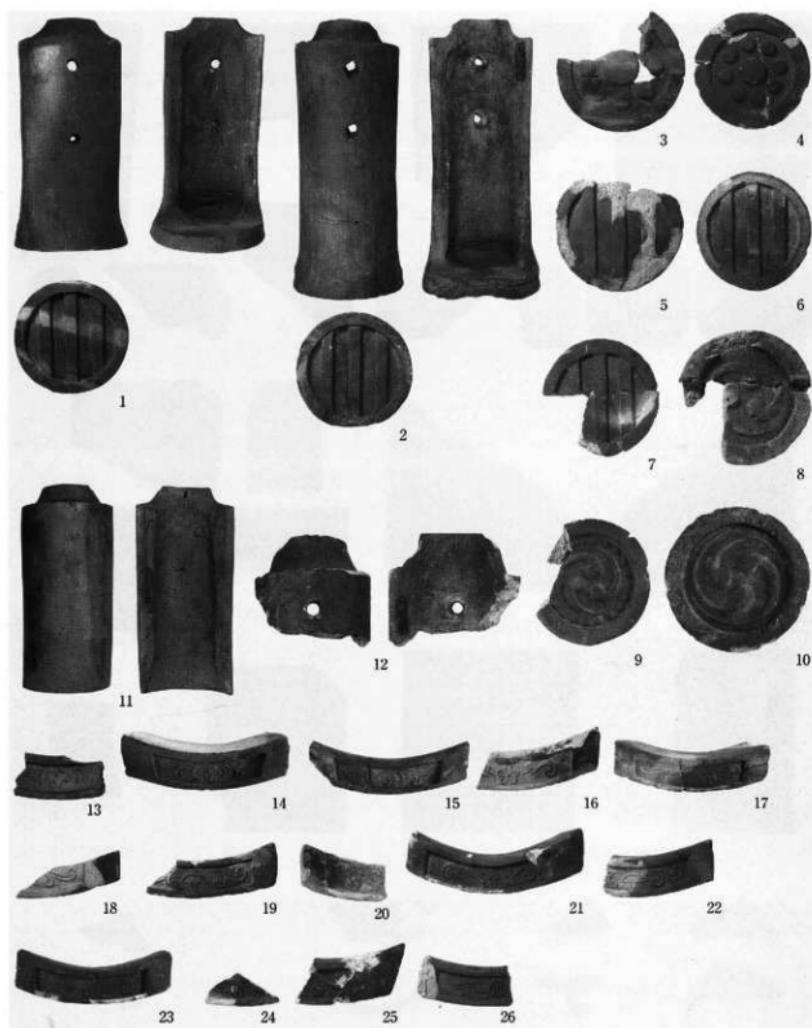


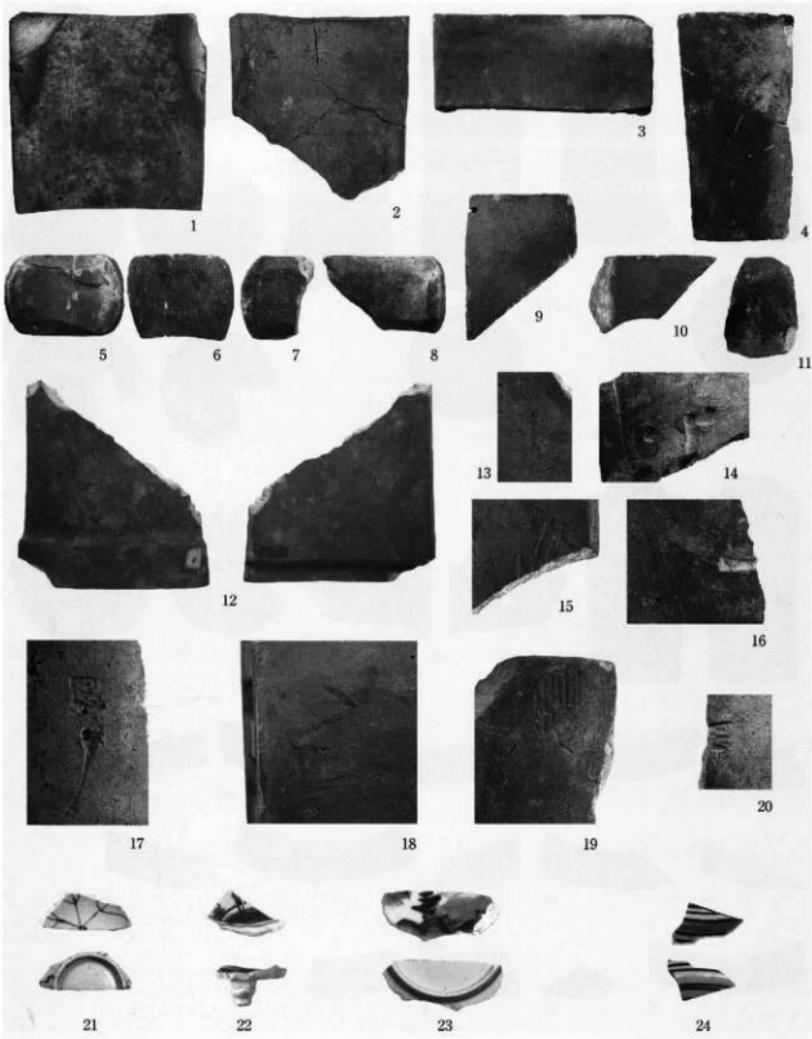
5区 中国産染付磁器（No.167）出土状況



4区・5区 調査風景

図版12 登城路跡（2）





1. 平瓦No34 第60図14 7. 面戸瓦No205 第61図3 13. 平瓦No369 第62図7 19. 面戸瓦No395 第62図22
 2. 平瓦No347 第60図15 8. 面戸瓦No207 第61図4 14. 平瓦No371 第62図13 20. 面戸瓦No404 第62図23
 3. 裁斗瓦No394 第60図17 9. 蓮具瓦(谷平瓦)No468 第61図5 15. 平瓦No389 第62図14 21. 磁器No163 第62図25
 4. 裁斗瓦No208 第60図18 10. 蓮具瓦(谷平瓦)No489 第61図6 16. 平瓦No373 第62図15 22. 磁器No119 第62図31
 5. 面戸瓦No519 第61図1 11. 行基瓦No204 第61図7 17. 面戸瓦No366 第62図21 23. 磁器No122 第62図32
 6. 面戸瓦No188 第61図2 12. 棒瓦No3 第61図8 18. 軒丸瓦No4 第62図17 24. 陶器No133 第62図37

図版14 登城路跡出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな せんだいじょうあと						
書名 仙台城跡 3						
副書名	-平成15年度 調査報告書-					
卷次	3					
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書					
シリーズ番	第270集					
編著者名	渡部 紀・農村幸宏・中山 純・伊藤 隆					
編集機関	仙台市教育委員会					
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町3丁目7-1 TEL022-214-8544					
発行年月日	2004年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	調査地点	コ 一 ド	調査期間	調査面積	調査原因
所 在 地	市町村 遺跡番号					
せんだいじょうあと 仙台城跡	宮城県仙台市 青葉区 川内地内	4100	1033			
		北緯 東経				
		仙台城跡 (全城) [第6次調査]	38°15'00" 140°51'20"	2003.4.18 ~ 2003.8.8	約145ha	
大広間跡 (3次) [第7次調査]	38°15'01" 140°51'35"	2003.8.4 ~ 2003.12.25	258m ²	重要遺跡の 遺構確認 調査		
登城路跡 [第8次調査]	38°15'00" 140°51'35"	2003.11.12 ~ 2003.12.25	58m ²			
青葉区 川内追廻地内	廣瀬川 護岸石垣 [第9次調査]	38°15'47" 140°15'47"	2003.12.9 ~ 2003.12.17		50m ² (立面)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
仙台城跡	城館跡	江戸時代	礎石跡・雨落 ち溝跡・溝状 遺構・石組築 溝・石垣・土 堀・掘切・平 場	金属製品・ 瓦・陶磁器	<ul style="list-style-type: none"> ・6次 仙台城全城に渡る遺構確認調査を行い、石垣や掘切、土塁などの残存状況を確認した。 ・7次 大広間跡の調査では、大広間南辺部の遺構を見出し、大広間東半部の南北規模を確認した。出土した金銅金具は江戸時代初期の技術の特徴を有し、大広間に使用されたものとみられる。 ・8次 登城路跡の調査では、石組側溝跡や土垣跡を見出し、砾で使用されたとみられる瓦などが多数出土した。 ・9次 幹瀬川護岸石垣の測量調査を行い、石積み状況を記録した。 	

教育局文化財課

仙台市文化財調査報告書第270集

仙 台 城 跡 3

— 平成15年度 調査報告書

2004年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 022(214)8544

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24-24
TEL 263-1166

